

---

# 恋愛不感症

汐井サラサ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛不感症

### 【Nコード】

N2517X

### 【作者名】

汐井サラサ

### 【あらすじ】

三十路を目前に、夫も子どもも居て何不自由なく暮らしている私。世間からいえばリア充と思われるいてもおかしくない。そう見えているはずだ。私はそう見えるように努力している。でも、本当は独りぼっち……あまりに孤独すぎて泣けてきた。

真っ白で無意味だった世界たちが、少しずつ色付いていく。

## 第一話

……一人で居て独りなのと 同じ空間に誰か居ても独りなのは

どちらがより独りなのだろうか……

見渡す限り白。

白い壁、白い天井。

広い窓には白いドレッシーなカーテンが掛かっている。

そして、私は四本の白い柱に囲まれた白くて広い寝台の上で、獣の相手をする。熱く、早く。打ち付けるような震動にぼんやりと身を任せる。

これは夢。

本当に夢。

私のもう一つの顔。

目の前の男は西の方の国で宰相閣下を勤めている立場ある人らしい。

そんな人が、こんな人形みたいな私を抱いて何が楽しいのだろうか？ いや、楽しいかどうか、そういうレベルで私は抱かれているわけじゃない。

彼はこの場所に”癒し”を求めてきている。そして、私の存在そのものがこの世界では”癒し”になるらしい。

夢の世界だからよく分からない設定だ。

実際の私は三十を目前に控えて、結婚もし、子どももいて世間的に見てもごく普通の奥様だ。一般的な概念に取り入れるなら、きつと十分に幸せな環境にいるのだろう。

でも私は、リアルでも、この夢の世界でも独りだ。

けれど、夢の中ではこうやって私を求めてくれる人が居る。リアルとは小さくてとても大きな違いだ。

私がこの夢を見始めたのはいつだったか、もうとても昔のようなそれとも最近のような。曖昧でよく分からない。最初はどれだけ私は欲求不満なのかと、頂垂れたけれど、こうも立て続け、毎日のように夢を見続けていれば、そこに何か意味があるのかも思い始める。

どうせ私は何年も一人で眠っている。どんな夢を見ようと私の勝手だろう。

夢の中での私の位置づけは『癒しの神子』だった。

私の声を聞き、姿を見、触れる。どれでも良い。それで人々は癒されるらしい。実際、手傷をおったものの傷が綺麗さっぱりなくなっただけもあるから本当なのだと思う。

その私は聖域と呼ばれる場所に建つ、この神殿の中に住まわされ、沢山の信者たちに囲まれて何不自由なく過ごさせてもらっている。

昼間は巡礼者に微笑みかけ、人々が救われますようにと声を掛け、そつと頭を垂れる彼らの額に手を掛ける。ただそれだけを繰り返しているだけなのに、人々の列は収まらない。

権力・財力のあるものはこうして夜伽に訪れることもある。

国なんてものを支えるためには、憂うこともあるのだろう。私には分からない。ただの遊女のようなものだと思ったこともあるけど、それなら普通に色町でその類の女性と遊ぶほうが楽しいはずだ。それなのに彼らは通ってくる。

他にも、北の国の騎士とか東の国の魔術師、南の国の王子、各国の王陛下なども顔を見せることがある。正直その全てを把握しているわけじゃない。

そして、全てこつやって関係を持っているわけでもない。求められれば断らない。性別も関係なく……それだけでもある。

私はただの人形で心は必要ないから。

「……………つく、つ！」

ぼんやりと考え事をし、天蓋を眺めている間に宰相閣下は達してしまつたらしい。

彼は達するまでに時間が掛かるくせに、そのあとは何事もなかったように夜が明けぬうちに寝台をあとにする。

「煌く星の輝きさえも奪つ月のような姫。この熱が冷め切らぬうちにまた、窺います……………」

天井を眺めながら、宰相閣下の残した言葉を復唱する。

馬鹿馬鹿しい。

何が月のような姫、だ……………。

恋愛的な感情なんて、私に一欠けらも持っていないくせに。口先だけで雄弁に語られる愛の台詞。私は馬鹿馬鹿しいとしか思えないけれど、

「……………寂しい」

好きとか嫌いとか、そんな感情を抜きにしても、つい先ほどまでは人のぬくもりがあった。

夢であつてもそういう感覚だけは鋭敏で、それだけは心地良いと思う。それがあっさり取り除かれてしまつと残るのは寂しさと虚しさだけだ。

ごろりと寝返りを打って、夢の中で瞼を落とす。適度な疲労感が私を夢の又夢へと誘っていく。

\*\*\*

…………… P P P …………… P P P ……………

「ん」

枕元に置いてある目覚まし時計の音で目が覚める。

カーテンの隙間から差し込んでくる朝日が眩しい。今日もくだらない一日が始まった。

私はいつもと同じように朝食の準備をする。主人と自分の分、子ども分の分。

毎日毎日用意する。

それなのに、なくなるのは私の分だけ。残りは私のお昼になる。みんな朝食を取るより五分でも十分でも長く眠っていたらしい。

それならそれで、私も作らなければ良いのだからうけど、もし、今日は食べていこうと気が変わったときに可哀想だと思い、毎日一応

何かしら用意する。

「いってきまーす」

とランドセルを背負った子どもが近所の子の誘う声に呼ばれて出て行った。それに続く形で夫も出て行く。

いってらっしゃいと、告げても帰ってくるのは「ん」の一言。いってきます。が正解だよ。もう、いうのも面倒臭くなった。

以前は夫の気を取り戻そうと躍起になっていた。

エステにも通ったし、骨盤ダイエットとかもやってみた。その甲斐あって、結婚前と体型はあまり変わらないと思う。

年齢と共に襲ってくる肌の張りとかは、もう、どうしようもないけれど。

「はあ」

鏡に映る姿を見て溜息。

心が離れているのか身体が離れているのか、もう私には分からない。その両方でないことを祈るけど、きっとそうなる日も近い。

子は鎡とはよくいったもので、何の特技もない私にはあの子を一人で育てていくだけの甲斐性がない。正直、そうなるのが怖い。だから、独りであることくらい我慢する。邪険にされるわけでも喧嘩を毎日しているわけでもない。

ただ、独りなだけだ。

洗濯機を回して、掃除をして……ネットオークションでも覗いてみようかな。そして、お昼を食べて、買い物に行つて、夕飯の準備をして……帰りを待って、また片付けて……毎日毎日毎日ほぼ変わることはないサイクル。

早く生き終れば良いのに。

ふと気を抜くとそんなことばかり考えるようになっていた。

「ねえ、もう一緒に寝ても良いかな？」

「疲れてるからいつもと一緒に良いだろ？」

「そ、そうだよ。うん……おやすみなさい」

一緒に眠らなくなったのは子どもが産まれてからだ。

夜泣きが酷かったし、彼には仕事があるから夜はちゃんと眠ってもらわなくてはいけなくて、必然的に私と子どもは寝室を出ることになった。

それからは一階の和室が私の寝室。子どもが一人部屋を持つようになった、今でも、だ。

今夜も、ぱんぱん。とお布団の端っこを揃えて眠る支度を整える。



## 第二話

\*\*\*

……珍しいな。

気が付いたら私はまた、いつもの神殿に居た。

私は、のんびりと緑の美しい中庭を散歩している。周りが全て白いもので覆いつくされているせいもあってか、そこにある緑が眩しく感じた。

中央には柔らかい水を、延々と循環させている噴水があり、私はその水盆に自分の姿を映す。

この世界では、私は現実より十歳前後若いような気がする。長い髪は、不思議な色をしていてエメラルドに輝く水面のようだと、皆が褒め称えた。

抜けるように白い肌、整ってバランスの良い目鼻立ち。柔和な雰囲気を持っている。

もうすでにそれは私ではない別の誰かだ。

「……神子姫様」

水盆の水を弾いて自分の姿を乱し溜息。丁度そこへ掛かった声に顔を上げた。

「皆が探していましたよ？」

「本日の参拝時間は終わっているでしょう？」

そうなのか？ 自らの口から発せられる言葉も良く分からない。

私は立ち上がってにこやかに歩み寄ってくる男に、にっこりと微笑んだ。癒しの神子、聖女なのだから常に穏やかで淑やかに微笑んでいれば良いだろう。

私は常にその体を崩さない。

そう思っているのに彼にはいつも調子が狂う。今日も、だ。

「貴方、また怪我をしたんですか？ 優秀なんて実は嘘なんじゃ」

「ああ、まあ、そうですね」

左腕の上腕が血で汚れていた。

そのまま来るなんて、この男くらいだ。彼は北の方の国の騎士。王陛下の側近で騎士のくせに盾になりたがる。だから向うことよりも受けることが多くて生傷が耐えない。

神殿に使えている人たちからは、とても優秀な人であると聞いたのだけど、そんな風ではない。

腕の届く位置まで歩み寄って、そつと傷口に手を伸ばす。切れて開いた袖の中を見れば肉が断たれている。それでも骨が見えていないからまだ浅い。

「痛くないの？」

恐る恐る、ちょこんつと触れると顔を顰めた。

そりゃ痛いに決まっている。

「痛いに決まっています」

本人もそういつている。

くすりと笑みが零れてしまう。騎士なのだから、そこは強がるべきだと私は思うんだけど。痛がる彼を無視して、私は傷口に触れ瞼

を閉じ、治ったときのイメージを頭に描いてぎゅっつと押さえる。

「っ！ も、っと優しく」

無視した。

もっと強く押してやる。

手のひらがじわりと暖かくなり、頭の中で光が弾けて溶けてなくなる。もう、傷は跡形もないはずだ。

ゆっくりと目を開くと、血の痕だけが残っていた。痕にならなくて良かった。あまりに酷い傷のときは一度では治らない。

「他にも傷がないか確認して貰いたいんですけど？」

懐いた犬のような顔でそう問い掛けてくる彼に私は断る術もなく私室へと向う。

彼は彫刻のように均整の取れた身体つきをしていて、とてもしなやかで美しい。

男の人に美しいというのもどうかなあと思うけど……。

そして彼は、騎士なんて身分のせいかとても優しく尽くすタイプだ。

誰かのために何か、というのが染み付いているのだと思う。そういうところはリアルな私に少し似ている。でも、決定的に違うのは彼は国民から、王陛下から信頼され必要とされているところだ。

居ても居なくても同じなのではないかと感じることでしか出来ない私とは全く違う。

「……タベ、誰か来てました？」

「来てましたよ」

寝台の中でもあっさり答える。

私はどうせ人形なのだから、誰かの持ち物ではない。強いていうならこの神殿の持ち物だ。隠すこともないだろう。

どうせ、誰もそんなこと気に止めない。

「痛くありませんでしたか？」

「分からないです……あまり覚えていないから……」

枕を背にして、座った私の服を丁寧に降ろしていく。

身体つきの割りに動きはとても繊細だから、心地良い。柔らかく身体を撫でてくれる手つきに、ゆっくりと双眸を落とした。

「傷、付いていますよ、こじ……」

「っ…」

ぺろりと、足の付け根を舐められて私は悲鳴を殺した。ちゅっと軽く吸い付かれ、ひりひりした感覚が少しだけ和らぐ。

私の恥ずかしく開かれた足の間から、顔を覗かせ見上げてくる彼の瞳は綺麗だ。

「神子様はご自身の傷は癒せないのだから、きちんと文句をつけないと駄目ですよ」

ぎしりとベッドを軋ませ私の目の前まで戻ってきて、そう告げると、つつと頬を撫でその指先で唇をなぞる。ふ……っと吐息が零れ、思わず頬が赤くなる。

無感情でいようと思っっているのに、どうにもペースを崩される。

「俺が優しくしてあげますから……」

言葉尻で吐息が重なり、唇は塞がれた。

甘く唇を吸い、微かに開いた唇から舌が割りいつてきて、歯列を丁寧に撫でる。そしてその奥へと入ってくる舌先を、自ら絡め取りそうになって慌てて引っ込めた。

私は動かない感情を持たない人形でなくちゃ……他がきつと辛くなる。

きゅっと瞳を閉じて、やわやわとした、丁寧な愛撫に身を任せた。彼はこの一時だけでも”私”を抱いていると感じさせてくれる。

私自身は他と同じように特に何もしないけど、思わず私も何かしてあげたくなくなってしまふ。稀有な存在だ。

そして、ことが終わっても朝までだらだらと私の傍に居てくれる数少ない人物でもある。

「……名前、聞いても良いですか？」

「神子姫で結構です」

夢なのだから、私が私である必要はない。

名前なんて必要ない。だから私は誰にも名乗らない。

しつこく聞いてくるのはこの男くらいだ。どうして、そんなものに拘るのだろう。この人だって国に帰れば恋人の一人や二人居るだろうし、もしかしたら、妻帯者とかかもしれない。

私が神子姫で、神に近い存在だなんて馬鹿げたことを思っているうちは、私はその痛みから解放される。私は誰も裏切ってい

ない。夢なのだから……。

枕してくれている腕の先が優しく私の髪を撫でる。こんなことしてくれるのは、夢の中では時折あるけど、毎回そうなのはこの騎士だけだ。

リアルでは絶対にない。

誰も、私に触れない。

指先が触れることも、頬を寄せることも、唇を寄せることもない。私なんて霞のようなものだ。

恋愛なんてものをしていたころは、甲斐甲斐しく触れてくれたし甘い言葉も掛けてくれた。夫婦になり、家族になったころから、私は……家に人数が増えていくと共に独りになった。

「……………え？」

「っ！ あ、す、すみません」

そんなことを考えていたものだから、思わず彼の胸に頬を寄せてしまった。私からなんて何もしちゃいけないのに……自分自身の驚きと羞恥心から私の顔は真っ赤になってしまった。

お日様が傾いてしまっていて良かった。きっとハッキリ見たり出来なはずだ。

慌てて顔を逸らし、背を向けた。

もう、帰ってくれば良いのに。

そう思いつけど、彼はそんなことはしなくてその大きな身体で私のことを包み込んでしまう。私に名を与えようとする。無感情に意味を持たせようとする。

正直、私はこの人が怖い。

\*\*\*

目が覚めると変わらない一日が始まる。

私はいつもと同じように動き、いつもと同じように過ごす。今日の変わったことといえばお隣りの愛犬が赤ちゃんを産んだことくらいだ。

見せてもらったけどずっとごくちっちゃくて頼りなさげで可愛かった。

そんなちっちゃなこれからの命にすら、羨ましいと思ってしまう私は本当に早く終わってしまえば良いと思う。

## 第三話

\*\*\*

「麗しき姫神子様、どうか私の思いを……」

「貴女を思わない日はありません、貴女のお姿を拝めない日は空に太陽が昇らないも同然……」

「神子様。貴女には最上級の贅沢が……」

……うるさい。

今日は朝からずっとこんな調子での謁見が続いている。

気持ちなんて微塵も籠っていないくせに。私に恋なんてしていないくせに。私なんて必要ではないくせに。

いざ戦になれば私の力が最大限に役に立つと思っている下心が見え見えだ。

困り込んだものの勝ち。

だから、私はどの台詞にもつつこりと微笑んで「ありがとございます」「光栄に思います」を繰り返す。

リアルにもうんざり。

夢の中でもうんざり。

結局私に居場所なんてない。

次に目を覚ましたら、もう、どこにも行きようがない、どこか遠くへと身を落とそう。きっとその方が楽だ。もう生き終わるのを待てない。

子どものことは心配だけど、でも、きっと私が親じゃないほうが



あの子には幸せだと思う。私みたいに誰にも相手にされない愛されない、

独りぼっちの女居ないほうが良い。

「……………本日の礼拝は終了しました」

礼拝堂に響いた声に胸を撫で下ろす。

馬鹿馬鹿しい駆け引きの時間が終わった。今日はみんな帰った。他人が居ても独りなのと、一人でいて独りなの、どちらが良いだろう。

そんなことを考えると自嘲的な笑みが浮かぶ。

今日はここにも居る気がしない。

さつさと目が覚めて、終わりを……………。

「神子姫様。良かったまだここに居たんですね？」

珍しい。

二日連続で彼が来た。

私が驚いて顔を上げると、いつもと同じようににこやかに大股で歩み寄ってくる。

「また、怪我をしたのですか？」

「まさかっ！俺そんなに怪我ばかり……………んー、まあ、してまうかね？」

私の意地悪な台詞に彼は苦笑して頭を掻いた。

彼は全体的に印象の強い人だからなんとなく仕草とか覚えている。つい、頭を掻くのは子どもみたいな癖だ。そう思うとちょっぴり可

愛らしい気がしてくる。

顔には出さないけど、こっそりと胸のうちだけで微笑んだ。

「他の国の騎士はそんなに頻繁に来ないわ」

「……ふーん」

あれ？ 声が翳った。

珍しい。いつでも明るめの優しい声色だから、余計に目立った気がする。

「昨日の傷口が傷むんです。もう一度見てもらえませんか？」

前に流れていた私の髪を一束掬ってそつと唇を寄せる。

髪の毛に感覚なんてないのに、その所作に、心臓がとくんつと高鳴ってしまった。

嫌だな……怖い。

「……嫌です」

思わず口から出てしまった。

出てしまったあとで慌てて私は口を塞ぎ「なっ、何でもありません」と首を振る。お人形は否定なんてしない拒んだりしない。私は

……

「お姫様はご機嫌斜めなんですかね？」

慌てる私とは対照的に、彼は人好きのする顔に笑顔を浮かべた。

「そんなこと、ありません……参りましょう」

こほんつと一つだけ咳払いして、表情を消すことに尽力した私はそれに成功したことを自覚して、踵を返す。

「待って待って、今日はこっち」

「はい？」

がしつと大きな手に手首を掴れた。

「街に出てみましょう？」

「え？ ですが私は」

「誰か、出ては駄目だといったんですか？ 俺は姫が良しとしないことはしてはならないということしか聞いてませんけど？」

「で、でも、そんなこと今まで誰も……」

私は夢の中でもこの籠の中にしかいなかった。

夢だからここより外があるなんて思ってもいなかったから。

「じゃあ、俺が初めてですね。なら、善は急げ参りましょう。貴女が消えてしまう前に、さあ、神子姫様」

ぐいぐいと私の手を引いて突き進む。

しかし、彼はふと手を止めて「それでは目立ちますね？」と、私を見て、礼拝堂に私を迎えにきたのだろう信者に事情を説明し身支度を整えてくれた。

夢の中の私はいつも白い服を着ていたし、他なんて何も考えていなかったから新鮮。少しジプシー風の服は、私の気分だけでもお話の中の遊牧民のように自由にしてくれる気がした。

「綺麗ですよ」

「そうですね、ありがとうございます」

褒められたのは服だと分かっている。私を、私個人を褒める人など居ない。

だから素直に照れもせず謝辞が述べられた。確かに丁寧な刺繍は職人技だと思っし、とても綺麗だ。スカートを少し引っ張ってその柄に魅入ると、顔が自然と綻ぶ。

「俺は……」

「はい？」

「いいえ、なんでもありません。行きましょう」

いい掛けてやめられると気になるのだけど、言及するのはきつとここでの私”神子姫様”らしくはないだろう。私は、ぐつと飲み込んで「はい」と頷いた。

そして、彼は神殿の大きくて重厚な扉をこともなく、ばんつと開く。西日が眩しく差し込んできた。思わず両目を閉じて、身を硬くする。

「大丈夫ですよ。お日様は貴女に悪さなどしません」

くすくすと笑う彼に「わかってます」と告げて、額に手を翳すとゆっくりと目を開く。

ここはとても高いところに建てられている神殿だった。

見渡す限りの大自然。

僅かに夕日の赤に染められる緑がとても優しい。長く続く道の先には小さく街並みが広がっている。

みんなこんなところまでわざわざ私に会いに来ていたのかと思うと、少し感慨深い気持ちになった。

「馬に乗ったことはありませんか？」

傍の大樹に馬を寄せていたらしい。

手綱を引いて私の傍に戻ってきた彼は、私が小さく首を振ると「それは、良かった」と微笑む。

出来ないことを喜ばれるのは初めてだ。

その気持ちが顔に出ていたのか、彼は馬の隣りで膝を折りながら私を呼ぶ。

「俺にも貴女にしてさしあげることが増えるでしょう？」

何が楽しいのか、彼はにこにこことそう告げて私の前に手を組み差し出した。

「え？」

「こちらに足を掛けてください」

私は神殿の中でしか生活しないし、さっき卸してくれたばかりだから、靴が汚れているということはないけど、それでも人の手に足を掛けるというのには抵抗がある。躊躇した私に「お一人では無理です」と微笑んで「さあ」と重ねる。

「……………ごめんなさい……………」

小声で詫びて私は馬の腹に手を置いて足を掛けた。

そして声を掛けたあと、ぐんつと持ち上げられ馬上へと上げられ

る。

「っー！」

本当に高いっ。

思わず眩暈を起こしそうになってふらりとすると、直ぐに鞍に足を掛け身軽に私の後ろへと乗った彼に支えられた。

「暗くなる前にいって戻らなくてはならないでしょう？ 急ぎますから、しっかり掴っていてくださいね」

そういって私にも手綱を握らせて、抱き込むようにしたら、ぱんつと手綱を弾いた。

道に両脇の木々が迫ってくるようで怖い。ジェットコースターに乗っているようだ。序にお尻も痛い！

でも……頬に当たる風が気持ち良い。

背にしたぬくもりが暖かい。

## 第四話

二十分くらいだと思う。

正確な時間は分からない。ずっと馬を飛ばして下つてくると堀に  
囲まれた街に到着した。

馬を預けにいった彼を待ちながら、ちらちらと門の中を覗き込む。  
夕方のせいか、みんな忙しそうに行きかっている。

厩は門番の傍にあり、彼はそこに馬を預け戻ってきた。

行きましょう。と差し出された手を取って街の中へと入った。

レンガで舗装された道はでこぼこしていたけど、なんだか楽しく  
目にする景色はどこか可愛い。童話の中の街みたいだ。

神殿の外はこんな世界が広がっていた。これまで出てこなかった  
のが惜しいくらいに素敵だ。

……… 凄い。

暫らく歩くと広場に出た。

その中央には大きな噴水があつて、水が踊っている。神殿の噴水  
はただ静かにお行儀良く、水を湛えるだけなのに、ぱしゃぱしゃと  
跳ね、西日を反射して煌いている。

「宝石みたいね」

キラキラキラキラ………輝いている。凄い。凄い！

生きてるみたいだ。

踊ってる、歌ってるみたいでもある。

凄い、凄い。

綺麗。

とても、綺麗だ。

私は彼の手を解いて気ままに歩いた。

道行く人は忙しく私に気を取られる人は居ない。時折、足を止める人が居るけど、声まで掛けてくることはない。

広場には人が集まるのだろう。

その周りにはお店が沢山軒を連ねていた。日用雑貨屋さんやアクセサリー屋さん、お菓子屋さん、ぱつと見て分かるのはそんなところだ。

……可愛い。

私がふと足を止めたのはアクセサリー店だ。

ショーウィンドウに飾ってある品はどれもアンティーク調のもので凄く可愛くて、静かにそっと煌きを押し留めている姿がいじらしい。

そういえば、私、こういうのが好きだった。

リアルでもすっかり忘れていた。

数字は書いてあるけど、物価も分からないし私は文無しだし、何より夢だから、見るだけだ。

暫らく眺めて堪能したあと、私は次に足を進めた。

次に足を止めたのは、お菓子屋さんだ。棚に並べられた瓶の中に綺麗で可愛いお菓子が沢山入っていた。

素敵。

綺麗。



可愛い。

私はこの短時間にこれを何度口に仕掛けて飲み込んだらう。  
どきどきとわくわくが一緒に押し寄せてきて、凄く高揚している  
自分が居る。こんな気持ちとても久しぶりだ。

「少し買ってきましようか？」

「うん！……っあ、い、いえ、私は別に……その……」

不意に声を掛けられて、思わず満面の笑みで振り返ってしまった。

恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい。

私はここでこんな役回りじゃない。

わたたと取り成したけど後の祭りだ。彼はにこにこして「噴水  
のところ、待っててください」と店の中に入ってしまった。

私は申し訳なく思ったものの、あとを追い掛けて止めるとい行  
為も彼にとって侮辱に当たるような気がして、いわれたとおり噴水  
のところまで歩いていった。

近くによると水が掛かりそうだと思ったのに、そんな杜撰ずさんな造り  
はしていなくて上手に受け止められている。

そして直ぐに戻ってきた彼に小さな瓶を渡してもらった。

「……ありがとうございます」

神殿に居れば、山ほど貢いでもらうから、何かを受け取るのはこ  
れが初めてというわけではないのに、凄くどきどきした。

手の上に載せられた瓶の中に入っているものが、物凄く高価な宝  
物のように感じる。

「これ、キャンディですか？」  
「そうですね、おまけに貰ったからこちらもどうぞ」

あーんつと続けられ、反射的に口を開けてしまった。

そこへビーンズくらいの大きさの飴が入られる。じわりと甘い味が広がる。

美味しい。

ふわふわと笑みが零れるような優しい甘さだ。

……幸せ。

そんなことを思ってしまった自分に驚いた。目が覚めたら、もう永い眠りにつくことを望んでいたのに、私ときたら何を考えているんだろう。

「可愛い」

「え？ あ、ああ。そうですね。とても可愛らしいです。それに美味しい」

驚いた。

一瞬私のことをいわれたのかと思った。

どんな自意識過剰だろう。恥ずかしい。そんなはずない。外見はどんなに取り繕ったとしても、私はもう誰からも愛されることのない空っぽの人間だ。

可愛いなどといわれて良いような人間じゃない。

私はどんな顔をして良いか分からなくて、手の中でキラキラしている小瓶を見詰めた。

「ですから、そうではないんですけど」

「えっ？」

「いーえ、何でもないです。そうそう、それから、これも」

にここごと楽しそうにそういつて彼は私にもう一步、近寄るとしやらりと首にネックレスを掛けてくれた。

「さつき、そのまま硝子破って持って帰るんじゃないかってくらい見ていたから」

「そ！ そんなことしませんっ！！」

「はは、そうですね。神子姫様がそんなことをするはずはない。そうですね？」

ふふ……と彼の表情に影が落ちる。

いつもはこんなことないのに、どうしたんだろう？

私が首を傾げると彼は元の笑顔に戻って話を続けた。

「そんなもの貴女がいつも身に付けているものに比べたらおもちゃも同然ですよ？ その程度なら俺の薄給でもいくらでもお贈り出来ます」

「そんなに沢山いららないです。これで十分……」

首から下がったペンダントトップを手のひらに載せて、夕日を反射させる。

透明度の高い黄色い半球体が光を反射してとても綺麗だ。

現実に持ち帰れないのがとても残念。

それに、彼も薄給だなんて謙遜も良いところだ。

私に個人的に会いに来るだけで、どのくらい掛かっているのか分からない。きつと普通の寄付金の額ではないはずだ。それなのに彼は私が顔を覚えるくらい頻繁に来ている。財力のない人間には絶対に出来ないことだと思う。

彼も騎士なんてしていなければ、傷の手当に私を必要とすることもないだろうに。気の毒な限りだ。ああ、でも、こういうのは経費で落ちるのかな？ そうだよな？ 彼が居ないとみんなが困るんだから彼への癒しは国の必要経費だ。

……そっか、だから、気負わずに通つてくれるんだな。納得した、つて、なんだかそれでは私が待つているみたいだ。そんなはずない、入れ替わり立ち代りいろんな人が来るんだ。私だって彼に拘る必要なんて何も無い。

彼の気まぐれな行動に一喜一憂するなんて間違っている。

ふ……と心に暗い影が差した。

私は、こうして神殿から連れ出してくれただけでも、彼に感謝すべきだ。どうして？ なんて考えるべきじゃない。

どこかしょんぼりと気分が萎えるのと同時に手に乗っていた宝石の色も翳った気がする。口の中の飴玉もその形をなくしてしまった。私も次に目を覚ましたら、これと同じで良いや……。

「好きです」

……え？

出そつになつた溜息を飲み込んだときに、不意に投げ掛けられた。

聞き間違い？

聞き間違いだよな？

顔を上げれば、彼が真つ直ぐに私を見ていた。

「え？」

「貴女が好きです」

今度は聞き間違うことが出来ないほどハッキリと告げられる。  
その瞬間、どくんと胸が高鳴った。

そのあとは痛いくらいに、どんどんと強く脈を打つ。

嘘だ。嘘だ、嘘だ……そんなこと有り得ない。

「このまま、俺とこの町を出ませんか？」

ほら、ほらほら……この人もやっぱり……

「わ、わた、しの、力が必要ですか？」

分かっていることなのに、なんで今さら声が震えるんだろう？

そうだ、私個人が必要とされるわけじゃない。彼らにとって必要なのは私の持っている力。

私が必要だなんて、そんなわけない……。

その証拠に、彼は曖昧な笑みを浮かべてバツが悪そうに頭を掻いた。

「俺は、生傷の絶えない騎士ですからね？」

そうだ。

傷を一時でも早く治すためには私が必要。私がいれば、どんな傷でも大抵は治ってしまう。こんな重宝する道具は他にないだろう。手元に置けば経費も掛からなくなるだろうし。

……私である必要なんて、ない。

## 第五話

「貴女に会うためには、条件があつて、金も必要ですが、それ以上に”傷”が必要なんですよ」

当たり前だ。

私は”癒しの神子”としてこの世界で重用されているだけだ。傷がない人間は私になんて興味を持たない。

持つ必要がない。

こんな詰まらない人間。

癒す力さえなければ不要だ。

「俺は貴女が好きで、それだけで満たされてしまうから心の傷は作れない。どんなに心に傷を負っても、貴女の顔を見てしまえば勝手に癒えてしまう。だから生傷を増やすしかなかった……貴女に会いたかった」

何をいつてるんだ、この人は。一体何を。

……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……

「時折深すぎる傷は貴女を苦しめて、悪かったと、そう、思っています。刀傷なんて本来女性に見せるようなものじゃない」

私は信じない。

もし、もし、今この人がいつていることが本当でも、そんなもの長くは続かない。

「ああ、でも、いつも表情も態度も崩さない貴女が、そのときだけは苦悶の色を浮かべるので、俺は少し嬉しかった……俺のことで貴女の心が揺れていると思ったら、心は満たされた……なんていったら晒えますか？」

「そんな、こと」

分からない。

それは晒うところなのだろうか？ だって、彼はいつも舐めたら治るような軽い傷ではなくて下手をしたら、一生物の傷になってしまふようなものばかり抱えていて……。

「癒しの神子の評判を聞いて、一度見てみたいという好奇心に駆られて足を運んだのが最後、俺は貴女から離れられなくなった……傷さえあれば、貴女の瞳に俺を映し、俺だけのために発してくれる声を聞き、俺だけのために時間を取ってくれる。一分一秒も無駄にしなくありませんでした」

真摯に私だけを見詰めてくる瞳は、夕焼けにキラキラと輝いていてとても綺麗だ。

けれど、その瞳に映る私は、本当の私の姿ではないし、私に向けてくれるその気持ちだって、今は、たまにしか会わなくて、そのときしか触れることが叶わないからそんな風に恋に似た感覚を抱いているだけだ。

どうせ今はそんな風に熱情を見せてくれていたとしても直ぐに冷めてしまう。

そして、それはまた、私を独りにする。

私はもう、独りにはなりたくない。

独りは嫌だ。



現実でも、夢の中でも……そんなの、そんなの哀しすぎる。  
嫌だ、信じたくない。

こんな中身のない私を好きになる人なんて居ない。好きになっても直ぐに飽きられてしまう。

わかってる。

わかってるのに！

どうして……どうして……今、私は一瞬嬉しいと思ってしまったんだろう。

愛情表現なんて毎夜毎夜様々な形で寄せられるのに……心なんて動かなかつたのに……この人は危険だ。この人は怖い。私の心を惹き付ける。

「……姫……」

何もいえない私の頬に彼の手が掛かる。私はずっと彼を見ていたはずなのに目の前の彼の姿をハッキリと捉えることが出来ない。ゆらりと揺らいで輪郭がぼやける。ぱちりと瞬きをするとはらはらはらっ頬の上を雫が伝う。

どうしよう、止まらない。

はらはらはらはら、意味の分からない涙が溢れる。

嬉しいの？ 違うよね。

じゃあ、悲しいの？ 分からないよ……。

ただ、ただ、苦しい。苦しくて苦しくて、胸が痛い。どうして痛いのか分からない、分かるのが、怖いよ……。

「すみません……えっと、その、泣かないで。姫を恋い慕うものは

沢山居るのに、姫に迷惑を掛けるつもりは、あ、ああ、いえ、全くなかったといえは嘘ですが……けれど、泣かせるつもりはなかった。本当に、ごめん、そんなつもりでは」

不安げにそつと彼の指が頬に触れる。

反射的に身体をびくりとこわばらせてしまった。

その動きに彼は刹那指を引っ込めようとしたけれど「泣かないで、ください……」ともう一度頬に触れた。

私は泣くときはいつも独りだ。

いつも独りで泣いて独りで身体を小さく抱え込む。弱りきった心も一緒に独りで抱えて……。

誰も、泣いている私に触れたりしない。

本当は触れて欲しい。泣き止むまで抱き締めて欲しいし、大丈夫だと嘘でも良いから慰めて欲しかった。それなのに、リアルで、あの人はそうしてくれない。泣き虫な私に呆れて「何で泣いているのか分からない」冷たくそう告げるだけ。

私も分からないのに、ただ、ただ、虚しくて余計に涙が溢れた。

「驚かせてしまいました、よね？ でも、真実なんです。貴女が表情を崩すたび、俺に新しい顔を見せるたび、俺はどうしようもなく貴女が愛しくなる。泣いても良いですから、俺を傍に置いてください……貴女の心に寄り添わせて……」

頬に触れていた指先が気遣わしげに目元を拭い、頬を包む。開いていた手が、少しだけ戸惑って、でも、決意したように、つっと顎に掛かった。

そして、そのまま軽く上を向けられて唇が重なる。

「…………ん、…………うん」

驚きに見開いた瞳を落としかけて私は反射的に彼の胸を、どんっ  
！ と押し突き放した。

「う、ごめんなさいっ！！」

そのまま私は逃げ出した。

入り組んだ街ではないから直ぐに入ってきた門を発見出来た。そ  
して……

\*\*\*

「っ！ はあ、はあ、はあ…………」

私は飛び起きた。

「う、ううっ」

まだ心臓はどきどきと高鳴っていた。

もう何もぶら下がっていない胸元を握り締めて私は咽び泣く。突  
っぱねた腕が震える。

彼を傷つけた。

物凄くショックを受けた顔をしていた。

自分が傷つくのが怖いばかりに彼を傷つけた。

最低だ。

私は最低……あんなに笑顔が似合う人だったのに。夢の世界で始めて”私”を見てくれた人だったのに……。何度も何度も心の中で謝罪した。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめん、な、さい。」

何度も何度も繰り返したけど、当然のように答えはない。

「おい、どうかしたのか？」

夢なのに、一瞬彼かと思った。

けれど、やはり現実で、ほんの少しだけ開いた襖の隙間から主人が顔を覗かせていた。私は咄嗟に後ろめたい気持ちになってしどろもどろで答える。

「え……あ、その、ご、ごめんなさい。怖い夢を見て」

「うるさいからさっさと寝ろよ」

「……は、はい。ごめんな、さい」

最後まで聞くことなく、かつんと襖は閉められた。

これが、私の現実。そして、今度はこの現実を思っただけ涙が止まらなくなつた。

ほら、ね。

これが、現実。誰も私に触れてはくれない……夫さえも触れないのに、他に誰が私なんかを愛してくれるというんだろう。

だから、私はいつものように、震える身体を自分で抱き締めた。強く強く。何度も平気だと慣れっただから、辛くないと重ねて。

……泣いても良いですから、俺を傍に置いてください……

夢が、現実なら良かったのに。

…… P P P …… P P P ……

「……ん」

ぱちんつと自分の傍に置いておいた目覚ましを止める。

あれから私は纏めて睡眠を取らなくなった。五分とか十分とかの短い睡眠を時折取る程度。必ず目覚ましは掛けるようにした。

このくらいなら、私は夢を見ない。

また、あの夢の世界に落ちるのが怖い。傷付いた彼の顔を見るのが怖い。例え長くは続かないものであったとしても、あのとき彼は真剣だった。

今思い返せば、確かに彼の傷は自分でつけられるところばかりだった。背中はとても綺麗で「背に刀傷を受けるのは恥だから死んだほうが良い」と笑っていたのを思い出した。

自傷行為はとても辛かっただろう。

いつだって私のところへ来たときの傷は浅いものではなかった。でも、躊躇い傷一つなかった。彼の真摯な思いをそのままあらわしているようだ。

……心に傷を負っても、貴女の顔を見れば勝手に癒えてしまっ……

はにかむようにそういつてくれた。

そんな彼に、私は何も出来なくて、それどころか傷つけて……い  
つでも、彼は優しかった。他の人みたいに建前だけの褒め言葉を並  
べるような人ではなくて、何の飾りもなく、ただ好きだと伝えてく  
れたのは彼だけだった。

## 第六話

好きだよ。

愛してる。

可愛くて、綺麗で、君以上の女性は居ないと思っている。

オレは君と居られるだけで幸せだよ。

そういい続けてくれたのは現実の主人だ。けれど、結局それも今の体たらくだ。

きつと彼も同じようになる。

私に中身がないから。きつと無関心になって、私なんて邪魔になつて、私はまた独りになつて……夢でまで、好きだと思つた人に独りにさせられるなんて堪らない。

好きだと思つた……思わず自分の考えたことを繰り返して苦笑する。そう、好きだと思つ。夢で恋をするなんて馬鹿げてる。分かっているのに、止まりそうにない気持ちも怖い。

だから、私は眠るのが怖い。眠りたくない。あの人に会うのが怖い。

それに、ほんの少しだけ本気の好きは、主人に申し訳ないような気がして、後ろめたい部分もあつた。

それなのに、人間は本能的に睡眠を欲する生き物で、私は十日と持たないくらいで倒れてしまった。丁度、週末で主人が家に居て……私は、必死で起き上がるうと傍にあつたテーブルを掴んだのだけど、つるりと滑って膝から落ちる。

そんな私に歩み寄ってくる足音が聞こえて「ごめんなさい、大丈夫だから」と口に仕掛けたところで

「普段から、調子が悪ければ医者に掛かれといっているのにっ！  
そんなになってっ！ オレの立場も考えるよ」

そう罵られて、私は意識を手放した。子どもが遊びに出ていて、  
本当に良かった。

後ろめたいなんて思った私は、本当に、馬鹿だ……

\*\*\*

「つく……ひつく……」

気が付けば、私はやはりいつもの神殿に居て、私室の寝台に突っ  
伏して泣いていた。

私は主人のお荷物でしかなかった。

私が居るばかりに彼に迷惑を掛けてしまっていたんだとやっと気  
が付いた。

居るだけなら許されると思っていたのに。

私、は……。

涙があとからあとから湧いてきて全く止まらなかった。

「……………姫様？」

かたんと扉が開く音がして、信者の一人が部屋の前に立っ  
ていた。私がおしおしと顔を拭いて、そちらを見ると「神子姫様っ！」



と悲鳴のような声を上げて駆け寄ってきた。

「どこ、どこですかっ！」

話を聞けば、私は誘拐されてしまっていたことになっていたらしい。

普段ならそう大して時間は過ぎていなかったのに　確かに十日もこの夢を見ないなんてことはなかったけれど　最後に一緒に居たのが北の国の騎士だったことから、彼が捉えられ尋問という名の拷問を受けていたらしい。

そして、そのことで各国の調和が崩れ始めている。

「誤解ですっ！　私はちゃんとここに居ますっ。誰にも誘拐などされていませんっ！」

地下牢　懲罰房　なんてものがこの神殿の中にあつたことから吃驚だ。私は現実も夢の中のことでも全く何も知らないに等しかった。

私は、ことを知らせてくれた信者に案内されて、駆けつけた場所でありふり構わず叫んでいた。

「神子姫様、今までどちらにっ」

「早くっ！　早く鍵をっ！」

状況説明を促す牢番から、私は半ば無理矢理鍵を受け取って、その奥へと駆け込んでいった。冷たい岩牢はその殆どが空室だった。

「……………今っ！　今開けますからっ！」

一つ一つ確認して、最奥の部屋に彼は囚われていた。  
両手を壁に固定されて酷い拷問を受けていたようだ。焦るとどの鍵が分からなくなる。取るのももどかしく、がちゃがちゃと派手に鍵を鳴らす。

ああっ！ もう、どれなのっ！

「……あ、れ……み、こ姫さま……」

「待つて、待つてね！ すぐ、直ぐに助けますっ」

「そん、なに、焦らないで。怪我はありませんか？ また、泣いていたんですか？ 大丈夫、夫、ですか？」

满身創痕の人にいわれたくない！ 私の心配なんてしている余裕ないでしょっ！ と、怒鳴りたいところだけど、まずは鍵、鍵っ。

あ、やっと入ったっ！

乱暴に扉を開けて雪崩れ込むように駆け込むと、手鎖の鍵は直ぐに見付かった。他のものより二周り三周り小さかったから。

かちゃ、かちゃ……と、背伸びをしてようやく届く鍵穴に鍵を差込み、震える指先でなんとか回す。

「どうして、自分は関係ないっていわないのっ！ 私を誘拐なんてしていないでしょうっ！」

「貴女が、居、なくなっただのは事実、です」

「でも、貴方のせいじゃないっ」

「ふふ、怒ってます、ね」

「当然ですっ！」

かちやり……。  
やっとなつ外れた！

重力に従って落下した腕は、そのまま私の身体を抱き締めた。  
怒る私を無視して、彼は私の腰を抱いたまま肩に顔を埋める。

「俺のために怒ってくれるんだ……」

馬鹿みたいに当たり前のことを、感慨深く掠れる声で告げて、身を寄せてくれる彼からは血の臭いがする。彼の痛みを思うと、どうして逃げ出してしまったのだろうかという後悔で私はまた涙が溢れた。私が泣いている場合じゃない。

「は、離して、まだ片方が……」

「嫌だ、離さない……貴女の、居ない、世界に用はない……どうでも、良いかと、思ったんです」

「私が戻るとは、思わなかったんですか？」

そんなの、薄情だ。

私はこの世界に居たり居なかったりは常だったのに、それなのに、その可能性を望まなかった。

「俺、姫様に嫌われたから……戻っても会ってもらえないと思いましたが……ふふ、それ、なのに、こんなに取り乱して、必死になって、ふふ、お、かしい……おかし、過ぎて、涙が、出ます」

尚腕に込められる力は痛いくらいだったけど、彼から伝わる熱い吐息は本当に泣いているときのもののように私は離せといえなくなつた。

その代わりに私は地面に踵を降ろし、そつと彼の背に腕を回す。

「ねえ、分かってますか？ 私、癒す以外に特技ありませんよ？面白い話も得意ではないですし、正直、淑女っぽくお姫様らしくしているのも大変です……」

「構いませんよ……だって、俺は、剣以外でも割と小器用にこなします。面白い話も姫が望むならなんでもします。貴女の前だけなら、紳士っぽくしていられますから、ね……」

そして、お互いに笑いあった。

変なの。

こんなところで笑いあえるような理由なんてないはずなのに、胸のどきどきがとても心地良くておかしくて仕方なかった。

おかしくて、おかしくて……とても、嬉しくて……どうしようもなかった。

「手、解きますね」

本当はもう少しこうしていたかったけど、抱き締めてもらつならやはり両腕が良い。

私はそつと囁いて、腕の力を緩めてもらつと、残りの拘束も取り外した。かくんつとその場に膝をついた彼に合わせて私もその正面に膝をつく。

いったた……と、顔をしかめつつ立ち上がろうとする彼の頬を両手で包み込んで、私は、すつと顔を寄せ何かいい掛けた彼の口を塞いだ。

口の中にも恐らく傷があるのだろう。

時折息を詰めるのを、我慢してもらって私は深く濃く口付けた。

どきどきと胸が高鳴り身体が熱くなる。

もつと、もつと長く……そう思ったのに、私の肩に掛かった腕が私を静かに引き離す。名残惜しげに、つっと引いた糸がぷつりと切れると、彼は、ふ……と笑みを浮かべた。

「これ以上、今ここで俺を癒したら我慢出来なくなります。地下の岩牢で、なんて、マニアックな真似お嫌でしょう？」

くすくすと悪戯をするときのようになつ彼に、私は、ぱあつと頬を染めた。

「冗談はやめてくださいっ！ と怒ったものの、今だけは私に”癒す”なんて力があつて良かったと本気で思う。

その証拠に、彼は自分の二本の足でしっかりと立ち上がり、私の手を取ってくれた。

地下牢を出ると、待ち構えていた信者たちに私は掴り という  
と失礼だけど 状況説明を促された。

これからのことは分からないけれど、これまでのことは何とか納得して貰えたところで、夜は更けてしまった。これまで無口で通していたのに、いきなり沢山の話が強要され、ぐったりと部屋に戻ると「お疲れ様です」と彼が迎えてくれた。

私は窓辺に立っていた彼に駆け寄るとそのままの勢いで抱き付いた。

## 第七話

「大丈夫ですか？」

問うて見上げれば、彼は微笑んで「元気ですね」と私の腰に両腕を掛ける。

そのとき、はたと我に返り自分がここでこんなキャラではなかったと思い出したけど、きつと遅い。私はいつもどうやって表情を封じていたのか、良く分からなくなった。

「俺は大丈夫ですよ。姫が取り成して下さったお陰でこれ以上の言及は間逃れました」

「……そう、良かった」

私はまた視界が緩む。ほっとしたら、浮かぶ涙を止められなかった。

「なんだか俺、姫を泣かせてばかりですか？」

いって優しく涙を拭い、目尻を軽く吸ってくれる。困ったような口ぶりなのに、その声はどこか嬉しそうだ。

そんな彼の様子が私も嬉しく、甘い熱が身体を包んで直ぐに涙は引っ込んでくれた。

「もっと、よく顔を見せてください」

大きな手が頬を包み込み、私を真っ直ぐに見詰めてくる。

ゆるりと細められた瞳はとても幸せそうで、私が少しでも彼を幸せにしているのだったら嬉しいと思うと私の顔も綻んだ。

「どこも、痛くしていませんか？ 傷をつけられていませんか？」  
「……………私は、平気です」

今なら分かる。彼が私に会っただけで心の傷は癒されてしまうと  
いつていた意味が。

私も、ここで目が覚めたときは心が痛くて苦しくて、身体中の筋  
肉が強張って、このまま痛みで死んでしまっんじゃないかと思った  
くらいだったのに、今はどこも痛まない。それどころか、身体中に  
心地良い熱が宿り、自分でも暖かく柔らかい空気を醸し出している  
のが分かる。

「本当に、すみませんでした。私、あんなことになっているなんて、  
思わなくて……………恐くなって逃げ出してしまっていて……………」

「何が、恐かったんですか？」

いいつつ、彼はそっと両手で私の頬を包むとそのまま顔を寄せて  
唇を重ねた。

「ん……………」

彼のキスは本当に甘くて……………いや、本当に味覚的に甘い……………？  
湧いた疑問と同時に、口内に何か移されて私が驚いたのを感じ取る  
と彼は楽しげに離れた。

ころりと舌で転がせば、ほんの少し懐かしい味がする。

「これ、忘れ物です」

微笑んで、どこに隠し持っていたのか私の目の前で小瓶を振った。  
その笑顔に私はまた胸が熱くなる。鼓動が早くなる。

夢、夢、夢……これは夢だ、分かっている。

分かっているけれど私の胸はどこまでも熱くなる。私の心はときめいてしまう。

私の住まう現実世界での痛みも、ここでなら忘れていられる。

もう、ここが夢であることも、現実ではないことも私にはあまり関係ない。

「……き、だから」

「ん？」

だから私は勇気を振り絞る。

「好き、だから、貴方から私への気持ちが変わる日が来るのが恐かったんです。恐くて、恐くてたまらなかった。私の心だけが貴方を好きなままで止まってしまって、私だけが残されて、私だけが……また、独りになる日が来ると思ったら怖かった」

「そんなこと、しませんよ」

当然のように笑うけど、人は弱いし、たった一人を思い続けるなんて無理だ。

だって、現に夫は私を見なくなって、私は夢に逃げてしまいその上その住人を好きだといっている。本当に馬鹿げている、馬鹿げた話なのに……私は今、この人が愛しい。

「でも、私はとても詰まらない人間で……」

「お人形をやめた今の貴女はより魅力的ですよ。詰まらないか詰まらなくないかなんて、貴女自身が決めてはいけません。俺が決めるんです」



そんなの、そんなの余計に心配だ。

それが顔に出ていたのだろう、彼はくすくすと笑って私の頬に唇を寄せ、唇の上にも可愛らしいキスを落としてこつんと額をくっ付けた。

「大丈夫、俺が、いくらでも貴女の魅力を引き出してさしあげますから……貴女はまだ、ここでお人形であったように、隠している引き出しが沢山ありますよ……」

こつんと彼の人差し指が私の胸を突く。

その小さな所作から熱が身体中に広がるような感じがした。

「尽きたらどうするの？」

「心配性ですね？」

ネガティブ過ぎる私の問い掛けにも彼は動じることなく、はつきりと何の問題もないというように答えてくれる。

「そのときは作れば良いんですよ。大丈夫、大丈夫です。俺がいくらでも貴女を変えてあげますから……そして、そんな俺が不要になつたら貴女はいつでも俺を切り捨ててください。貴女はいつでも自由を選択出来るんです」

愛しています、心から……いつて今度は深く濃く唇を奪われた。ゆっくりと瞼を落としながら私は思う。

ああ、そつだ。

彼はいつもこつやって、私を味わうように抱いてくれていた。

丁寧にじっくりと、性急過ぎることなくお人形のように全く面白くもない私を時間を掛けて愛してくれていた。

私はそれに気がつかないフリをするのがいつも大変で……そればかりに意識が回っていた。

「……………ん……………つぶ、う……………ねえ、神子姫様」

「ん、う、はい」

「姫様は、毎日何百という自己紹介を聞く身でしようから、俺の名前なんて覚えていないと思うのですが……………」

楽しみにそう告げる彼に私はとても申し訳ない気持ちになったが、彼は気にする素振りなく、そして、何の予告もなく私を抱き上げると、そのまま寝台へと運びふわりと降ろした。

少しひんやりとしたシャツが身体の熱を奪って行って、気持ち良い。思わず、瞳を細めた私に彼も優しい笑みを零す。

そして、自身もぎしりつと寝台に上がるとそつと私の前髪を梳いて額に可愛らしい口付けを落とし、にこりと口角を引き上げた。

「あのですね、俺の、俺の名前はレイアスというんです」

「れい、あす……………レイアス……………とても、綺麗な名前ね」

そう告げられて、自然と名を繰り返し微笑むと、レイアスはほんの少しだけ恥ずかしそうな、でもとても嬉しそうな顔をして「はい」と返事をしてくれた。

「あのね、レイアス……………私の、私の名前は……………」

\*\*\*

そして幸せに満たされて目を覚ますと、私は案の定病院のベッドの上で眠っていた。人ってなかなか死なないものだ。

当然のように傍には誰も居なくて、やっぱり一人ぼっち。

お日様が高い位置にあるから、夫は会社で、子どもは学校だろう。

それでも私は以前ほど寂しいとは思わなかった。

物理的に一人だけど、また眠りにつけばレイアスに会えるだろうし、彼は私を愛してくれる。

思えば私のあれが想像上の世界であるなら、きっと彼は本当に愛し続けてくれるだろう。とても、馬鹿げているけれど、現実の世界で誰にも目を向けられることなくなくなってしまった私には、それすら大きな救いになる。独りを思っただけ泣かなくて済む。

それにしても、私は現実の夫に拘りすぎていたのかもしれない。

なんとか距離を詰めないとそのまま離れてしまいうそで、頑張つて頑張つて歩み寄ることだけを考えていた。そして、自ら家庭という籠の中に収まって中から外を羨むだけ。

でも、少し、離れてみるのも良いかもしれない。

私はもう少し籠の外に出よう。レイアスが私を神殿から連れ出してくれたのと同じように、現実の私も家から出て外を見てみたい。そう思えるくらいにはなった。

そして、彼のためだけでなく私自身のために魅力的で居られるようにしよう。

\*\*\*

暫らくして

「なあ、布団上げ下げするの面倒じゃないか？」

「……………え？」

そんな話が舞い込んできたことだけが私にとって不思議な誤算だった。

## 第一話

声が届かない。

想いが伝わらない。

気持ちが分らない。

その全てが私の手の中をすり抜けていく。

それなのに私は全てに依存せずにはいられない。何一つ捨てられない、変えられない私はただ無駄に時間を浪費していく。

それ自体、もう惰性でしかない……

別に待っていたわけではないのだけれど、私はぼんやりとベッドの中で寝返りを打った。

遅く帰った主人はシャワーを済ませて、私が眠っていないのを分かっているながら特に声を掛けることもなく隣りに横になる。

「ねえ？」

「疲れてるから」

声を掛けただけなのに、背を向けられたままそう呟かれ私は黙って目を閉じた。胸がきゅっと痛んで意味も分からない涙がつうと目尻を伝って枕に落ちた。

そんなに煩わしいなら、別々の方がまだ良かった……良かった？良かったのかどうか、分からない。でも、一人で独りよりも、ベッドに他の気配があるのに独りのほうがやはりより孤独だ。

ダブルベッドの真ん中に誰が衝立を置いたのだろう。

触れることのない背中同士がとても切ない。

でも、そう、感じるのは、きつと私だけ。

\*\*\*

寂しい気持ちを抱えた夜は必ずといって良いほどこの世界の夢を見る。

場所は聖域、そして、神殿。私は『癒しの神子』だ。

私は夢の中では心のどこかで、馬鹿馬鹿しいと思いつつも、現実に戻れば恋しくて仕方ない人がこの世界には居る。

今夜　と、いつでも気が付いた先は明るかったけれど　は、彼はここを訪れてくれるだろうか？　そんなことを考えつつ、私は礼拝堂の舞台に立ち参拝する人たちに『癒されますように』『心安らかに過ごせますように』『病みが去りますように』と声を掛けそつと下げられた頭に触れていく。

目を覚ませば誰にも相手にされない女を崇めているなんて、彼らに申し訳ない気がするけれど、彼らは至って真剣に頭を下げ手を合わせ礼を尽くす。

私はそれに真摯に応えなくてはいけない。

礼拝の時間が終われば、私は大抵神殿内をぼんやりと散歩する。こここの全ては白で、ところどころに植えられている緑が眩しい。そこそこの数の信者も共に生活しているように思うけれど、みんな静かに生活し、最低限の会話しか交わさないから、とても静かだ。静寂が耳に痛いと思うことはここであらう。

都合が良ければ、大抵このタイミングで彼は来てくれるけれど、今日は来ないみたいだ。私は少し気落ちして、溜息を吐く。

夢なのにどうして細部まで私の自由にならないのだろう。

「……………神子姫」

静かに掛かった声に私は足を止めた。

彼ではない他の人物だ。そのくらは声で分かる。けれどそれ以上は分からない。特に彼以外、個人に興味を持つことはないから。いや、持つべきではないとそう思っているから。

「はい」

涼やかな声で、冷静に返事をして私は振り返る。

出来るだけ表情は抑えて、何も感じない人形のようにであればきつと大丈夫。

「日が落ちれば冷えますよ。南から来たワタシからすれば、ここはとても寒い気がします」

直射日光を避けるために着ていたのだろう、頭からすっぽりと被っていたローブを下ろすと、黒髪に褐色肌で彫りの深い造形の男性だ。兎のように赤い目は、黒に近く濁って、彼が酷く疲弊している様子を表している気がする。

「大丈夫ですか？」

こつりと歩みを進めれば、彼もまた足を進め手の届くところまできたら「あまり、平気ではありません」と口にして、ふわりと私を抱きこんでしまった。

びくりと過剰反応しそうになる身体を何とか堪えて、ゆっくりと呼吸をする。

彼からはお日様の香りがする。

「部屋へ行きましょう」

静かに私が促して、そつと彼の身体に触れると彼の方がびくりと身体を強張らせた。その反応を彼は詫びたけど、私は別に気にとめることなく、そつと彼の脇腹を撫でる。

……なんとなく、だけどここに傷がある気がする。

「ここ、ですか？」

「一応、応急処置は、して、きたのですが……」

応急処置、か。

私の大切なあの人なら、そんなものもしないで、血だらけのままここに来る。そう思うとおかしくて笑いそうになったけれど、何とか頑張つてこらえてみた。

\*\*\*

私の部屋はとてもシンプルで、だだっ広い空間に扉より少し右側に大きな天蓋つきのベッドがあり、左側の壁には暖炉、その前にはプリンセス仕様みたいな、応接セット。奥の大きな窓辺にはティーテーブルがあるだけだ。

そしてその全てが白い。

本当に色彩に欠けている場所だからこそ、生身で置かれている自分たちが異物に感じる。

彼はベッドの柱に寄り添うように置かれているハンガーに、ロー



ブを掛け、幾重にも重ねられていた服を脱ぎ去った。

最後の一枚は、ベッドの端っこに腰掛けて脱いでしまう。その下にはまだ真新しい包帯がぐるぐると巻きつけられていた。

「私が取りましょう……」

あまり動いて傷に触ると気の毒だと思い、その声を掛けたのだけと彼は曖昧な笑みを浮かべて首を振った。

「姫にお手間を掛けるわけには参りません」

「傷、痛むのでしょうか？」

思わず、同情的な表情になってしまった。

多分、直ぐに引っ込められたと思うから、気付かれては居ないと思う。少しだけ逡巡したあと彼は「お願いします」と小さな声で告げた。

## 第二話

彼に深く腰掛けてもらって、私は彼の間に膝をつき、静かに包帯に手を掛ける。するすると解いている間、間が持たないとも思っただのか、彼は話を続けた。

「今回は召喚術に失敗してしまって、少し持っていけませんでした……」  
「召喚、ですか？」

悪魔とか魔物とかだろうか？ 凄くファンタジーな感じがする。ぼつりと重ねた私に、彼は「はい」と頷いた。

「ワタシは国に属する魔術師なのですが……っ」

最後のひと巻きを取り終わると、押さえてあった油紙もそつと剥がす。化膿してしまっている傷口に触ったのか、言葉を切って息を詰めた彼に短く謝った。

彼の脇腹は丁度私の両手を広げて押さえられるくらいの範囲で、変色していた。爛れた皮膚は黒くなり……壊死し始めている気がする。

「辛ければ、私に掴っておいってください」

そう、前置いてから私は傷口に手を触れて最初は軽く力を込める。ねっとりとした、皮膚が私の手のひらに纏わりつき、今この手を離したら彼の一部も付いてきそうだ。現実でこんなことがあれば、きつと卒倒しているだろう。

徐々に加える力を強くすれば、最初は躊躇していたかに思われた彼の腕は強く私を抱き締めて、痛いくらいに力が込められる。

私の肩口に額を押し付け、熱く苦しげな息を吐く。

軽いものだったら、痛みを感じることもなく直ぐに癒えてしまうのに……私の力不足だったらと思うと申し訳ない気持ちになっってしまった。

もっと、早く確実に……治ったときの状態を強くイメージして手のひらの力を強めると、同じだけかそれ以上の力が込められる。

「……………」

あまりの苦しさに息を詰めてしまうと、その機微に気が付いたのか、ふと腕の力が弱まった。優しい人なのだなと思う。

そして、彼の呼吸が穏やかになるのと同時に手のひらに感じていた違和感がなくなる。ゆっくりと手を解けば、外傷は嘘のように治っていた。

「少しは楽になりましたか？」

抱き締められたまま顔を上げれば、彼は腕を解くこともしないで、こくんつと頷いた。

「他に、何を奪われたのですか？」

静かにそう続けて問質せば、彼は暫らく沈黙してから……

「大切な人の、命を、持っていていきました」

ああ、彼の瞳の濁りはそのせいだろうと憶測出来た。

苦しげな彼は私の肩から頭を起こすと、その淀んだ瞳で私を見詰めて、つっと距離を詰める。鼻先の触れ合う距離で、静かに瞼が落

とされ私も同じように瞳を閉じた。

柔らかく静かに重ねられる口付け。気遣わしげに、甘く食んでいた唇から割り入ってきた舌先を抵抗なく受け入れると回されていた腕に再び力が籠り、強く深く貪られた。

「……………っん、」

吐息の合間に彼は誰かを呼んでいる。私の名など知るはずもないから、きつと大切な誰かだろう。こんなことで本当に癒されるのだろうか？ 疑問に感じつつも私はやはり抵抗しない。

くんつと腕を引かれて、寝台に押し倒される。

不思議な色をした髪が、真っ白なシーツの上にふわりと広がる。

するすると着ている物を解かれていってもどこか他人事のように捉えることが出来るのは、この世界が夢、だからなのか、もしくは私が神子だなんて呼ばれてしまう存在なのだからなのかは分からない。ただ、無感情でいられた。いられるように努めた。

上気する肌の色まではどうしようもないけれど、極力声も押し留め、表情も変えぬように最中はずっと別のことを考えるようにしている。そう、しているのに、本当にさっきまで怪我人だったのかと思うくらい彼は回数を重ねるごとに、強く私を求め。

「ん、んん……………っい、」

余りに長く抱かれていると、相手が良く分からなくなってくる。思わず盛らしてしまった声に顔を逸らし、枕に頬を押し付けて、きゅっとう瞳を閉じる。

違う、この人は違う。

私を愛してくれているわけではなくて、私に心の拠り所を今求め  
ているだけだ。私にヘンテコな力がなければ、私にこんなことをし  
ようと思ってくれる人じゃない。

頭では分かっている。

理解しているつもりなのに、どんどんと押し寄せられる波に理  
性が悲鳴を上げる。

「……姫、神子姫、様」

「っ、ん……はい」

いつの間に彼は私を抱いている気になったのだろうか？ 掠れる音  
を唇から漏らすと、押し殺していた官能が一気に身体中に巡って  
くる。

嫌だ、駄目。

やめてっ。

そう思っているのに、もう止められなかった。

殆ど反射的に腕を伸ばし、彼の身体を強く掻き抱いて彼の肩口で  
声を押し殺して身体を震わせた。生理的な涙が頬を伝い、荒い息で  
もっと空気が欲しいと喘ぐ。

どくどくと下腹部が脈打っている。

前はこんなことなかったのに、人形であるだけに徹することが出  
来ていたのに、時折、彼と被ってしまった気持ちを抑えられなくな  
る。

最低だと自己嫌悪。

最初からこういう立場であることを理解してもらっているから、成り立っていると思っているけど、とても脆いだろうなとも感じている。

「……………姫、また貴女の元を訪れたい……………」

「あまり、怪我をされるのは良くないと思います」

ぼんやりと天蓋を見詰めて、無感情にそう答える。

刹那覗かせてしまった情念を夢幻の中の出来事であったように蓋をしたくて、余計に強く感情に蓋をして告げる。それでも彼は「また来ます」と重ねて私を抱き締めたまま隣りで眠ってしまった。

ああ、もう……………考えるのが面倒だ……………。

私もぐったりとした気分で瞼を落とした。

## 第三話

\*\*\*

「ん、んーっ」

ぱちりと目が覚めた。

私は手を伸ばして鳴る前の目覚ましを、ぱちりと止める。

あんな長い夢を見ていたら、起きても疲労感が残っていそうなのだけど、私はどちらかといえば、清々しい気分だ。

時計を見ればまだ六時過ぎ。そろそろ夫の目覚まし鳴るところだろっ。

ベッドに入ったときのまま背を向けて眠っている夫に、にじり寄ってその顔を覗く。実質十年以上一緒に居るから、最近彼も年を取ったなと思う。そう思うとなんとなく愛しくなって、目尻にキスを落とせば

「んんーっ」

と眉間に深い皺が入った。

邪魔をするなやめろ、という無言の訴えだろう。

私は、ぎゅっと痛んだ胸を押さえてベッドから抜け出す。おはよのキスもおやすみのキスもしなくなつたのはいつからだろう。彼から、キスがもらえなくなつたのはいつからだっただろう。

現実に戻るとこんなことばかり、正直憂鬱になる。

はあとさつきまでの清々しい気分が影が落ちて溜息一つ。寢室の扉を閉めたら、背後で目覚ましが鳴る音がした。

彼が起き出してくるまであの目覚ましはどれだけ頑張るんだろう。

「おはよう」

私は背にした扉に少しだけ体重を預け返ってくることはない挨拶をして、階下へと降りた。

……

「今日はね、初出勤なの。そうはいつても、どんなことすれば良いか簡単に説明してもらっただけなんだけど」

時間ギリギリに起きてきて慌しく用意をしている彼の後ろを追い掛けて、とりあえず告げておく。聞いているかどうか分からないけど……まあ、いわないより良いだろう。彼にとってはどっちでも、私のことなんて関係ないだろうけど。

「それでね」

続ける合間に、主人と同じようにはたばた準備を整えた子どもが「いつてきまーす」と玄関から叫ぶ。今朝もみんな朝食抜き。このあと私が一人で頂く。

いつてらっしやいと、玄関に向うときりぎり出で行くのに間に合った。

「住宅街抜けた先にある、店だろ？」

「え、あ、ああ、うん！ そう。アンティークショップだよ」

「ふーん、まあ、暇そうな店だし、邪魔にならないようにな」



いつて私の隣りを通り過ぎると靴を履いて子どもの後を追うように出掛けていった。私は小さな声で、いつてらっしやいと重ねた。返事はもちろんない。

きゅうと胸が痛むけれど、気にしない。家の中にずっと居たらこの痛みがずっと纏わり付く。

……早く、出掛けよう。

お店までは歩いても二十分くらいのところだ。

約束していた時間よりも一時間以上早く出てしまった私はのんびりとご近所さんの家が立ち並ぶ通りを歩き、途中の児童公園で足を止めた。

ここにはあの子が小さいときによく立ち寄った。

初めてばかりで、毎日、何か一つでも間違ったら死んでしまうんじゃないかと恐くて必死だった。育児書に、毎日外に連れ出してあげたほうが良いなものを見かけたら、雨でも出かけた。良く考えなくてもそれが天気の良い日という条件付なのくらい分かりそうなものなのに、あのときは暫らく気が付かなかった。

子どもに必死になり過ぎてたのかな？ ふと浮かんだ疑問に首を傾げる。

色んな意味でSOSを出していたつもりだったけど、彼は殆ど家に居なかったし……まあ、もう、そんな何年も前の話、今更だ。

「和泉さん？」

物思いに耽っていると、その声を掛けられて顔を上げる。

「あ、えっと」

「貴女の目指している店の店長だと思えますよ？」

刹那言葉を失った私に、彼はくすくすと人好きのする笑顔を見せて、そう告げる。私は直ぐに名前を出せなかった恥ずかしさに、ぱあっと頬が熱を持つ。

「え、でも、ご自宅とお店って」

「ええ、直ぐですけど、僕は朝この辺を散歩しているんですよ？近所でしょう？」

穏やかに重ねられて、なるほどと納得する。

「それより、とても時間が早いような気がします、何か用事でもあつて、の途中ですか？」

「え、あ、いえっ。その、遅れてはいけないので、早めに家を出ました」

早めにといつても限度があるだろう。

約束していたのは十時過ぎくらいにだったのに、まだ九時になつたくらいだ。私は気負い過ぎた恥ずかしさに語尾が殆ど消えてしまっていた。

「では、このまま店に向かいましょうか？」

「え、あ、いえ、私は適当に時間を潰して、その、えっと、お約束の時間に向かいますから、気になさらずに……」

「ごによごによと足元を見て告げる私に、店長さんは「どうして？」と心底不思議そうに口にした。

「だから、その。えっと、約束の時間までに店長さんも、しておか

ないといけないことがあると思うのです。私の勝手にそれを邪魔するのは」

いって顔を上げれば、思い切り店長さんと目が合った。慌てて逸らせば、くつくつと楽しげに笑われてしまう。

嫌だな、恥ずかしい。

なんでこんなところで会っちゃったんだろう。

「それなら尚、一緒に行きましょう」

「え？」

「僕はこれから、開店準備をするところだったんですよ。人手が増えるのは助かります」

そういって、店長さんは迷子にならないように付いてきてくださいいね？ と先に歩き始めてしまった。私は慌ててその後姿を追い掛ける。

初日早々、迷惑を掛けて申し訳なかったなと思うのと同時に、あまり面識がなかったから不安だったけれど、優しそうな人で良かったなと胸を撫で下ろす。

そして、そういう人は怒らせるときつと恐いから、気をつけようと改めて気を引き締めた。

## 第四話

私が住んでいるところもそうなのだけど、最近出来た住宅地なので新しい家が多くその種類はモノトーンでモダンなタイプとアンティークな感じのするものが主流となっている。

このお店はヨーロッパ風のアンティークな雰囲気漂っている。落ち着いた感じのする建物だ。

私は店長さんが鍵を開けてくれるのを後ろで待ちながら、よく晴れた空に似合う建物全体を眺めていた。

からんからんつと可愛らしい音のウエルカムベルで、建物に見惚れてしまっていたのに気が付いて慌てて前を向いた。

扉を開け放つて私が入るのを待っていてくれる。

慌てて入れば、ゆっくりと私の後ろで扉はまた可愛らしい音を立てて閉まった。

暗くて視界が確保出来ない感じの中でも店長さんは迷いなく店内を進み、ぼちりと明かりを灯してくれた。柔らかいオレンジ色の照明が店の中を照らす。

「僕はこちらから、貴女は反対から、この布を取っていつでもええますか？」

いわれて私は頷くと、店の中へと進んだ。

ショーケースや展示してあるものは殆ど白い布がふんわりと掛けられていた。私は足元に持っていたバッグを置いて、一枚一枚丁寧に外していく。

どの布の下からも宝物が姿を現すようで、とてもときどきした。そんなに大型な家具は扱っていないようだけど小さなテーブルとか、本棚、アクセサリーケース。ランプに、傘建て、可愛らしく繊細なものが多い。

それに引き換え私はどちらかといえば、大雑把だ。壊してしまわないように気をつけないと。

沢山の布を抱えて最後の一枚。

取り除いた下からはアンティークジュエリーの入ったケースが出てきた。

細かい細工が美しい。

綺麗。

それに……. . . . . と思ってつい、夢の中で貰ったものに似たものを目で探してしまっていた。

「ジュエリーがお好きですか？」

「え、あ、全然詳しくないので宝石たちに申し訳ないですけど、綺麗だなと思います」

ちらりと視線をショーケースの中に走らせ、指先でその端っこをそつと撫でる。

うん。

綺麗だと思う。

ここでも丁寧に扱ってもらっているのが分かるし、良い買い物が見付かると良いなと素直に思える。

微かに口元が緩んでしまうと、ふと店長の視線に気が付いて、顔を上げた。目が合うと、にこりと微笑まれてなんとなく視線を逸らしてしまう。

外に出るのは久しぶりだから、視線をずっと合わせているのは抵抗があるというか、恥ずかしい。

気分、悪くさせちゃったかな？

顔、赤くなつてないと良いけど。

そう思って、自分の頬にそつと触れる。

「それで十分だと思いますよ？ 第一印象なんて人も宝石も一緒です。それ以上は時間を掛けて付き合っていくうちに知れば良いだけですし、好きだなーと好感を持ったなら相性が良いのかもしれないね？」

にこにこことさういって、店長さんは私の腕の中から集めてきた布を抜き取った。気分悪くしていないようで良かった。ほつと胸を撫で下ろして、奥のカウンターへと進んでいく店長さんの後ろを付いて歩いた。

ぼすりとカウンターの上に布を置いて、畳みながら、話し掛けてくれる。

「そんなに繁盛している店ではありませんから、少しずつ覚えていく時間も取れると思いますよ。お客様の居ない時間はそういうことに宛てれば良いと思います」

「でも、そういうのは家でやったほうが……」

私も同じように布を畳もうと、よいしょと抜き取って、半分に折ろうと思ったら……私の身長以上あった……。床につけては大変！

とあわあわ巻き上げると、もう何枚か畳み終わった店長さんが、楽しそうに笑いながら布の端っこを持ってくれ「どうぞ」と半分にするのを手伝ってくれる。

布一枚まともに畳めないなんて。

「慣れですよ。慣れ。直ぐに貴女も慣れますよ。それに単純作業は一人より二人でやったほうが楽しいですしね」

すぐにしょぼんとしてしまう私のフォローをさっとしてくれる。良い人だ。何か益々申し訳ない。

「それから、さっきの話ですけどね？ 商品のことを勉強するのは立派な仕事のうちです。好きなものを知るのは楽しいでしょう？ それに、家では忙しいでしょう。ご家族の面倒も見ないといけないでしょうし。なるべく仕事を持ち込むことはしないほうが良いですよ」

「……あ、ありがとうございます」

こんな私にまで気を使ってくれる。

やっぱり良い人だ。

良かった……。

そのあと、仕事の流れを聞いて、結局折角だからと今日一日居させてもらった。基本的に、在宅でしている仕事が忙しくなったから代わりに店番ということなので、分からないことはその都度裏の自宅に居る店長さんに聞くことになった。

「家でのことも店も僕の趣味みたいなものだから、以前は妻に手伝って貰ってたんだけど、都合が付かなくなってしまって」

少し恥ずかしそうにそういった店長さんに釣られて微笑む。

「お忙しいなら仕方ないですよ。それに私はこんな素敵なお店で働けて嬉しいで……す……って、すみません。そんな風にいうものじゃないですよ。え、ええと、ごめんなさい」

カウンターの傍に置かれている応接用のティーテーブルで、繊細で美しいティーカップに綺麗な紅い色をしたお茶をご馳走になっついで美しいでしまっていた。

仕事なのにつ。

つい口を滑らせた私に店長さんは、にこりと微笑んで軽く俯くと顔に宛がっている眼鏡を中指で、くつと持ち上げた。左手の人差し指と薬指に細かい彫りのしてある指輪が納まっている。店長さんの長い指には厚みのあるその指輪も良く似合う。

こんな旦那さんなら、奥さんも心穏やかに過ごせることだろう……と、感じるけど、実際家庭に入ったときの本当なんて、他人には分からない。だから、私には関係ない。ふとそんなあさってなことを考える。

穏やかな空気の流れる店内はそこだけ外界から遮断されているようだった。

……お客さんが私の居た時間帯になかったことは、きっと偶然だよな？



## 第五話

「……………て、感じて週三回だし、私でもなんとかかなりそうだよ」  
夕食のときに報告をすれば子どもからは「頑張つて」とエールを貰ったけど、彼は「ふーん」で終了。

どこまでも私に無関心な人だ。  
でも、私はこの家庭を壊す気は全くない。

こんな居場所でも、私が選んで私が望んだ場所だ。  
どのくらい前からその場所を居心地悪いと。独りぼっちだと思つたようになつたのかは分からない。実は最初から独りだったのかも知れない。

でも、だからといってそれを終わりにする体力も精神力もない気がする。

出来れば関係改善に努めたいと思っている。それも私独りの一方通行だから全く上手くいかない毎日。

がつがつと無言で箸を進める彼を眺めつつ、私もぱくりとご飯を頬張る。

自分で作つて自分で食べる。

当たり前なんだけど、誰も「美味しい」といつてくれない食事は作る気力が減退する。唯一子どもは、聞けば美味しいといつてくれるけれど、この子は 外食は別としても基本的に 私の作るものしか食べたことがない。あまり宛にはならない。

私って実は味覚音痴で、洒落にならないくらい不味いものしか作つていないのだろうか？

……

お風呂からあがって珈琲を飲みながら、ぼんやり。

主人はもうとつくに寝室に入っている時間。子どもがついさつきまで起きていたから、寝るのを待っていたらこんな時間になってしまった。

ダイニングテーブルの上で開いていたノートパソコンを閉じて、二階へと上がる。

ほんの少しだけ空かしている子ども部屋の中を覗けば、薄明かりの下ですやすやと寝息を立てているのが確認出来た。

そしてそのまま寝室へと入る。

つけっ放しのテレビが迎えてくれた。寝るなら消したら良いのにと何度いったことか。つけてないと眠れないのだそうだ。

ふうと私は溜息を落として、ベッドの端っこからそっと入る。

起きてるのかなあ？ 寝てるのかなあ？ と顔を覗き込んだら、迷惑そうに瞼を持ち上げた。

「ごめん。起こした？ おやすみ」

いってキスを落とす。

もちろん返してもらうことはない。

彼の眉間に皺が刻まれるだけだ。

きゅっと苦しくなる胸の痛みを堪えて、眠ってしまおうと思ったら

「えっ？」

物凄く珍しく、私のパジャマに手が掛かった。

ぶつぶつと胸元を肌蹴られ、何の予告もなく胸を食まれる。キスがあるわけでもなく、ただ、パジャマを剥ぎ取られ……愛撫なんて呼べるようなものじゃなくて……。

だから、ちゃんとキスもして欲しくて、無理矢理距離を置いて、唇を重ねたけれど、一方通行。

軽く噛み合わさった歯列は開くことはなくて、益々自分を惨めにする。

それでも少しは近づけるなら。

何かに戻ることが出来るならと、涙を堪えれば乱暴に秘部を撫でられ息を詰める。現実で他人にそんなところを触られるのは、年単位で昔のことになるから痛みを伴って息を殺せば、感じていると思っただのか徐に足を開かれた。

まだ何の準備も出来てないのにっ。

「あぁっ！、い…………っ…………」

上げた悲鳴は善がっているようにでも聞こえたのだろうか、痛みは嵐のように襲ってきて、痛いという悲鳴を押し殺すのに必死で、あっという間に去っていった。

さっさと済ませて部屋を出て行った彼を見送って、改めてパジャマに袖を通す。

立ち上がればずきりと身体が痛むし、急に押し広げられてしまった部分も痛い。ひりひりと悲鳴を上げている。

やっと求めてもらえたかと思っただのに、私はなんなんだろう……。

少し出血もしていたし、トイレに……と階下に降りると、丁度洗面所にいた彼を見かけた。

物凄く、物凄く、物凄く、私が降りてきたことにも気が付かないくらい、丁寧に手を洗っていた。

……私って、そんなに汚いのかな……。

じわりと浮かんでくる涙を拭って「大丈夫」と心の中だけで自分に告げた。何が……なんて自分でも良く分からない。

寝室に戻れば面したベランダで彼は紫煙をあげていた。白い煙がふわりと流れて消えていく。

私はよろよるとベッドに戻って身体を小さく丸めた。

ややして戻って来た彼に「ねえ」と声を掛ければ「早く寝ろよ」と返ってきただけだ。明日も仕事だし睡眠は大事だよな。

「そう、だね。おやすみ」

返事はなかった。

いつも、通りだ……

セックスストレスが解消すれば、少しは前みたいに歩み寄れるかもしれないと思ったのに、壁はより分厚く、高くなったような気がした。家族としてはなんとかやっていると思うのに、いつから私たちは夫婦として成り立たなくなっただろう。

心も身体もただ静かに泣いていた。

誰も、そのことに気がつかない。

## 第六話

\*\*\*

「……っと、俺は、いつも泣いているところに行くわすんですね？」

私、いつ眠ったんだろう。

そう掛かった声に顔を上げれば、私はいつもの部屋に居て、寝台に突っ伏して泣いていた。

「何かありましたか？」

にこりと歩み寄ってくる彼は、北の国の騎士でレイアスといって私がこの世界で唯一名前を知り愛している人だ。ごしごしと乱暴に顔を拭えば、その手首を掴まえられる。

「傷がつかますよ？」

なんて真剣に心配してくれるのはこの人くらいだろう。胸の中が暖かくなった私は自然と微笑んでいたと思う。心配そうな顔をしていた彼の表情も緩んだから。

「寂しくて泣いていた……というわけではないですよ？　ここはいつも人で溢れているでしょう？」

冗談交じりにそんなことをいいながら立ち上がり、私のこともそっと掬い上げてくれる。とっと自分の足で床を踏みしめると、夢の

はずなのにとても現実味がある。物の質感もしっかりしているし、

「レイアスが来なければ私はいつでも独りですよ」

いって傍に寄れば抱き締めてもらえる。

それは、普通に暖かいし、その胸に頬を寄せれば鼓動も聞こえる。夢なのか現実なのかもよく分からない。私にとってはそんな細かなことどうでも良い、彼は私に甘くて優しいから浸かっていられる。

「では今は独りではありませんね。今夜は他の誰でもなく俺が貴女の傍にすることが出来る」

幸せです。と続けて額に口付けを落とし、瞼と頬、鼻先にも与えてくれたところで刹那視線を絡ませて瞼を閉じた。柔らかく食む口付けは、私が無理をしなくてもじわりと深くなり濃くなる。

そして、心地良い官能を与え身体が熱を孕んで熱くなる。

どきどきと胸が高鳴って、もつと胸を掴んでいた手に力を込めて背伸びする。いっばいに伸びて不安定になれば、しっかりと支えてもらい甘えを許してくれるように愛してくれる。

ぐいぐいと押ししてしまうと、彼は私の腰を抱いたまま、ふう……と後ろに倒れた。ひあっ！ と声にならない悲鳴を上げれば、寝台に柔らかく受け止められ、私を抱き締める腕に力が籠る。

彼の肩が揺れている。

思い切り笑われてしまった。

「いえ、驚いた顔があまりにも可愛らしいと思って。ふふ……」

ふんわりと私の身体を隣りへと下ろして着ていたものを脱ぎなが

ら、そういつた彼の隣りにちょこんつと座りなおしてそれを眺める。

「それで、本当に平気なんですか？ 俺の神子姫様」

重たそうな軍靴を脱いで膝を抱えると、その上にこめかみ辺りを押し付けて私の顔を覗き込んでくる。

「平気です。もう何も悲しくくないです」  
「本当に？」

なるべくはつきりと告げたつもりだったが、彼は心配そうに瞳を細めて、片腕を伸ばしたその先で、そつと私の頬を撫でる。くすぐったくて心地良くて、きゅつと瞼を落とせばくすぐすと笑いが重ねられた。

「貴女は時折少女のような顔をしますね？」

「そ、それは」

「褒めてますよ。褒めてます」

頬を撫でていた手を背中に回すと、そのままずっと距離を詰めて、ふわりと丁寧に寝台に寝かされる。彼もその隣りに横になると、気分良さ気に時折口付けを降らせながら話を続けてくれる。

「ご機嫌ですね？」

「ええ、貴女にとっても朗報であれば良いのですが」

ゆるゆると彼の大きな手が私に触れてくれるのは心地良い。幼い子どもがハグを求めるのと同じように私も求める。そして彼は応えてくれる。応えてくれるのは彼だけだ。

「今回は明日には戻らないといけないんですけど、今度まとめて休みを取ります。そうしたら、暫らく一緒に過ごしましょう。参拝の儀だって毎日ではないんですから、それに当たらない日にまた出かけたりするのも良いと思います」

「本当に？」

私が大抵一回で見ることの出来る夢の長さは一日と半分くらいだ。その次は続きであることもあるし、数日経っていることもある。私の現実の時間軸と、こちらの時間軸は同じじゃない。だから、彼がずっといてくれても私は傍にいられるか分からない。でも、にこやかに頷いてくれる彼を見てみると、ふわふわと歡喜に胸が沸く。他の誰でもなく彼がここで過ごしてくれる。

「嬉しい」

素直に言葉が溢れて、抱きついてキスをする。

「喜んでもらえて良かった。迷惑に思われたらどうしようかと思いましたが」

「まさかっ！」

私は本当に驚いたのに、彼は少しだけ不安な色を瞳に移して曖昧な笑みを零した。

「俺は身分違いなお姫様に夢中で、恐いんですよ……好きなときに切って良いといったけれど、道中貴女の顔を見るまで、いつも怯えています。拒絶されるのではないかと……そして、いつも、こっやつて触れて、まだ大丈夫だと確認するんです」

するりと、私の肩を肌蹴てキスを落とす。痕が付かないくらいの



加減で甘く何度も吸い付いて好きを重ねてくれる。

私の役割的に傷をつけることはタブーなのだろう。私が直接聞いたことはないし、そうして欲しいといったことはないけど、基本的に誰も私を傷つけたりはしない。

緩やかに重ねられる愛撫は心地良く身体に響いて、胸の奥から全身を暖かくする。

## 第七話

「ん……う……」

口の端から熱の籠った吐息を漏らせば、それを吸い取ってしまうように口付けられる。喉の奥の奥まで届くように深く掻き雜ぜられ、息苦しく目尻に涙が浮かぶ。

「っは、あ……っ、神子、姫、……」

掠れる声で呼ばれ、音のない返事を返す。

キスの合間に、柔らかく私の腰を撫でていた手のひらは、柔らかく胸を揉み解し指の平が敏感な突起を刺激する。じんと下腹部が熱を持つのが分かることが余計に恥ずかしく、顔を逸らし堪えるのに、彼の鼻先がっつと鼻に触れちらりと視線を上げれば、ほんのりと目尻を上気させた彼に「逃げないで」と微笑まれた。

「俺だけに、見せる表情もっつと、見せて……」

吐息混じりに重ねられる声にぞくぞくする。肌の触れ合った部分が痺れて、甘く疼く。愛されていると感じることが出来れば、どんな細かな所作も心地良く蕩けるような官能に変わる。

どんなに男性にとって面倒でも、ゆっくりと愛されたい。そして、満たされたい。

それが夢でしか叶わない私はとてつもなく惨めだ。

分かっている、それでも、もう、求めずにはいられない。

観念して彼の首に腕を絡めて引き寄せ。そして首筋に唇を寄せ

て、軽く食み味見をするように、つうつと舐めるとそれにあわせて、彼の吐息が熱く私の髪に掛かった。感じてくれていることが嬉しくて、つい強く吸い付きすぎると「んっ」と痛みを堪えるような音が漏れた。

はっと我に返り視線を走らせれば、くつきりと紅い花が落ちていた。

「っん、っ、めん……」

「いいえ、もつと俺に触れて……貴女から、触れてくれるのは俺だけ、ですよ、ね……」

当たり前だというように、顔をあげ私からキスをすれば嬉しげに私の身体にまわりついてくる。その窮屈さがなんとも気持ち良くて、夢の中のはずなのに私は幸せだと思ってしまう。

そして、彼の手がするすると私の身体を這い降りて、腰の紐を解き完全に私の肌を晒すと舐めるように太ももを撫でその中心に触れる。

「っひあー!!」

その瞬間電気のような痛みが身体の中心を突き抜け、びくりっと身体が強張り、肩を跳ねさせてしまった。

「……………サシャ」

「っい、いえ……な、なんでもありません」

レイアスが不安そうに私の瞳を覗き込む。当然のように即座に否定したけど、そんなことを「そうですか」と聞いてくれるほど彼は冷たくない。

「辛そうですね……誰かに酷くされたんですか？」

彼は良くその類のことを聞いてくる。

もちろん、答えは殆どノーだけど、今日は……おかしい。心当たりといえば現実でのことだけだ。確かに眠る直前のことだったし、とても痛くて、辛かった。

けれど、その痛みを夢にまで引きずってくるとは思わなかった。

「えっ、ちょ、レイアスっ」

何の迷いもなく私の足元へと身体をずらしていく彼に気が付いて慌てて声を上げたけど、無駄だ。あっさり掴って、膝を割られるとその奥を見られる。余りに恥ずかしくて、傍にあった枕を一つ抱え込んで顔を隠すが、彼の吐息と指先が敏感な部分に触れて、ひくりと反応してしまう。

彼は何もいわずにその中央に一度だけ唇を押し当てて、軽く吸うとぺろりと舌を這わせてから腰を上げた。きゅっとお腹の奥が締め付けられるように収縮した。短い吐息を漏らした。

「レ、レイアス？」

ふわりと私の腰にシーツを掛けてから身体を起こすと、不安げに名を呼んだ私を振り返り、そつと髪を梳き、目尻の涙を拭ってくれる。

「傷に良く効く薬を貰ってきますから、そのままいてください」

「えっ！ ちょ、いえ、だ、大丈夫ですっ」

「大丈夫じゃないっ。大丈夫な、わけないでしょう。どこの患者か知りませんが……この場にいれば叩き切ってやるものを……」

強くそう重ねて、顔を逸らし苦々しく締め括ると彼は素早く部屋を出て行ってしまった。

その後姿を不安な気持ちで見送ってしまふ。

夢、なのだから全てが私の自由になれば良いのにとても不自由だ。この世界でも私の自由になるものといえれば気持ちくらいなものだ……私はそれを彼に捧げていた。

ややして彼は言葉通り軟膏薬を持って戻ってきた。

もちろん、その後も自分でさせてもらえるわけではなく、恥ずかしく足を開かされ私では見ることに叶わないところへそつと薬を塗ってもらふ。

「んっ……」

時折、ちりつと走る痛みにも声を殺せば、痛みを宥めるように内腿に口付けが落とされる。

何度かそれを繰り返せば、納得したのか私の間から抜け出して隣りへと戻ってきた。ことりとサイドボードの上に薬を置くとその隣りにある瓶をちらと見る。

「使わなかった者がいるんですか？」

「え、いえ、その」

「貴女が庇うなら、俺は何もいいませんけど……」

ぶすつと不機嫌そうにそういつて私を抱き締めると、不機嫌な様子とは裏腹に柔らかく私の頭を撫でてくれる。彼の肩越しに私もそれを見て小さな溜息。中身は潤滑油代わりのものだ。

「貴女が……」

「はい？」

ぎゅっと腕に力が込められて強く強く抱き締められる。

「貴女がただの遊女であつたなら、直ぐにでも身請けして国へ連れて帰るのに……貴女が特別であることは、以前のことでも思い知らされました」

きつと私が暫らく眠らなくてここに来なかつたときの話だ。

彼は在らぬ嫌疑を掛けられて拷問を受けた。苦い思いが蘇って「ごめんなさい」と額を彼の胸に押し付けて謝罪すれば、ふっと笑われたのが分かる。

「俺のことは良いんですよ。ただ、貴女一人の存在で戦況が左右されるとあつては、なかなか難しい。大きく長い争いは国だけではなく世界を蝕む。何を捨てても良いと思つているのに、思い切れない」

笑いが溜息に変わり、胸が切なく疼く。

「あの、えと、お願いしてそついうのは今後ないよつという運びにしてもらつていふと思つので……」

実際一夜を共にすることは少なくなつたと思つ。

私と彼のことを察している人たちもいてその計らいだと私は思つている。だから、そのことをもぞりと彼の腕の中から、顔を上げて告げれば彼は曖昧に、そして困つたよつように微笑んだ。

「ゼロになると思ひますか？」

「え、はい。そのよち」

私がこくこくと頷けば、彼の瞳は哀しげな色を移した。

「俺は難しいと思いますよ。貴女の味を知ってしまった者がそう簡単に手放すとは思えない」

大きな両手がふわりと頬を包んで、ぐいっと上向かせると「少なくとも俺はそうです」って口付けを落とす。深く、深く、蕩けるように濃く長く……。

この長く甘く愛しい夢が永遠に続けば良いのに、現実なんて捨ててしまえば良いのに、彼の腕の中に居ると必ずそう思う。

## 第八話

\*\*\*

私は目を覚ます。

そして、今朝も、目新しい変化は何一つなかった。おはようと口付けても眉間の皺が入るだけ。いつてらっしゃいと声を掛けても振り返ってはもらえない。

ただ動くと下半身がずくずくと痛むだけだ。

傷も心も癒されていたのは夢の中だけだったのかもしれない。凄く気分が滅入るから、バイトが入っていて良かった。

はあ、と嘆息すると夢の中でのレイアスの切なげな瞳を思い出す。

「……………マメですね？」

「ひゃっ！」

ぼんやりと持参していたメモ帳に一日の仕事の流れを書き込んでいたら、ひよっこりと店に戻ってきた店長さんが私の手元を覗き込んでいた。思わず上げた悲鳴に、楽しそうな笑いが零れてきた。

うつ、恥ずかしい。

「お茶にしませんか？ 休憩しましょう」

にこにこする店長の手にはマグカップが握られていた。

「昨日はお客様仕様。今日は身内仕様です」



レジカウントアの椅子に　きちんと座ると痛むため　浅く腰を預けていた私の前に、ことんと置いてくれる。マグカップには可愛いクマさんが描かれていた。

可愛い。

奥さんの趣味なのかな。

私はお礼をいってカップを両手で包むと、ふーっと息を吹きかける。ふわりと鼻をつく香りは……フルーツ系……なんだろう？

「マスカットですよ。美味しそうな香りですよ、お腹が鳴りそうです」

小首を傾げた私に説明してくれる。

私は「ああ」と納得して一口。ふわりと爽やかな香りが口の中に広がってスツキリする。ことごとカップをカウンターに戻して私は手元のメモ帳をぱらぱらと捲る。

「流れのメモ、ですか？」

「はい、私外に働きに出るのは久しぶりなので、失敗してご迷惑を掛けないためにも……」

「ごによごによと答えた私に店長さんは「なるほど」と相槌を打ってくれる。

「でもそんなに、肩肘張らなくても大丈夫ですよ？　貴女の失敗くらしいことで迷惑だとは思いません。それにね、上司が部下の失敗をフォローするのは当然なんですよ。責任なんて上に押し付けるつもりで、自由にしてもらって構わない。そう思うからこそ人を雇うんです」

きょとんと店長さんを見れば、にこりと微笑んでくれる。

どこまでが建前でどこからが本心なんだろう？ 私はその境界線を測りかねて「失敗しないように気をつけます」と苦笑した。

「ありがとうございます、一生懸命なんですね。助かります、店ごと任せられそうな勢いですね？」

くすくすと笑った店長さんに釣られて笑ってしまふ。

確かにそんなに、張り詰めなくても、実際私がやるのは、裏では店長さんが居てくれる店番で、それほど大きな失敗が起きるといふのなら起こしてみるとでもいふ感じだ。なんだか、ふと肩の力が抜けた私をちらと見て、店長さんは「それはそうと」と話を変えた。

「今日は昼食どうするつもりですか？」

「え、ああ、そう、ですね。近所に食べに出ても良いですか？」

考えてなかった。突然振られた話にそう答えれば「もちろん良いですよ」と頷いてもらえる。しかし

「良かったらうちで食べませんか？ 一緒にというわけには行かなくて残念ですけど、僕の方もあるので、序に」

そう続けられて恐縮する。

そこまでご迷惑を掛けるわけには行かない。確かに作るの二人分も三人分も変わらないだろうけれど、そんな手間を掛けては奥さんに申し訳ない。

私は慌ててその旨を告げると、店長さんは刹那不思議そうな顔をした。

私は変なこといった？  
いつてないよねえ？

「作るの僕ですよ？ 他には誰も居ないので気兼ねしなくて良いです」

「え、でも」

「あれ？ いつてませんでしたか。別れたんですよ。だから人手が足りなくなってしまうって……」

「え、でも」

反射的に店長さんの左手に視線を走らせてしまった。

それに気がついた店長さんは、そっと右手で左手を撫でて、ふふっと笑いを零す。

「いわゆるフェイクですよ。客商売なので、あまり私生活の変化を持ち込めないでしょう？ だから……なんですけど、あっと、これは新調したものですよ？」

「ええ、とても素敵です」

「つて！ 私つてばなんて思慮の足りないことを。」

「素敵とか、今、全然関係ないしっ！」

あわわつと慌てて謝罪しようとしたら、からんからんつとウエルカムベルが鳴った。

店長さんは顔見知りなのか「いらっしやいませ」と朗らかに立ち上がって、手に持っていたマグカップをカウンターの裏に置くと、にこりと毒なく微笑んでお客様へと歩み寄っていった。

私は、その後姿を見詰めつつ、ほふつと、椅子に腰を預ける。

問題なんて全然なさそうな人なのに、結婚生活を維持出来ないほ

どの何かがあったんだなあと思うと不思議と親近感が湧いてしまった。

結局、お昼は店長の勧めでご馳走してもらった。

シーフードピラフにサラダ、コンソメスープって、普通にランチだ。男の人の料理って意外と繊細だなーと思いつつ、いただきますと手を合わせてから頂戴する。

「美味しいな」

少し、男性の一人暮らしの家にお邪魔するのは軽率な気がしたけれど、店舗と続きであるし、昼間だし、それに私なんかには”何か”を思う人なんていないだろうと心配するのが馬鹿馬鹿しくなった。

ふと昨夜の主人の姿を思い出して、どうせ汚いしね……と自嘲的な笑いを零す。

そして、肩口に鼻を寄せてすんつと鳴らす。

何か変なおいとかしないよね、私……。

自分で気がつかないところで、汚いと嫌だな……。気分がしょんぼりしたけど、ふわりと立ち昇ってきたスープの香りに、ふと穏やかな気分になる。まあ、良いか。と食事を続けた。

「ご馳走様でした」

ちょっと、量が多かった。お腹が苦しい……。

こくんつと置いてもらっていたお水を飲んで、ふとキッチンに目を向けるとそのままになっていた。几帳面に見えて、粗があると少しほっとする。

私が粗だらけの人間だから。

勝手に片付けるのは悪い気もしたけど、どうせこのあと店長さんが片付けるなら、今、私が片付けても一緒だよ。と納得して、私は満腹すぎるお腹を納めるために自分の食べた食器も下げてきて台所に立った。

……

「美味しかったです。手間掛けさせてすみません」

「あれ？ まだ休んでいて構いませんか？」

カウンターの上でノートにペンを走らせていた店長さんにその声を掛ければ、顔をあげて気遣ってもらった。

「良いんです。ご馳走様でした」

「そう？ えーっとお粗末さまでした、かな？」

くすくすと笑い合う。

本当に感じの良い人で良かった。

それに家で一人なのを息苦しく感じて外に出たのだから、誰か居るなら出来れば一人になりたくないと思ったのは私だから、気に掛けてもらうようなことではないのだけ。

「ご迷惑になると思うので、次からはお弁当でも持ってきてきます」

カウンターの裏に預けてあったエプロンを取って、身につけながらその口によれば「お弁当かー」と楽しげに繰り返した。

「貴女の料理は美味しそうですね」

重ねられれば、私は慌てて顔の前で両手を振る。

「とんでもないっ！ 店長さんの方がお上手ですよっ！ 私の料理は不味いんです」

だって、誰も美味しいなんていわない。

だから思わず力が籠ってしまった。

そんな私を、驚いた顔で見詰めた後、ぷつと吹き出した。

「だ、大丈夫ですよ、貴女の分をとって食べたりしませんから」

くすくすと愉快そうに笑われて、ぱあああっと顔が赤くなる。そうではなくて、とはいいそびれてしまった。

それから店長は、時間まで店のほうにいてくれて、そのあとはお留守番をさせてもらった。

お客さんの出入りもそこそこあって、人の流れを見ているのは楽しい。家に帰る頃には、憂鬱な気分も傷口もそんなに傷まなくなっていて胸を撫で下ろした。

今夜は夢を見ることもなく、休めそうな気がしたんだけど……

## 第九話

\*\*\*

もうお約束というか、私は逃れられないのだろうか？

私はいつもの部屋に居た。

しかも今は夜だ。窓の外が暗い。

嫌だな。

ほぼ確実に彼は今夜こないと思う。だとすれば……誰も来なければ良いのに。

ふうと嘆息して、窓辺に立つ。

庭は窓から洩れている僅かな光源で保たれる程度、薄暗い。私は薄いカーテン越しに外を見る。以前ここから出たとき、ここはとも高い場所にあることを知った。

だからか、星が降ってきそうだな、なんて乙女なことを思っつまう。

まだ、誰も来ない。

このまま誰も来ないかもしれないし、散歩でもしよう。どうせ、まだ眠くない。

私はそう思いついて、ふわりとカーテンを下ろし扉へと向った。

途中ソファに引掛掛けてあったストールを手にとって肩に羽織る。

寒いとは感じないけれど、何も羽織らないというのは、少し不安なのだ。

重たい扉を押し開けて、回廊へと出る。

内庭に居れば用があってもすぐに誰か見つけてくれるだろう。私はそう思っただ庭に出た。いつものようにただ静かに綺麗な水を湛える噴水に足を運び、傍に腰を降ろす。

夜はその水盆に星が移って綺麗だ。

ただ単にこの空間が癒しを作っているのではないかなと思わせる。

そんな私の平穩は直ぐに破られた。

信者の一人に連れてこられた男は東の国を拠点とする豪商。商人らしい。若くして成り上がったという豪勢な雰囲気を持っているわけではなく、落ち着いていてどこか憂い顔の男性だ。

案内してきた信者は、私と彼が顔を合わせると、仰々しく腰を折って退席してしまった。

私は諦めて立ち上がると、彼は青白い顔を何とか微笑まそうと努力してくれているようだ。その姿はほんの少し、痛々しく、見ているほうが切なくなる。

怪我……は、ないようだけど。

歩み寄った私は背の高い彼に手を伸ばした。それに誘われるように少しだけ腰を折った彼の頬にそっと触れる。  
ひやりと冷たい。

「……あたたかい、ですね」

私と同じことを思ったのか、静かに瞑目してそう零す。



「何か、ありましたか……あの」

出来れば今夜はと思ったものの、彼の憂いを帯びた瞳を見ていたら続きを告げることが出来なかった。今夜受け入れたら、傷の治りが遅れそうな気がする。

私の言葉の続きを素直に待っている彼に私は緩やかに笑み、首を振った。

「何でもありません。顔色があまり宜しくありませんよ？ 休みましよう……」

いって先を歩いた。

部屋に戻ると、時間稼ぎのようにお茶を勧めてしまった。

そんな私に気が付くこともなく、彼は「いただきます」と頷いてくれる。でも、冷え切っている身体には暖かいものはそんなに悪い判断でもないと思う。

私はティーテーブルの傍に用意されていたワゴンのティーセットを使ってお茶を淹れる。ハーブティだ。ラベンダーの柔らかくどこかすつきりとした香りが部屋に充満した。

無機質で冷たい感じのするこの空間に、こういうのはとても珍しい。

私の気分まで少し暖かくなった。

「どうぞ」

ソファに座る彼の隣りに腰掛けて私はティーカップを置いた。

短く礼を告げた彼は、そっとそのカップに手を伸ばし、節の目立つ長い指を静かに掛けて持ち上げ、もう片方の手でカップを包み込

んだ。静かに深呼吸する姿はとても疲れている。  
そんな彼が「医者に……」とぼつと口火を切った。

「医者に余命を告げられました」

つつとカップの端を唇に寄せて一口そつと流し込み、何も答えな  
い私に話を続ける。

「癒しの神子と名高い姫でも、余命までは伸ばせませんよね。まだ、  
私はやらなければならぬことが残っているのですが……せめてこ  
の憂う心だけでも安らかになればと思い、この地に足を運びました」  
「……………」

きつと、治ると思う。

彼は商人であるらしいから、きつと現実主義リアリストなのだろう。目で見  
たものしか信じない。私のような人間はただの噂。有り得ないと思  
っている。思っているけど、それに縋るしかやり場のなくなった自  
分にもきつと傷付いているはずだ。

そう思つととても気の毒な気持ちになってしまった。

「私にはまだやらなければ」

と繰り返す彼のカップを握る手をそつと支える。微かに震えてい  
ることに気がつく胸が痛んだ。

「何をしなくてはいけないんですか？」

いいつつ彼が手を下ろすのにあわせて私も降ろし、彼の手を握る。  
カップの余熱のお陰で氷のように冷たかった彼の手がほんの少し暖  
かくなっていた。

「やらなくてはならない、しなくてはならないことを探しているんです」

「……それは、時間が掛かりますね」

「ええ、とても」

思わず零した返答に彼は首肯して口角を僅かに引き上げた。

「姫は晒わないのですね」

私の手に空いた手を重ねてきゅっと握る。

「大抵のものはそんなことをいえば、戯言だと晒います。金も名誉も思うまま、この手中にあるというのに他に何を求めるといのかと……だけれど、私は求めた。見ぬものを、寸暇を惜しんで何かを求めた」

その結果がこれです。いつて苦笑した彼の瞳は陰る。

「満たされない以上、貴方は求め続けるのですから、晒いません。貴方が心から満たされるものを見つけるまでの命の余暇が認められることを私も望みます」

自然と唇から紡ぎ出される言葉は不思議だ。

私が口を閉じれば、ぐいと腕を引かれ空いていた手で顎を取られ口付けられた。暖かい唇はラベンダーの香りがする。

その香りは私の心も癒していく。

ハーブはほんのり苦い。けれどどこか甘い気がする。

強く押され、私はぽふっとソファに身体を横たえた。

丁度頭が肘掛に来てそこへそつと載せてくれると、彼は私の頭の後ろから腕を抜いて柔らかく私の髪を梳いた。髪に触られるのは心地良い。意図せず頬が上気してしまいそつで、私は彼から顔を逸らした。それにより、晒されてしまう首筋に、そつと彼の唇が触れる。

軽く歯を立てられて食べられると、ふわふわと身体が熱を帯びてくる。

昨夜レイアスは「俺も我慢しますから」と私を抱かなかつた。

その余熱が燻っているようだ。感じやすくなっている自覚はある。

「……どこか、お辛いですか？」

「え」

ふと顔を離れた彼に、覗き込まれ私は大きく瞬きをする。

「眉間に皺、寄っていますよ……つい、惹き込まれて押し倒してしまつたのは私ですが、私は病人なので、無理な姿勢は辛いですし、出来れば寝台に移りませんか？」

そこまで告げると彼はそつと身体を起こして私に手を伸ばす。

顔、赤くなるなつ。

焦らないで……。

私は自分自身にそついい聞かせながら、彼の手を取り立ち上がる。平常心。平常心で、返事を

「……はい」

声が掠れてしまった。  
恥ずかしい。

顔を伏せ、先に寝台へと歩み寄る私の後ろをついて歩きながら彼が、ふっと笑ったのが分かった。

「神子姫様は、陶器で出来た人形のようなようだとお聞きしていました。激しく抱けば壊れそうな人形は、これほど暖かくはないですね」

寝台に横になった私を抱き締めて、丁寧に髪を梳きながらそう告げる彼にとろんとしてくる。髪を撫でられるのは好きだ。身体を撫でられるのも好き。優しく丁寧に触れられるのはとても心地良い。

「猫のような人ですね」

くすりと微笑まれ私は顔を上げた。

きよとんとしてしまっていたのだろう、彼は益々口角を上げる。

疲れ切つて、色を失くしていた雰囲気は今はない。

それは彼に堕ちていた影がさつたのだろうと思う。

「貴女を抱き締めていると、屋敷のテラスで猫を膝に抱いているときのようにです」

「猫、飼つてらっしゃるんですか？」

「ええ、とても美人ですよ」

良いな、猫。

私も何か動物を飼いたかった。

でも自分の世話も間々ならない私では到底無理だと思ひ口にしたこともない。

「薄灰色の短毛で耳の先と尻尾の先が黒いんです」

「可愛いんでしょうね」

「……はい。」

「また、素で答えてしまった。」

最近、私本当にどうしてしまったんだろう。以前の私なら絶対に何も答えなかった。相槌すら打たなかったと思う。それなのに……心がざわめく。

夢の中なのに、自分が作れない。

癒しの神子の仮面を被ってられない。

「可愛いですよ、機会があれば連れてきましょう」

「……はい。」

「そんな私を愛しげに見詰められ、気恥ずかしくなって顔を伏せる。」

「このところ、床に伏せりきりで、人と触れ合うことなど思いもしませんでしたが、気まぐれで『癒しの神子』の真相を確かめに、と、そして、そのような方のところで逝くのならそれも本望と思いました。……はい。」

「貴方は助かりますよ」

「……はい。」

やっとらしさを取り戻してそう告げれば、彼は掠れた声で「はい」と頷いて苦しいくらい強い力で私を抱き締めた。

## 第十話

\*\*\*

なんだか昨夜は普通に、彼が助かって良かったなと思ってしまった。

あのあと、彼は私にそれ以上のことをすることなく、本当に愛猫を愛でているときのようによしく柔らかく触れるだけだった。

それがとても心地良くて、私は夢の中でまで静かに眠ってしまった。

傷が恐かったから、ほっとしたのもあるんだけど。

今日はバイトが入っていない。

これまでと同じように、掃除して、洗濯して……ふと外を見ると良い天気。

普段ならそう思っても外に出ることはないのだけど、今日はなんとなく出ても良いかなと思い、買い物に出かけることにした。

お店などがある通りに出るには、仕事先の前を通ることになる。

挨拶くらいした方が良いのかなあ？ と思いつつ、足を止めた。

ショーウィンドーから中を覗けば、カウンターの椅子に腰掛けて、店長さんが事務仕事をしている。こつこつと窓を叩けば、ふと顔をあげきよるきよる、くすりと微笑んでもう一度こつこつと叩いたら目が合った。

それだけで良かったのだけど、店長さんは店先まで出てきてくれて、「こんにちは」と声を掛けてくれた。

「今日は仕事入れていますんでしたよね？ お出掛けですか？」  
「買い物に出てきました。夕飯はどうしようかと思っていたところ  
です」

のんびりと答えると、店長さんは「さっきお昼が過ぎたところなの  
に？」とくすくす笑う。けれど、世の主婦なんて、基本的に常に  
家族の食事のことを考えているものだろう。

お昼が済めば夕飯。

その流れは普通だと思うし、とても重要なことだ。

大抵家族に聞いても「なんでも良い」と返ってくるけれど、どこ  
かで期待していた何かと違っていれば、その食事は激減。

馬鹿馬鹿しく思えてくるけれど、作った以上全部食べて欲しいし、  
そうになると、やはり何が望まれているのかと常に思案してしまう。

「僕は和食が良いですね。時々無性に食べたくくなります」

「和食、ですか、かなり範囲が広いですけど」

「煮物とか？ ああ、今なら南瓜が美味しいですよ。ああ、です  
が、茄子くらいの方が良いかも」

南瓜より茄子の方が好きなのかなと首を傾げればさらりと続ける。

「買って帰るには荷物になりますし、重いですよ。荷物持ちがいる  
ときでない」と

なるほど。本当に気配り上手な人だなあと感心している間に、う  
ーんっと唸ってから続けてくれる。別に評価アップを狙ったとかで  
はなくて、素で気遣いが出る人なのだと驚きつつ会話に戻る。



「あと焼き魚、秋刀魚とかが良いですか？」

「じゃあ、お味噌汁もあったほうが良いですね。具は何が好きですか？」

「豆腐とワカメが良いです」

そこまで話して、顔を見合わせると噴出してしまった。

別に私は店長さん家の献立を考えているわけではない。それでもこうして明確なものを告げてもらえると助かる。

私は参考になりましたと締め括り、ぺこりと頭を下げた。なぜなら店の電話が鳴っている。店長さんも店内を気にして「ええ、それじゃあ」と微笑んでくれた。

「あ、」

こつこつと少し進んだところで呼び止められて振り返れば「大根おろしは手が荒れますから、手袋したほうが良いですよ」と手袋をするジエスチャー付きで付け加えられた。

「はい、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げて、上げると

「いってらっしゃい」

と微笑まれた。

「……いってきます」

反射的に返したものの、少し気恥ずかしい。

ふふ、変な人。

でも少しだけ暖かい気持ちになって、今度こそお店の前を通り過ぎ、からんころんつと店の扉も閉まった。

……

勢い付いて、店長さんと話題に上がったもので夕食にしたものの、良く考えたらうちで煮物は評判があまり良くない。

半分以上残った。

お裾分けでも、と思ったけど、私の料理は多分不味い。

そんな嫌がらせみたいないな真似するべきじゃないだろう。

はあとシンクに両手を着いて、ちらりと沢山余ってしまったている鍋の中身を見詰めた。

「明日、お弁当に詰めていけば良いか」

「えーお母さんお弁当なの？ 良いな！」

お風呂上りの子どもが私の独り言を聞きつけて駆け寄ってくる。激突してくるのを受け止めながら「土曜日は一緒に作るね」と笑った。

「一人で留守番なんてさせて大丈夫なのか？」

「え、大丈夫だよ。もう小学生だし、それにそんなに遅くないから」

突然話しに入ってきた夫に告げれば子どもも「大丈夫だよー」とへろへろ返す。本当は心配でもあるんだけど、子どもの仲良しさんのお宅にも話してあるから大丈夫だと思う。

そう、話したと思うんだけど。

「ともちゃんー、かずくんが遊びに来るしねー」

おやつ準備もよろしくーと、本人はご機嫌だ。ぱたぱたと台所をあとにした。その様子を眺めて「大丈夫なら良いけど」と彼も踵を返す。

「ね、ねえ」

反射的に彼の手を掴んでいた。「何？」と振り返られても、え、えーっと……えと、

「あ、明日何食べたい？」

「オレは何でも良い」

「いや、でも何でもって……」

「じゃあ、なくても良い」

……っ。

言葉に詰まった私に「ほら、手離して、オレ見たいテレビあるから」あっさりとその声が掛かる。私は反射的に「ごめん」と謝って手を離れた。

とても、遠いな。

彼の背中を見詰めて溜息。

私はまたシンクと向き合った。

思いつかなきゃ食べなくても良いって？ まあ、不味いもの食べさせられるより、適当に外で済ませたほうがそりゃ良いよね。

こつんっぽんっど軽快にシンクが水を弾く。私は慌てて目元を拭

って、残りものに蓋をした。

## 第十一話

\*\*\*

一色で統一された室内は無機質さを隠せない。  
その中の一角だけ、熱い吐息が漏れ生を感じさせる。

私はぼんやりと彼の腕の中で抱かれながら、物思いに耽っていた。  
こちらで目を覚ますとどのくらい経っていたのか、レイアスから  
手紙が届いていた。手紙なんてものをここで受け取ったのは初めて  
だ。

浮き足立って、封を切ったら明日の夕刻にはこちらに着くという  
ことだった。

この間の話からすれば、それから暫らくはいてくれるのだろうか  
ら、私の気持ちは凄く凄く上昇してそれだけで満たされた。

恋をしているときは、確かに毎日こんな感じだ。  
相手の一挙手一投足で一喜一憂して、馬鹿みたいになる。

いや、実際馬鹿になるんだと思う。

そうじゃないとこんなに浮かれた気分は味わえない。現実で否定  
的な分、こちらでは最近素直でいられる。

「……………お金ですか？」  
「はい、少して良いんですけど……………あの、私に出来るお手伝いをし  
ますから」

私は手紙を握り締めたまま、廊下を歩いていた信者の一人を掴まえてお願いした。彼女は少し不思議そうな顔をしたけれど、私と私の手の中のもの交互に見て、にこりと微笑んで「分かりました」と頷いてくれた。

明日は街に出て、彼に何かを用意してあげよう。

きつと遠いところから来るのだろうから疲れていると思うし……  
そう思うと気持ちだけがふわふわと浮き立つような感じがした。

「っ、姫」

突然ぎゅっと抱き締められ、耳元で声がして私は我に返った。

キスも優しく女性扱いにもそれなりに慣れているのだと思うけれど、彼は思いのほかしつくく私は長い間揺られていて、ぼうとしてしまっていた。

そんな彼は大抵ことが済めば夜中だろうと明け方だろうと、そのまま帰ってしまうから私の頭は明日のことではいっばいだったのだけど、今夜は帰らないらしい。

ぼすつと私の隣に横になって、私のこめかみ辺りから鼻先を摺り寄せそのまま髪に埋もれて眠ってしまった。

珍しいな。

とぼんやり感じながらも私も船酔いみたいな感覚から抜け切れずに瞼を落とした。

……

夢現ゆめうつの狭間で、小鳥の悪戯あくごうみたいにかかしに口付けられる感

覚に引き上げられる。くすぐったくて心地良くて、こんな可愛らしいことをするのはレイアスだと思いい口元が緩んだ。  
そして、ゆっくりと瞼を起こすと

「あれ？」

「お目覚めですか？」

ふわりと飛び込んできた髪は紫暗色。

薄っすらと落ちる明かりが当たる部分だけ薄紫色にキラキラしている。

そして、私の目尻を撫でて顔を覗き込んできたのは、どこかの宰相閣下だ。静かにぱちぱちと瞬きを繰り返し、その姿をはっきりと瞳に映す。

「何か良い夢でも見ていらしたのですか？」

持ち上げた手で目を擦ろうとしたら、絡め取られて瞼には口付けが降りてきた。

夢の中で見る夢はなんだろう？ 私は無言でぼんやり。

そんな私を見てくすりと微笑むと「夢と幻の狭間でたゆたう貴女は美しい」とそして宰相閣下は「朝ですよ」と告げ肌を重ねる。

「……………んっ」

耳の後ろあたりに暖かい息を吹きかけられ唇が寄せられる。

起き抜けだからか、意図せず熱の籠った吐息を零しそうになる。

飲み込んだはずだけど、首筋を丁寧に舐められ、背に回った手のひらが柔らかく素肌を撫でると息を殺しているのも辛くなる。

「朝陽に映る貴女がこれほど濃艶であることを知りえていたのなら、時が許すその限界まで、貴女のお傍を離れはしなかったのに……」

彼の眼に、夜の私と朝の私が違うと見えているのなら、それは、彼が変わったからだ。彼はここを訪れたときのように病んだ瞳はしていない。ということは、断つても私はきつと悪くない。

私の肌を味わうように撫で口付けられる行為に、時折ぴくりと身体が跳ね零れる吐息を慌てて押し留めるけれどそれにも限界がある。

「神子姫」

「あつ、んう、あ、あのっ！」

尚深くなりそうな愛撫に私は何とか腕を突っ張り、少しだけ引き離れた。

婀娜っぽい瞳をした閣下は、すうっと冷たげな瞳を細めて「はい」と返事をしてくれる。

ああ、駄目だ。

赤くなる顔だけは抑えられない。

自分の身体が火照り、頬が熱を持っていることを私が自覚するくらいだ、閣下も気がついてのことだろう。微妙な敗北感がある。

「お願いが、ある、のです」

そう告げれば、腕に込められた力がふと弱められた。

今度は愉快そうな瞳を向けられる。

あまりマジマジと見たことはなかったけれど、この人はこんなに



表情豊かな人だったのだなと思いつながら私は続けた。

「本日は、お急ぎではないのですか？」

「神子姫のお望みとあればどちらでも構いませんよ」

それは大丈夫ということだろうか？

「街へ、その、街へ連れて降りてもらえませんか？」

お金は貰ったけど、良く考えたら街へいくまでの足がなかった。  
歩いて降りても良いけど道がさっぱり。

一本道だとは思ったけど、あの時は彼が馬を出してくれたから到着するまで全く周りを見ていなかった。

「街、といいますが、巡礼の地、神殿の膝元ですか？」

「えっと、どこの何かは知らないのですが、ここを降りた先にあるところですよ。私、地理には明るくなくて、その、連れて降りていただければ帰りは何とかしますよ」

「何とか、って……神子姫が、ですか？」

こくこくと頷く私に彼は楽しげに口元を緩めて「分かりました」と頷いてくれた。

さっきのことはあっさりチャラになって、ふわわつと歓喜に胸が沸く。

なんとか街まではいけそうだ。

「他ならぬ神子姫様からの頼みごと、聞かぬわけにはいかないでしょ」

仰々しくそういつて、彼はするりと寝台から抜け出して傍に置いてあった着衣を整えていった。

「神殿のものには話を通しましょう。表でお待ちしていますので準備が整いましたらどうぞ」

紳士然とそう告げると恭しく頭を垂れて部屋を出て行った。

ここを訪れるような人たちは、大抵身分の高い人が殆どだから礼儀は正しい。

まあ、それが国のトップともなると、そうでもなかったりするのだけど……。

「と、そんなことよりも」

折角長く夢を見ているのだから、早く用意して出掛けないと。

私はばたばたとこちらでは滅多に使うことのない浴室へと向う。身体を綺麗にして慌てて、以前降ろしてもらった服に袖を通す。

そして、化粧台の引き出しに大切にしまっておいたペンダントを手にとってそつと掛け、鏡を見て、ふふつと笑いを零す。

我ながら気持ち悪いことこの上ないけど、大好きなのだ。  
仕方ない。

私は一度だけ鏡の前で回っておかしなところがないか確認してから部屋を出た。

駆け出しそうな勢いなのを必死で堪えて、努めてゆっくりと足を進める。扉の前まで来れば、両脇に控えていた人たちが一礼して開いてくれた。

## 第十二話

「お待ちしておりました、神子姫」

神殿の前には馬車が付けてあつて、歩み寄つてきた宰相閣下がそつと手を伸ばした。

私はその手を取りつつ、

「馬車、ですね」

「ええ、馬車ですが……」

こんなもの結婚式場でくらいしか見たことなかった。ごてごてとした装飾があるわけでもないし、天気が安定しているからか、屋根もない。

思わず眺めてしまっていたら、くすりと笑われてしまった。

「早馬ではありませんから、時間も掛かります。そろそろ出発しませんか？」

「あ、はい」

彼は先に乗り込むと、不安定な揺れにバランスを崩しそうになる私の手をそのまま引いて座らせてくれた。その隣りに閣下が腰を降ろせば馬車はゆっくりと動き出す。

「お手間を取らせてすみません」

「いえ、こんな機会に恵まれるとは思いませんでした。それに、この馬車は私のものではなくて神殿所有のものですよ」

「え？」

そっか、神殿にだって人が沢山住んでいるんだから、移動手段と  
いうものは必要になってくるよね。私が一人で納得していると閣下  
は話を続けた。

「私はどうにも信用していただいていないようで、そのまま姫を連  
れ去ると思われているようですよ」

前例でもあるのでしょうかね。と意味ありげにくつくつと口元を  
覆って笑いを零す。

別に疚しいことはしていないけど、確かに、その点について神殿  
の人たちが警戒しても仕方ないと思う。

それにしてもこの人、元気になると、腹黒いタイプだ。

落ち込んでいるときの方が余程大人しく人畜無害そうに見えるの  
に……私はこのときやっと人選をミスしたような気がした。

見覚えのある門前まで来たところで馬車は一度止まる。

「ご希望の場所はどちらですか？ その門前まで馬を進めますよ」

「え、あ……ええと、私ここで降ります。特に場所は決めていませ  
んし、その……」

「ごによごによとそういえば「私も供をしましょう」彼は静かに立  
ち上がり先に降りてしまう。

遠慮する隙もお断りする暇もない。

「あの、私は一人でも」

気ままに一人でショッピングというわけには行かなさそうだ。

続けて立ち上がった私の手を取って、ゆっくりと地面に降ろして

くれる。まだ揺られているようで、かくんつとひざが折れそうになるのを支えると彼は静かに続けた。

「一人でどうされるのですか？ どちらにしても私は一度神殿に戻らないといけない。私は神殿に馬車を預けたままですからね」

「……………ご迷惑お掛けします」

確実に人選をミスした。

押し負けた私に彼は微笑み「それに」と続ける。

「護衛が居ないというのも問題ですよ。私は傍に控えておりますから、そう邪険にしないでください」

「そのような、ことは……………」

太陽の下で見ることはなかったし、直接個人を個人として見ることがなかったから気がつかなかったけれど、涼しげな美人さんだ。こんな人と昨夜一緒だったのだと思うとくらくらする。

引いてくれそうにない宰相閣下にはこの際目を瞑るとして、私は気を取り直し街へと入る。

外門を潜ると、あの日来たときと変わらず街は生き生きとしていて輝いている。

その空気に触れるだけでも自然と心が軽くなる。

閣下は控えているという言葉通り、私より数歩離れたところをのんびりつついて来ていた。

広場まで出ると今日は市が立っていたのか、その跡始末をする姿も見えた。

朝市の後片付け？ といったところだろうか？ そんなものがあ

つたならば是非見てみたかった。私はそれを横目にしつつお店を一つ一つ眺めて回る。

彼は何が好きだろう？ 私にとっては見るもの全て新鮮でどれも楽しいし大好きだけど、彼はそういうわけではないはずだ。

うーん、一口に贈り物といっても色々あるだろうし。

私は彼の趣味を何も知らない。

そういうときのプレゼントの鉄則は『自分の好きなものを贈る』  
うん。きつとこれだ。

私はそう思って、改めてショーウィンドウを眺める。

お菓子はこの間買ってもらったし、ケーキ……美味しそうだけど、日持ちしないだろうしな。大体私が起きてしまったら、時間軸が良く分からない。駄目になっている可能性だってある。

うーん、でも、ああ、これなら。とふと思いついて、私はふと顔を上げると後ろを見た。控えていた、閣下に「あの」と声を掛けると、すつと歩み寄ってくれる。

「あれなんですけど、」

「ケーキですか？ 可愛いものをお好むんですね」

女性らしいと加えられ、また笑われてしまった。

私はそんなに彼のツボを刺激するのだろうか……。というか、顔が近いのですが、頬が当たるほど近くに来なくても同じものは見えると思うし、何気に腰に掛けられた手がくすぐりたいのです。

むうっと眉を寄せたところで「買ってきましょうか」と重ねられ私は慌てて首を振った。

「い、いえ、そうではなくて、私お小遣いは貰ってきたので」  
「小遣い、ですか？」

慌てて口にすれば、彼は涼しげな目元を驚きに変え、僅かな沈黙のあと、我慢ならないと笑い出してしまった。

「え、あ、え、ええと……あの、私、そんなに変なことをいいましたか？」

「いいえ、滅相ありません。間違っています」

それならそんなに目に涙浮かべるほど笑うことないのに……。

「すみません、あまりに可愛らしかったので……それで、私は何の相談に乗れば宜しいでしょうか？」

私がしょぼんとしたことに気がついたのか、彼は姿勢を正し丁寧に問い直した。

私は、ポケットから受け取っていた小さな袋を出して「これで足りますか？」と訪ねた。閣下はなるほどと微笑んで、そっと私の背を押し、店の扉を開いた。

そして確認して私の代わり買い物をしてくれた。

どうぞ、と渡してもらえたパウンドケーキはまだ暖かくて柔らかい。

今すぐ食べさせてあげたいのに、一緒に居るのが別の人で物凄く残念だ。

## 第十三話

「ありがとうございます」

からころと木で出来たベルに見送られ通りに出ると私は改めてお礼を告げた。

「お役に立てて良かったです」

そういつて軽く礼をすると、閣下はまた私から一步下がってくれた。

買い物が続けて良い、ということだろう。その小さな心遣いが気恥ずかしいような嬉しいような、私は複雑な思いでふらりと足を進めた。

あとはやはり身につけるものとか良いと思う。

シャラリと胸元のペンダントを掬い上げる。

可愛い。

どうして、現実世界には持ち帰れないのだろう。もし、持ち帰れるなら毎日こっそりと身につけておくのに。

そして、ふと足を止めた。

この間私がショーウィンドウの硝子を割りそうだといわれたお店だ。商品は綺麗に入れ替わっている。新しいものもどれも私の好みだ。この店とは、多分、私相性が良いのだと思う。

指輪……とかは、邪魔だよね。



騎士つてくらいだから、剣を扱うのだろうし……神殿内には武器関係は持ち込み禁止なので彼が帯刀しているのはあまり覚えがない。そういえば、ここに来たときははしていたはずだけど、顔と足元しか見てなかった。

……私どんだけ恥ずかしいヤツなんだ。

同じように首飾り、いや、でもそれじゃあ如何にもお揃い意識してますって感じで恥ずかしいよね。

うーん。

あ、腕輪だ。

丁度私の目に留まった腕輪……バングルっていいかたの方が良いのかな？ は、銀製なのかな？ 落ち着いた色味だし、彫りも丁寧で綺麗。

中央の石も丁寧に磨き上げられていそうだ。

サイズはきつと大丈夫だよね、かつちり留めるタイプではなさそうだし微調整は好きそうだ。私は再び振り返り「あの」と声を掛ければ、同じように歩み寄ってくれ、同じように近い。

「少し、近いです」

「貴女の声を一音も聞き逃したくはないので」

そんなにひそひそ話はしていない。

でも、この人に何をいつても丸め込まれそうな雰囲気だったので、私は距離の譲歩は諦めて品物の相談に入る。

もちろん、金額面なのだけど……今度はこんなことがないように、物価とか貨幣のこととかレイアスに教えてもらおうと心に決めつつ「あれなのですが」と硝子越しに指差す。

「男物ですよ？」

「あ、え……ええと、その……」

私が個人的に誰かに贈り物というのは拙いだろうか？ 拙い、よね。

「私が……身につけるのです……」

「ごによごによと、消え入るような声で続ければ「分かりました」と素直に頷いてくれた。

それに、ほっと胸を撫で下ろしたのも束の間「他言はしませんよ」とこめかみに唇が寄せられる。くすぐったくてびくりと肩をこわばらせても、腰を取られているので逃げ場がない。

ほんつとおに人選ミスだ。

顔から火が出そう、というのはきつとこういうときにいうのだろ  
う。

「それで、貴女の『小遣い』で買うのですよね？」

すつと姿勢を正して私が渡した財布を受け取ってくれる。

中身を確認しつつ「貴女を射止める男には興味がありますね」と口にして、私が否定しようとするればするりと抜けて店に入ってしまった。

私は慌ててその後ろを追い掛ける。

結局荷物も両方彼に持ってもらう形になって申し訳なく思っけれ

ど、普通のことだといわれてはそれ以上は食いつけない。

「あの、やはり別のものに……」

とことごと彼の隣りを歩きつつ袖を引けば彼は苦笑しつつ答えてくれる。

「大した額ではありませんし、気にされるなら次回またいたたときにでも返済してくださいだされば良いですよ」

「ですが」

そんなのいつになるか分からないし、私は私のお金で彼に贈り物をしたかったのに。

そう……少しばかり足りなかったらしくて、私に聞く前にあつさり彼が立て替えてしまったのだ。この人にだけは借りを作りたくない！ というタイプなのは、この短時間で骨身に沁みたというのに、情けない。

はあと溜息を重ねても、どちらかといえば宰相閣下はご機嫌そうだった。

その表情を盗み見て、私は神殿に帰ったら先に前借させてもらって戻してしまおうと心に誓い、なんとか暗雲を払った。

そして、レイアスが戻る前に神殿に戻ろうと帰路を急いだら、神殿には既に宰相閣下の迎えが来ていて、彼はそのまま回れ右をして国へと戻ってしまった。

私への挨拶もそこそこに帰路に着くその素早さは目を見張るものがあった、私は今日買ったものを胸に抱きぼんやりと見送ってしまった。

……はっ！ 返しそびれた。

気がついて最後の祭りだ。

## 第十四話

\*\*\*

次の夢が楽しみすぎて、目覚めと同時にほくそ笑んでしまった。

我ながら情けないというか、格好悪いというか……逃げすぎだと思っ。思っけど……ちらりと隣を見ればまだお休み中。きつとまた不機嫌そうに眉を寄せられるだろうから、今朝はやめておこうと私は静かにベッドを抜け出した。

お弁当もよし。

朝ごはんもよし。

今朝もちゃんと準備完了。

問題ないと思っ。あとは子どもが起きてきて「いってきます」を聞けば大丈夫。というか、子どもにこそ朝ごはんくらい食べてもらいたいのに、はあと吐いた溜息を聞く人も居ない。落ち込みそうになつたら、子どもがばたばたと二階から降りてきて、そのままの勢いで外に出て行く。

いってらっしやいと手を振れば元気に「いってきます」と答えてくれる。

子どもは良いよね。

これからがいっぱい詰まってる。

出会うものの殆どが初めてで、全てがキラキラだ。

嫌なことや死にたくなることもあると思うけど、それでも、やっぱりその全てが初めて。  
初めてはどきどきで溢れていると思う。

私に残されているものといえば、その子どもの成長を見守り、年老いて生き終わるのを待つだけ。それも……

「どいて」

「あ、ごめん」

こんな夫と。

玄関先で立ち尽くしてしまっていた私に心底邪魔臭そうにそういつて、脇をすり抜ける。ぼんやりと靴を履く姿を眺めて、腕時計の時間を確認しているのを見詰める。

目が合わないな。

「ねえ」

「んー」

「キスして」

嫌、はいくらなんでもないよね？ 勇気を振り絞って告げたら、ここ暫らく振りにまともな目に目があった。

どきどきと期待と緊張に胸が高鳴る。

ぎゅっと胸元で握り締めた手に力が籠る。

「すれば？」

「私は、貴方からして欲しいの」

「したいならすれば良いだろ。ほら」

つ、と顎を上げられてしょんぼりと気分が萎える。

「私からじゃなくて」

「じゃあ、行くから」

あつさりと切り抜けられて、玄関のドアは外界との接触を完全に断ち切るように、すうっと音もなく閉じた。一人きりで残された場所は、例え玄関でも私には広すぎる。

夢が幸せであつただけにその反動は大きい。

現実なんてこんなもんだ。

夢の中の人たちも、まさか私がこんなに誰にも相手にされないクズだなんて思わないだろう。レイアスも気の毒だな。

自嘲的な気分になつたけれど、今の私には仕事があるし、ここでぼんやりもしてられない。

私は気を取り直して、片付けと身支度を始めた。

……

「おはようございます」

私は出来る限り元氣そうに挨拶して、お店のドアを開いた。

先に店に入っていた店長さんは「おはようございます」と返してくれたけど、少し元気がない？のかな。そう思って、ふと「店長さん？」と声を掛ければ次に顔を上げたときにはいつも通りだった。荷物を裏において戻ってくると

「外の掃き掃除お願いしますね」

と箒と塵取りを渡される。

赤茶色とクリーム入りの可愛らしいレンガで敷地内は囲まれている。

街路樹から落ちてくる葉っぱ掃除とか、小さな花壇の手入れとかも仕事の一つ。細かいところは箒では取りきれないから塵取り片手にしゃがみ込んで、拾っていく。

やっぱりやるからにはきちんとやるべきだ。

「はあ」

それにしても現実ではキス一つまともにも出来ないなんて、情けない。

やっぱり私は自分でも気がつけないところが汚れてるのかもしれないな。教えてもらわないと分からないけど、それを今教えてくれる人は居ないし……癖のように肩口に鼻を寄せる。

この季節愛用している香水の香りしかない。

やっぱり自分では分からないな。

仕事も長く続けられないかも、親しくなったらきつとそれに気がつくだろうし、そんな人雇っていたくはないだろう。

本当は私なんて家の中で生き終わるのを、ただ漠然と待っているだけがお似合いなのかもしれない。

けど、でも……とりあえず、今日は頑張ろうっ！

すっくと立ち上がったら背後に店長さんが居たらしい。「うわっ」と短い悲鳴が聞こえた。



「げ、元気ですね？」

「あ、え、ええと、すみません」

「そんなに几帳面にしなくても大丈夫ですよ。ほら、」

いって指差される。

掃いたそばからはらはらりと枯葉がまた舞い降りてきていた。う、と息を詰めた私に店長さんは「キリがないんですよ、この時期」と笑う。確かにそうだ。

「それで、あの、何か？」

「ああ。水遣りもお願いしようと思っただんです。これジョウロ。水道は建物をあつちに回った隅にあるので宜しくお願います」

「はい、頑張ります」

「……えーつとほどほどで……水浸しにしちゃ駄目ですよ」

アルミ製のジョウロを受け取りつつそういえば、くすくすと笑われてしまった。

私、なんか各所で笑われてばかりだな……恥ずかしくなって俯けば「是非頑張ってくださいね」と声を掛けて店長さんは店に戻っていった。

……あ、パンジーになってる。

さてと気を取り直して花壇を見れば、小さなパンジーが整然と並んでいた。

パンジーは長持ちするし、見た目にも可愛いし、種類もあるし、良いよね。私もこの間家の裏に植えたところだ。

一通りの用事が終わって店内へ戻ると、店長さんがお茶を淹れてくれていた。

「お疲れ様」

「あ、え……っと、すみません、あ、いえ、ありがとうございます、ございませす」

客商売なのに、あまり上手く話せない。

直ぐに赤くなってしまふ顔を隠すように伏せれば、店長さんはそんなこと微塵も気にした風もなく、早くこっちこっちと呼んでくれる。

私がおの手招きに招かれて歩み寄れば「これ見て」とこっこっかウンターを叩くのでふと視線を落とす。そこには、沢山のインデックスの付いたノートがあった。

どうぞと渡してもらい素直に受け取ってぱらぱらと捲る。

「片手間に作ったので、あまり綺麗には纏まっていないかもしれませんが、いいですけど」

「はい」

「今店にあるもののリストです。商品タグに記号があるのでそれに合わせました。簡単な説明を書き込んでおいたので、その程度説明してあげれば大抵のお客さんは納得してくださると思います」

にこにこそういわれて、私は手の届く場所に在ったスタンドライトのタグをぴらと見る。

そしてノートを捲る。

該当箇所には、年代とか様式、商品の略歴、手入れ方法などが書いてある。

「それ以上聞きたいお客さんは、貴女にはまだ荷が重いでしよう、僕に遠慮なく回してください」

「凄いつ！ 凄いですねっ。わざわざ作ってくれたんですか」

思わず声が大きくなってしまった。慌てて閉じたノートで口元を隠した。

恥ずかしい。

「在庫管理はパソコンでもやってるんですけど、基本手書きしちゃうんです。これにも出番が出来て良かった」

にこりとそういつて私の手からノートを抜き取ると最後のページを捲る。

「店内図なんですけどね、このカウンターのあたりを中心に……」

この辺からこの辺と店長さんの指先が動くのを目で追い掛ける。

「あまり金額的なことはいいたくないですけど、まあ、そこそこの張るものです。こっちはレプリカ、あとはこっちが知り合いの工房で作られているハンドメイドです。少しスペースを貸しています」

私はこくこくと頷いた。

「暇なときにも眺めていると良いと思います。もっと専門的なものは家にもありますから声を掛けえてください。持ってきますね」

私は尚こくこくと頷いて、再び手元にノートを受け取ってこくこくと頷いた。

「首折れちゃいますよっ?」

首肯を重ねる私に店長さんが面白そうにそういつて、冷めないうちにとマグカップをこつんと弾いた。

そして私はまたこくこくと頷く。

重ねて笑われてしまうけど気にしない。

だって、少し感動した。

何か書き物をしているのはちょこちょこ見ていたけど、これだとは思わなかった。

私が役に立たないからだとは思うけど、一人で頑張れねばと思っていたから……凄く助けられた気分だ。

## 第十五話

「ああ、そうだ。それから、その椅子ちょっと貴女には高いですか？」

「え？」

「いえ、丁度貴女の腰辺りに来てしまうから、座り辛いのかと、以前は気にならなかったのですが……立ちっ放しでは辛いですし、見たら固定で調節が出来なかったので、新しくしたほうが良いかと思っただんです」

「どうですか？ と重ねられて、慌てて平気ですと答える。

この間は座り辛い理由があったからで……大体、カウンターチェアは高めだ。これは普通だと思っ。

「そう？」

「はい、平気です。っと、えーっと、奥様は背の高い方だったんですね」

ひっ、私ってば話の逸らし先が最悪だ。

思わずぼろりと出てしまっって内心慌てたけど、店長さんは「そうですね」とちよっと考える。

「ヒールを履くと僕とそんなに変わらなかったですよ。七十五くらいあったんじゃないでしょうか？」

「うわ、モデルさんみたいな方だったんですね」

って、だから、普通別れた奥さんの話しなんて振らないよ。私の馬鹿っ。

「そうですね。美人さんでした……っと、でしたというところ怒られると思うので、です。かな」

にっこりと毒なくそういつてくれる店長さんとその奥さんは、どこが擦れ違ってしまったんだろう。

こうやって何の棘もなく今居ない人のことを話すことが出来る人なんて、そんなに悪い人ではないと思うんだけど……うちなんて……なんで別れていないのかの方が不思議だ。

裏表があるかなんて私には分からないけど、とりあえず私の前で店長さんはとても良い人だ。

きつと誰の前でもそうなのだと思う。

「ぶっぞ」

その証拠みたいに、今日はお客さんが多い。

それも女の子が中心。年齢層も広い。

学生さんも今日はテスト期間とかなのか帰りが早いらしく制服姿の子も目に付く。

そんなお客さんと話しこんでいたようだから、お茶をお出しする。紅茶が殆どだったから上手に淹れられたか心配だけど、噴出すほど拙くはない、よね。

かちやかちやとソーサーを握る手が震えてしまう。

「ありがとう紗々ちゃん」

「はー」

にこり……出来たかな？ 急に店長さんに名前と呼ばれるから吃驚した。

それが、フェイクの指輪と同じように、お客さんとの間に作るほんの少しだけの壁だということは分かったから、出来る限り普通に対応したつもりなんだけど。

動揺ばれてないの良いな。

ちらと運んだカップを見て、カウンターの裏にあるマグを思い出す。

一客五千円以上するカップだ。こういう店はそういうところに見栄を張らないといけないんだと店長さんは私の驚きに笑いながら答えた。

客商売っていうのは大変なんだなとつくづく思う。

私が以前働いていたのは事務職だったから、お客さんも業者の人が多かった。

だから、対応も質も全く違う。

どうしても外に出し切れない内向的な私には不向きなのかもしれないなあ。と感じると悲しい。でも、このお店は好きだ。

もう結構、といわれるまでは頑張ってみようと思う。

「すみません、これ、つけてみたいんですけど」

ぼんやり考え事をしていたら、ショーケースの前から声を掛けられた。

私はカウンターの裏っ側に掛けてある小さな鍵を握って、ぱたぱたと歩み寄る。

制服姿だから学生さんだと思う、高校生くらいの女の子が「これです、これ」とコツコツ叩く。

開錠しながら確かこの辺は値の張るものだなーとか思いつつ硝子を開いた。

アクセサリー用のトレイに商品を取り上げるときに、ちらと見えた値札は七万になってた。私でも即決するのは無理です。

でも、女の子だもん。

ちよつとつけてみたい気持ちも分かる。

私はそのあともいくつか、いわれた指輪を載せて彼女の前にどうぞと並べた。楽しみに次々と指に嵌めていく姿を見ると、からんからんと扉が鳴る。

店長さんが相手していたお客さんが帰ったみたいだ。

「やっぱりこれが一番可愛い、でも大きい」

う。

値段とか気にしなくて良いのかな？

私は気に入ったというのを見てちよつと怯んだ。

「ねえ、おばさん」

「え、はい」

「ごめんなさい、えーっと、サイズとか直せない？」

別におばさんで間違いないし、わざわざ謝られると私が気にしているようだ。

変な気遣いをさせてしまったなと思いつつ「失礼しますね」とそつと指に嵌めたままになっていて手を取り指輪に触れる。

このくらいなら直さなくてもいけると思っし、それに、いわゆる



一点もの直しはここでは出来ない……どうしてもというのなら外注するのだけだ。

「これはお直し出来ないんですよ。ということは、貴女に出会うべき石ではなかったということですね」

ずっと私の隣りに立った店長さんが、そっと彼女の手を取りあっさり抜き取ってしまう。

え、と彼女と同時に声を上げそうになったけど、私はかろうじて飲み込んだ。

「こちらなら貴女に良くお似合いですし、サイズも丁度良い」

物凄くスマートに彼女の指に新しい指輪を通してしまう。

接客に慣れているのか、女性に慣れているのか疑わしい感じで。

そのあとその子は機嫌良くそれをお買い上げして帰っていった。出していたものに比べればおもちゃ同然だけど、あれだって七千八百円したのに迷わないんだな。

今の学生はお金持ちさんだ。

そんなことを考えながら出していた指輪を一つずつ丁寧に並べなおす。店内も波が引いたようで静かになった。

「手伝いましょうか？」

「いえ、大丈夫ですよ。でも、良くあの子のサイズが分かりましたね？ 職業柄的に分かるようになるんですか？」

最後の一つはあの子が気に入っていたものだ。

確かに綺麗だよねと、光に翳して眺めつつ気軽にそう問い掛ければ店長さんはくすりと笑いを零した。

「あれね、簡単に直るんですよ。ええ、とコレです」

ひよいと傍にあつたアクセサリーツリーから取り上げて私に見せてくれる。

「このトップの部分とリングの部分がこうずれるようになっていて、好きにサイズが変えられるんです。ですから、彼女の指に入れたときに軽く力を入れてサイズを合わせました」

にこにこりと簡単に告げる。

でもそれをこともなくあっさりとかなすあたり、流石というか、私には無理な芸当だと感心しつつ思った。

「それにそれは貴女の方が似合うと思いますよ」

ひよいと私の手から残ったリングを取り上げて、私の指に入れてしまう。

サイズも確かにすこんつと抜けてしまうようなものではないし、こんなもんだろうなと思う。思うけど

……。

「そういえば、貴女は指輪されてませんか？ ピアスもネックレスもしているのだからアクセサリーが嫌いというわけではないでしょう？」

私の手を取ったまま、指に嵌った指輪を撫でつつそういった店長さんに「ああ」と頷く。

「水仕事をするのに邪魔になるのでいつの間にか指輪はしなくなりました。気が向いたときだけ私はつけます」

「じゃあ、ご主人はずっとつけてないんですか？」

「彼はサイズが変わったらしくて、割と早くつけなくなったから、私も気にしていません」

どこかぼんやりと店長さんの指先を眺めつつ淡々と答える。別にその通りだから嘘でも何でも無い。

「なるほど、では幸せ太りしてしまったんですね」  
「え？」

思わず見上げた私に店長さんも「え？」と重ねる。  
私は一体どこに反応しているんだろう。

一瞬迷ったら、店長さんが、はっと気がついたように「すみませ  
ん」と私の手を離した。

「い、いえ、大丈夫です。ごめんなさい。えと、そうじゃなくて、  
そうだったら良いなと思っただけです」

はわわっと、慌てて指に入ったままの指輪を抜き取りながらそう  
いった私に「きつとそうですよ」と穏やかに返されると、ずきりと  
胸が痛む。

何も知らないくせに。

私の、私たちのことなんて何も、知らないくせに、そんな有体の  
言葉を掛けるなんて酷い。

酷い……けど、店長さんのは普通の言動だ。

普通みんなそんな感じでいってくれて

「そうですね、ね。ありがとうございます」

と私も有体に返す。

きりきりと胸が痛んで仕方ないけれど、表面上笑顔を作ることにも私は慣れている。

その反応に少しだけ店長さんは不思議そうにしたけれど、直ぐにその色を消して

「それ、気に入ったら買ってあげてください。安くしますから」

と売込みして、裏に居ますから何かあったら声を掛けてくださいね。と自宅へと戻っていった。

その後姿を見送ってから、私はやっぱり丁寧にショーケースに指輪を戻す。

本当は結婚してから付き合いが増えて外食が多くなった。

その不摂生で太ったんだと思う。

私はその逆で、一通りのダイエット成果もあったと思うけれど、一人で食べるのが面倒臭くてあまり食べなくなったから結婚前より痩せてしまった。

でも、そんなことに彼は気がつかない。

はあとやっぱり溜息が零れる。

溜息は癖になるからやめたいのに、もう既に癖になってしまった。

またも重ねた溜息のあと、ふと視線を上げるとさっきの指輪が目に入る。

中央の黄色っぽい石は可愛い。

黄色人種だからか肌の色に馴染む気がする。

でも……この金額は安くしてもらっても、ぽんつと買えるものではない。

暫らくはこつやって眺めているのが関の山だろう。

## 第十六話

それから、暫らくはお客さんも引いてぼつりぼつりだった。

のんびりと資料を捲ったりしていたのだけれど、もうそろそろ終わる時間だなーという頃に、どことなくセレブっぽい雰囲気をかもし出した女性が声を掛けてきた。

名前を聞けば、店長さんに頼まれていた取り寄せ商品を受け取りに来るといふ予定の女性だ。私は少し待ってくださいねと、裏をがたこととしていたら、声を掛けられて扉の隅から顔を覗かせる。

「あの明日見<sup>あすみ</sup>さんから直接説明して欲しいんですけど」

一応取り扱いの説明も一通り聞いているし、私でも説明くらいは出来るのだけど、その旨を伝えても納得はしてもらえなかったから、私は仕方なく内線を鳴らした。でも、どういうわけか電話に出てくれないから、少しだけ待ってもらって、慌てて店長さんの自宅のほうへと向う。

「……………らね」

「別に、……………から、いいと……………」

誰かお客さんが来ているようだ。私は許してもらっているから直接家に入ってダイニングへと続く扉軽く叩いたけど、零れてくる話し声で聞こえなかったみたい。

「俺だつてね、あんまり……………つて、あれ？」

かちやりと扉を開いたところで店長さんと目が合った。どうかしめましたか？ とわたわた私のところへ歩み寄って来てくれる。お客

さんは背の高い女の人で、店長さんの動きに合わせてこちらへと振り返った。凄く華のある美人だ。

「もしかして、時間？ すみません、ちょっと話しこんでしまっていて、」

「あ、いえ、違います。あの、藤沢さんがいらしてて、店長さんからでないといけないと……」

私が至らなくて申し訳ないとしょんぼり告げれば、店長さんは「ああ」と苦笑した。

「気にしないでください。では、貴女はこのまま帰って構いませんよ。お疲れ様でした」

ふわりと一瞬だけ俯いていた私の頭を撫でた。え、っと私が問う間もなく忙しくダイニングにいた女性にも話しかける。

「それから、小夜ちゃんはここを荷物置き場にしないこと、分かったよね？」

びしりといったつもりだろうけれど、どこか優しげな声だ。「はいはい」と彼女が頷いたのを確認して、店のほうへと戻っていった。

……

なぜ私は今このような状態に置かれるようなことになってしまったのだろう……。

物凄く不思議だ。

物凄く不思議で物凄く強引な流れによって、私はどういうわけか、店長さんの元奥さんという小夜子さんとカフェに座っている。帰っ

て良いといつてもらえたし、邪魔になったら悪いからと思って、そのまま踵を返そうとしたのに。なぜ。

「このワツフル美味しいのよ？」

と勧められるがまま注文までしてしまった。この私の流され体質なんとかしなければ、変な宗教とか勧誘とかそういうえば、良く引つかかっていたことを思い出した。商品返品に骨を折ったものも沢山あった。

「あの、私夕飯の支度をしないといけないので」

「ああ、そうなの？ この近くにねとっても美味しいお店があつてテイクアウトも出来るのよ」

頑張つたのに、即躓いた。ええと、そういうことではとごによこによすると彼女は軽く眉を寄せて「何？ その程度も許せないような旦那なの？」と凄む。綺麗に整った表情は軽く不快感を表しただけでどきりとする。

私は「そんなことないです」と慌てて答え、今夜はそうしますと頷いてしまった。

まあ、実際私の料理に興味なんてないし拘りもないだろうから、寧ろテイクアウトのほうが美味しく喜ばれるかもしれないくらいだ。

子ども家でテレビでも見ている時間だと思つから、そんなに心配はしない。

でも続く話題がないな—と思つていたところで、注文していたワツフルが届いた。ふんわりあつたかなワツフルに冷たいバナラアイスクリーム。ベリーソースが彩を添える。彼女は珈琲を頼んだだけだ。



「早く食べてみて、アイスなくなっちゃうわ」

にこにこ嬉しそうにいわれて私は口に運ぶ。ほわっとした暖かさ  
とアイスの冷たさがなんともいえない食感と味わいになって本  
当に美味しい。なんだか、甘いものをこうしてのんびり食べるなんて  
凄く久しぶりで、ちょっとした贅沢。幸せかもしれない。

「あの人紅茶派なのよね。貴女はどっち？」

「え、私はどちらも美味しいです」

突然振られて手を止めると、食べて食べてと勧められる。

「仲良いですよね？」

他に共通の話題もないしなんとなく店長さんとの話を持ち出した。

「そうね。別に嫌いじゃないし、腐れ縁だし、幼馴染っていう奴で  
切っても切れなくて」

そういつて口先を尖らせるところがなんとも可愛らしい人だなと  
思う。凄く綺麗な人だから私なんかからすれば近寄りがたい人なの  
に、彼女はその壁を感じさせない。人を環に溶け込ませる天才みた  
いで、凄く自然に話しも出来る。

「幼馴染ですか、なんか良いですね」

自分を知ってくれてその上嫌われることがないなんて奇跡的だと思  
う。それなのに彼女は「ええ」とまた眉を寄せた。

「最悪よ、どのくらい前からあたしを知っていると思うの？ 知られたくないことのほうが多いし、理解しないで欲しいことのほうが多いのに、なんでも知ってますーって顔されるのよ。まあ、付き合やすいといえればやすいけどね」

「……………どうして別れたんですか？」

あ、ついはろつと出てしまった。

だって、店長さんにしても彼女にしても、お互いに陰悪なところなんて微塵もないし、今も普通に夫婦生活しているといっても問題ないと思う。

仲良しでCMでもなりそうな二人だ。とはいえ、それは私の個人的主観。

慌てて「すみません」と謝ったけど、彼女はにこりと微笑んでバッグから煙草を取り出して灰皿を寄せる。「良い？」と私に了承を取ってくれるから、どうぞと頷けば、慣れた仕草で火を点けた。

## 第十七話

「お子さんとか居ないんですか？」

「居ないよ」

ふうと緩やかに紫煙が上がり天井でゆっくりと回っていたシーリングファンに掻き消された。

「あれ？ もしかして紗々も離婚したいの？」

「え！ いえ、まさかそんなっ」

「そう？ なんか今羨ましそうな顔に見えたから。子どもさえいなければ私だって……みたいに見えた」

あっさりはずきりにこにこと告げられて、うっと詰まる。

その通りと頷くことは出来ないし、そんなことないと思いたいけど、時々は感じてしまうことだ。子は鎚というけれど、私たちにとってただの楔でしかないのではないかと思うことがある。

「ああ、泣かないで」

つつと彼女の綺麗に整えられた指先が私の目尻にそっと触れる。

顔を上げれば、軽く身を乗り出して近づいていた彼女と目が合った。

ふわりと頬が熱を持つ。

女の人にまでドキドキする私おかしい。

慌ててまた俯いて泣いていません。と答えただけど泣きそうだったのは本当だ。家で一人で居たなら確実に泣いていた。

「我慢するの、辛いわよね？ でも、可愛い顔も、美味しいものも台無しになっちゃうから、もう少しだけ飲み込もうか？」

幼い子を諭すようにそういって、良い子良い子と前髪を撫でて小夜子さんは椅子に座りなおした。

「でもね、あたしたちはそれで別れたのよ？ おかしいと思ったのよね、いくらやっても出来ないし」

あわわっ、彼女はあっけらかんとしすぎだった。

……

その日私はふらふらと家路についた。

小夜子さん。強烈な人だった。

でも嫌悪感を抱くことは出来ない可愛い感じの女性。

ケータイのメルアドと番号も交換してしまった。

最近、子どもの学校のお母さんたちとくらしがしなかったから、凄く嬉しくて新鮮。私を名前で呼んでくれる人との新しい関係。嬉しい。

……名前、か。

この家の中で私の名前を呼んでくれる人はもう居ない。門扉に手を掛けて家を見上げる。

子どもが帰っているから門灯も玄関灯も点いていてリビングからの明かりも洩れている。家全体を眺めて、溜息を重ね、きいと門扉を開いた。

「ただいまー」

「おかえりなさいー!」

ばたばたと子どもが迎えてくれる。

ぼすつともう私のお臍くらいまでは大きくなったこの子を僅かな間でも、楔や鎖のように思ったなんて、私、母親としても最低だな。ちゃんとお留守番出来たことを褒めながら私は家に入り、テイクアウトしたご飯をお皿に盛りなおした。

\*\*\*

なんだかばたばたとした一日だったし、最後に小夜子さんと絡んだのが印象的過ぎて今夜は夢なんて見ないんじゃないかと思ったけれど、私は夢を見た。

もちろん例の夢。

そして、手の中にはまだパウンドケーキがある。運が良いことに続きだ。

私は思わず綻んでしまった顔を慌てて隠し、なんとか無表情を装った。

部屋に戻って一人になるまでは我慢しなくては、私は『神子姫様』なのだから。形だけでも整えてあげないと信者の方と参拝して下さる方に失礼だ。

ぺちぺちと頬を叩いて気を取り直す。

姿勢良く、真っ白な回廊を進み自分の部屋を目指した。

「姫様」

いそいそと私室を目指していると送り出してくれた信者に出会った。

彼女は、私の姿に足を止め手元を見てにつこり、「良い買い物が出来ましたか？」と微笑む。私は気恥ずかしく感じながらも、嬉しそうに声を掛けられては無視も出来ない、同じように足を止めてお礼を告げれば恐縮された。

「あ、あの」

そのまま挨拶だけで通り過ぎるべきかなと思ったのだけど、そう出来ないことを思い出した。少し彼女との距離を詰めて小さな声で話し掛ける。

彼女は微かに頬を染めて私へ耳を傾けてくれた。

「今日私が一緒だった方が、どちらの方がご存知ですか？」

「はい、存じております」

「あの、また、お手伝いをさせていただいたので、その……今日、ちよつと足りなくて立て替えていただいた分があるのです。それをなんとか返金して置いてもらえませんか、必ずお返しますので……」

ふわふわとあまりの情けなさに頬が染まるのを隠すことも出来ずに、私がぼそぼそと告げると、彼女はいくらですか？ と重ねる。続けて、そつと金額を耳打ちすれば眉を寄せた。

「その程度ですか？ それを貸すと……」

私がこくこくと頷くと、彼女は私の手を両手で取って「姫様」と

顔を覗き込んでくる。首を傾げればゆっくりと続けた。

「こちらに來られた方は、癒しを求め傷付き痛みを抱えたものです。しかし、歸路の際は違いますよ。ご注意ください。紳士然としていまして、裏がないとは限りません。彼は癖のある方で国外で彼を好漢と呼ぶような人は居ないと聞きます」

広い意味で酷い噂だ。

そこまでは悪い人ではないと思うけど、っと、これが駄目だといわれているのだから、ちゃんと聞かなくては。私は必死にこくこくと頷いた。

「その金銭のことは、わたくしどもが片をつけておきますので、どうかお気に病みませんように」

「ご面倒をお掛けしてすみません。次がないように気をつけます」

「ごめんなさいと続ければ、優しいな笑みを向けられた。

「わたくしどもは神子姫様の味方です。頼っていただければわたくしども、少なくともわたくしは嬉しいです」

……味方。

か、なんとなくその単語に胸が温かくなった。

本当の私のことなんて知らないからだろうけれど、誰かに無条件でそういつてもらえるなんて幸せだ。私はもう一度丁寧にお礼を告げて今度こそその場をあとにした。

## 第十八話

そして、自分の部屋だけど、なるべく音が鳴らないようにそっと扉を開いて、室内へと身体を滑り込ませる。

「そんなにこそこそ戻らなくても良いんじゃないですか？」

そつと扉を閉じていたら背後から声が掛かって、私はびくりと肩を強張らせた。

でもそれは聞き馴染んでいる声で、私が待ち望んでいた声だ。

私はにこにこふわふわをなんとか押さえて、深呼吸。ゆっくりと振り返り「いらっしやい」と微笑んだ。

「予定より早く着いたんですね」

にこにこことそついいながら歩み寄る。

レイアスは窓辺に立ったままワイングラスを傾けていた。

色からして葡萄酒かな？　ここでお酒を飲んでいる人は珍しい。実際彼が飲んでいるのも初めて見た。

待ちくたびれるくらい待たせてしまっていたのかもしれない。

申し訳なかったなと思いつつ。私は彼が瓶とグラスを置いているテーブルにパウンドケーキと綺麗にラッピングされた箱を置いた。

「すみません。少しでも早いほうが良いかと思ったんですが、そう思ったのは俺だけみたいですね」

「……………」



いつになく棘のある言葉に首を傾げる。

そんなことないと口にしようと思っただけれど、ちらと彼を見上げても視線が絡まない。その様子に不必要なことは口にすべきではないかな？ と勝手に判断した。

その証拠のように、私が何かいいたいげにしていることには興味も持たず、彼は手に持っているグラスを睨みつけているだけだ。

空気が重たくて息苦しい。

どうしてそんなことになるのかさっぱり分からないけれど、彼は疲労困憊しているように見える。無理を押ししてここまで急いでくれたのだろう。

もっと早く戻れば良かった。

「え、っと、その、お茶にしませんか？ ケーキを買って帰ったんです。冷めてしまいましたけど、まだ柔らかいですよ」

なんとかかいつも通りそう続けてにつこりしたつもりだけど、ちゃんと笑えたかな。緊張して、肌の表面がぴりぴりと逆立つ気がする。

「……………そうです、ね」

そういつて彼はグラスをテーブルに戻し溜息を落として頷いた。

やはり疲れているようだから、淹れてくれるというのを断って先にソファに座ってもらう。私は少しでも疲れが取れると良いなと思いい丁寧に紅茶を淹れて、ローテーブルまで運んだ。

柔らかかなソファに腰を降ろしかけて、はたと気がつく。

「すみません。パンナイフがありませんね。貰ってきます」

「必要ないですよ」

「ですが大きいですよ？」

いって腰を上げかけるとぐっと彼に手首を掴れた。痛いくらいで、確実に拘束するだけの力が掛かっただけの力が掛かっただけのほんの少し心がざわつく。

「ちゃんとカットしてあります。直ぐに食べると思っただけでしょう？」

ぼすんつと彼の隣りに腰を降ろして、指先で包みを開いていた彼の先を見る。

確かに小売されているサイズにカットされているみたいだ。これならナイフは必要ない。フォークが欲しいところだけど、まあ、なくても良いか。

「本当ですね」

私は袋の一边をペリペリと破って中身を丁寧に取り出した。沢山のフルーツが入っていて美味しそうだ。そつとお皿に載せてどうぞと彼の前に置くと、微妙に眉間に皺が寄ったような気がする。

「あの、もしかして、甘いものが嫌いですか？ 好みが分からなかったなので、とりあえず、自分の好きなものと思ったのですが……すみません」

浮き足立って、ふわふわしていた気持ちが一気に萎えた。

きつと食べてもらえないだろうケーキに心の中で小さく詫びて、そつとテーブルの中央へ少し追いやった。

「あ、えっと、私着替えますね」

なんとなく沈黙が重たくて、私は腰を上げようとしたら再び押し留められる。一体なんなんだろう？ 意味が分からない。意味が分からなくて彼を見詰めれば、彼はちらりとテーブルの上を見てから私を見て告げる。

「貴女は食べたほうが良いんじゃないですか？ どこかのお偉いさんからの贈り物なのでしょう？」

「え、違いますよ。これは、私が……あ、もしかして、街で見かけましたか？」

やっと思い至って問い掛けた私に、彼は一瞬息を詰めてからゆっくりと静かに口を開いた。

「……ええ、見かけました。随分と親しげで楽しそうでしたね」

苦々しく睨みつけられて告げられると、心臓がきゅっと縮んだ気がする。

別に後ろめたいことは何もない、何もないけれど確かに見て面白い図ではなかっただろう。

「いえ、楽しいとかでは、その、私は困っていただけで」

「拒絶はしていないようでしたけど。拒絶しないということはそれなりにその状況を楽しんでいた。そういうことでしょうか？」

「ち、違います。楽しいなんて……」

楽しかったのは買い物だ。

彼が来てくれることがあらかじめわかっっていて、そのための準備を整える。そのことが楽しかっただけだ。

楽しかった。

喜んでくれると思ったから。

笑ってくれると、そう、信じていたから。

でも、実際彼はにこりもしない。にこりもしないどころか、眉間から皺が一向に取れる気配もない。

「それに俺が今日ここに来るのは前もって知らせていたはずです」

それまで待つてもと苛立たしげに続けられて私は自分の膝を見つめる。

このままは嫌だと思い、意を決して顔を上げ口を開く。なんとか分かって欲しくて……

「あの、だから、その……分かっていたので、貴方に何か用意して差し上げたかったんです……。それ、で、私は街に明るくないですし、貴方以外に頼める相手が居ませんでしたし。だから、その、」  
「なるほど、それで前の晩寝た相手におねだりしたわけですね」

う。

おねだりなんてそんな甘ったるい感じではなかったと思うのだけど、結果的には間違っていないから否定は出来ない。

## 第十九話

こんなことになるくらいなら、一人でここを出れば良かった。

誰かを頼ろうとするからろくなことにならない。

そうしていれば彼の機嫌を損ねることもなかったし、折角会えたのに、こんなに近いところに居るのに、こんなに遠い思いをしなくても済んだ。

私は駄目だな。

本当。

現実でも夢の中でも、本当駄目駄目だ。

「泣いています?」

大きな手が頬を撫で俯いてしまった私の顔を上げる。私は視界が揺らいでいたけれど、ふるふると首を振った。

「泣いて、ない、です。私が、貴方に嫌な思いをさせてしまったので、私が泣いたら駄目だと……そう、思います」

「神子姫なのだから、貴女は与えられるだけで良いんです」

自分から何かなんて考えるべきじゃない。そうはつきりと告げられ自分の浅はかさに胸が痛んだ。

与えられれば同じだけ、いや、それ以上で返したいとそんなこと思っただけなのは人並みのことが人並みに出来る人だけだ。

私は人並みのことも満足に出来ない。

ゆらゆらと視界が揺らいで彼の輪郭がわからない。でも怒気だけは伝わってくる。

どうしようもない、自分が悲しくて情けなくて。

そして、何より、彼に申し訳なくて……。

「そう、ですね。籠の鳥は外に出てはいけませんね……ごめんなさい」

しよぼしよぼと答える私に彼は「そうではなくて」と苦々しく続ける。

「……ここを出れば皆人に戻ります。本来の姿になるのです。ここで見せている姿が全てじゃない、貴女はここを訪れる者たちの本当を知らなさ過ぎる」

「ごめん、なさい」

彼は廊下で会った信者の彼女と同じことをいっている。

謝って欲しいわけではなくて彼は小声で呟くけれど、それ以外に私に出来るようなことはない。

そんな私でも頬を撫でられ引き寄せてもらえる。

でも、彼のむき出しの棘は私では取れないらしい。彼にとって私はもう癒しの神子ではないのかな。だから、彼の苛々を取り除いては上げられない。

私は本当に役に立たない。

そう思ったのと同時に抱き締められた腕に力が籠る。

痛いくらいのその力に私は抗うこともなくされるままになる。

「……………」

息を詰めれば、僅かに腕の力が緩くなり私は空気を求めるように顔を上げた。

「っん、……んあっ！」

大きく呼吸をする前に、口付けられあっという間に口内を乱暴に犯される。

かちんつかつんつと歯が当たってしまふことも全く気にすることなく、私に息をする暇すら与えない、キスだけで全て奪っていきそうなほど深い。

「んっ、んっ……っんう」

余りに苦しくて彼の背に回した腕に力を込める。

酸素を求めて喘げば、強く腰を引き寄せられ尚激しく口付けられる。

「……つまだ、駄目……ゆ、るさない……っせない……」

「は、あ……っあ」

ぎゅっつと閉じた瞳の奥がじわりと熱くなり、頭の中がぐらくらする。

っ……っ……うつと目尻から生理的な涙が流れると、急に腕の力が緩んで解放された。っつと引いた糸がぷつりと途切れると、私はぼすと彼の腕の中に落ちた。

肩で息をして、ときどきと胸が早鐘のように高鳴る。

同じように彼の呼吸も鼓動も速い。

けれど、彼はそれを一呼吸するくらいの間に直ぐに収めて私を引き離し、きゅっと唇を引き結んだあと、私の口元を手で拭いた。

「帰ります」

「え」

「乱暴にして、すみませんでした。俺全然人間出来ていないので今日は貴女を傷つけない自信はない。いや、きつと傷をつけてしまうから」

「いって、すつと立ち上がる。」

「え、行かないください。嫌です。傷つけても良いから居てください。私、会いたかったです、待っていたんです。だから、」

「情けなくも反射的に引き止めてしまう。」

「その懇願に彼はやつと少しだけ目元を緩めた。」

「俺も会いたかったですよ。貴女が好きです。とても……。だから、簡単に傷をつけても構わないなんていわないください。俺、本当に貴女に酷いことをしかねない……」

それでも良いといい掛けたのに、彼の瞳は私にそれ以上を語らせなくてはくれなくて、折り目正しく踵を返して出て行く彼をそれ以上引き止めることが出来なかった。

静かに閉まり切る扉を見詰めて、私はやっぱり泣いてしまう。でももうその涙を拭ってくれる人はいない。

「こんな現実と一緒に。」



ずきずきと痛んで悲鳴を上げる胸も、現実と変わりない。

どうして、この夢はこんなに現実的なのか、もつとずっと都合よく、甘く緩くならたらと続けば良いのに、どうして夢まで私を裏切ってしまうんだろう。

私はただ、心待ちな時間を持て余して、どうしても何かしたかっただけ。

……私は、悪くない。

悪い。

悪くない、悪い……わる、い、悪いに決まっている。

私が悪いんだ。私が……。

ソファの上で膝を抱え丸くなる。

結局私は夢でも現実でも、誰かを好きになれば突き放される運命にあるんだろう。

せめて夢の中でくらい、痛い思いをせずにしたかったのに……私が誰かなんて選んでしまったからいけないんだ。

ぬるま湯につかっているようにだらだらとした夢を楽しんでいれば、そうすれば、誰からも一時だけの愛を注がれ、悲しいなんて思うことなかったはずなのに……。

やっぱり、私なんか誰かの唯一になんてなれるはず、ない。

## 第二十話

\*\*\*

…… P P P …… P P P ……

目覚ましは正確だ。

正確に鳴り響き私を現実へと引き戻す。

普段ならもつと清々しい気分が目覚めるのに、今朝は憂鬱だった。バイトない日で良かったなと私は暫らくベッドに座ったまま膝を抱える。

「何やってんの？」

余りにも不審だったのだろう。彼に珍しく声を掛けられた。

「ぎゅってして」

「は？ なんで」

ハグをするのにそんなに理由が必要なのかな？

「怖い夢を見たの。凄く、凄く恐くて、悲しくて……寂しいから。私、一人ぼっちみたい」

ぎゅうぎゅうと膝を抱えた腕に力を込める。

はあと盛大な溜息が聞こえた。

私はそんなにヘンテコなことをいつてるかな？

確かに夢におびえるのは子どもくらいかもしれない。でも現実  
目の前でおびえている人が居るのだ。それが生涯を共にしようと決  
めた相手なのだから、そんな風に冷たく溜息を吐かなくてもと思う  
と顔も上げられなくなる。

もう、何年も彼にハグをしてもらった記憶はない。

抱きついても抱き返してもらった記憶はない。私の背中はずっとも  
スースーしている。

彼の手はいつも自身の身体の横から離れない。

私は今、私の勝手だけど落ち込んでいる。それをただそれだけの  
ことで癒せるなら、してくれても良いと思うのはそんなに私の我が  
儘なのかな？

「したかったらすれば良いだろ」

またそれだ。

「して欲しいっていつてるのに……」

「もう、お前のせいで寝れなくなっただから起きる」

結局私は自分を抱えたまま、ベッドのスプリングが軋むのを聞い  
た。

確かに、抱きついても拒絶はされない、キスしても重ねてくれ  
ることも心えてくれることもないけど、引き離されることはない。

それは満足値？

私、それで本当に愛されてる？

私の立位置は、いつから何に変わったんだろう。  
一人では抱きつくことは出来ても抱き合うことは出来ないのに。

……

いつも通り二人を送り出して、私はいつも通りの家事をこなし、  
いつも通りネガティブな感じでお茶の時間に一人入る。

何もかも上手くいかないな……。

夢だけは上手くいったのに……今、残されているのは仕事、だ  
け、か……。

それもいつ切られるか分からないもんな。

店長さん温和人だからあっさり切ったりしないだろうけど、そ  
れもなんだか申し訳ない。

……少しでも役に立つように、勉強でもしようかな。

あと、小夜子さんに昨日のお礼のメールして……ってそれはしな  
いほうが良いのかな？ まあ、良いか、するくらいは迷惑にならな  
いよね。

彼女の性格から察してスルーすることに罪悪感とか感じないであ  
っさり流してくれそうだし。うん。と一人頷いて、私はとりあえず  
ケータイを手にした。

ふと、彼女のことを思い出すと昨日聞いてしまった衝撃の離婚理  
由に頬を赤らめる。

『最初はあたしに問題があるのかなーと思ったんだけど、調べたら  
明日見に種がなくてね。待っても出来ないわよね。だから、もう一

緒に居る意味ないかなーって』

たかがバイトで入っている程度の知り合い度の私が、そんな個人情報　しかも普通に考えて他人に知られたくないようなことを耳に入れて良かったのだろうか。

私の記憶装置がデジタルだったら消去してしまっただけで、がつつり食い込んだ。これは絶対外れない。

でも子どもが得られないというだけで、別れなくてはいけない理由になるのだろうか？　そんなのなくても上手くやっている夫婦はどこにでもいるし、子どもがいても私たちみたいに空っぽの夫婦もいる。

他にもっと根深い理由があるのかもしれないーと思うと、なんとなくあの二人が気になった。

『もともとね、うちは何ていうかそういう契約みたいなのがあって、それで一緒に居ただけ。恋愛感情がお互いにあったわけじゃないから』

恋愛感情抜きで結婚した二人、か。

確か小夜子さんはそんな風にもいつていた。

うーんっと人様のことをとやかく悩んでも仕方ない。

私はちらりとカレンダーを見る。

明日は土曜日だ　バイトは週三日、火、木、土　この間お弁当を持っていったときは、こっそり食べようと思ったのに、ひよっこり戻ってきた店長さんに見付かって摘まれてしまった。

本当に前日の残り物を詰めただけだったから、凄く恥ずかしかつ

た。

「美味しそうですね」

有体のことをいうので、そんなにいうなら食べてみれば良いじゃないかと私は可愛くない考えに至り「どうぞ」と店長さんに箸を向けた。

一瞬「え」と店長さんが固まるから、やっぱり建前だけだったのだらうと思ったのだけど、ふと自分の行動のほうを振り返る。

私はついすっかり家族にするのと同じように、自分の使っていた箸を彼に向けていた。

「す、すみません。えっと、お箸取りますね」

「ああ、いえ、貴女が良いのなら良いんです、すみません」

と二人揃って微妙に頬を染めて、私の箸　男性が使うには短いを使って煮物を口に運ぶ店長さんを眺めた。

店長さんはお上品に頬張って、丁寧に食べてくれる。

彼はいつもがつがつ食べてしまうので、そんな風に味わわれると恥ずかしい。

恐る恐る「どう、ですか？」と聞けばにっこりと「美味しいです

よ」と返って来た。まあ、不味いとはいえないよね。

こっさり溜息。

「個人的にはもう少し甘いほうが好みです」

「え？」

「僕甘いものが好きなんですよ」

いわれてみれば家の煮物は甘さよりも辛さが強いと思う。  
彼がそういう好みだから合わせていたら、毎回そうなってしまっ  
ようになった。本来私は薄味が好きなのだけど……いつの間にか変  
わっていた気がする。

「じゃあ、卵焼きはお口に合うかもしれません。子どもに合わせる  
ので甘いです」

しまった。

「ご馳走様の意思表示だったかもしれないのに、つい申し訳ないこ  
とを口にしてしまった。」

そんな私の心配を他所に「え」と少し嬉しそうとも取れる驚き方  
をしてくれた。

「貰っても良いんですか？」

「……はい、味の保証はしませんけど……」

「あまり取ってしまうと、貴女の食べるものがなくなりますよ？」

……ああ、でも食べたいから半分だけ」

聞きながらも、結局自分で纏めた店長さんは出汁巻き卵を箸で上  
手に半分にして、ぱくりと食べてしまった。

気のせいでもすすんで口にしてきているようで嬉しい。

なんかドキドキする。

テストの採点を待っているときみたいな緊張感。

「本当ですね。美味しい。僕この味の方が好みです。っていうと、  
お子さんと同じなんですね？」

自分でいって少し恥ずかしそうにくすくすと笑う。  
でも、甘い卵焼きが好きなんてちょっと可愛いなと私は思うけど  
な。それに……美味しいなんて、いわれたのは物凄く久しぶりだ。  
お世辞でも嬉しいと思ってしまうくらいに、私はいわれ慣れていな  
い。

「っと、ここで長居をしてはいけないんですた」

ご馳走様と、私に丁寧に箸を返して、当初の用事だったのだろう、  
リビングのローテーブルにおいてあったパソコンを少し弄ってから  
から店長さんはお店に戻った。

「美味しい、か……」

そのあと続けた食事は、店長さんが味見してくれる前よりも美味  
しいような気がした。

明日は子どものお昼の準備もあるし、お弁当、もうちょっと可愛  
いものにしよう。私は一人額いて、買い物リストを作った。



## 第二十一話

……

買い物をして、のんびりと歩いていると突然車のクラクションの音がした。

邪魔になったかなと慌てて避けるけれど、ここは歩道だし……。  
ん？ と頭に疑問符を浮かべたところで、私の傍に止まった車の助手席の窓が下がる。

運転席から、身体を乗り出して手を振るのは小夜子さんだ。

大きなRV車で、その姿があまり見えないけどあの指先には覚えがある。丁寧に塗られたネイルがとても綺麗だった。

「荷物重そうね？ 乗っていく？」

「でも」

「歩いていける範囲ってことは近所でしょう？ 気にしなくて良いわ」

にこにこそういって、運転席から身体を伸ばすと彼女は助手席を開けた。ここまでされて断るのは逆に申し訳ない。私は、お邪魔しますとお断りして車に乗せてもらった。

綺麗に整えられた車内には、彼女がつけている香水の臭いが染み付いている。すっきりしているのどこか甘く優しい香り。彼女本人の私が持つイメージそのものだ。

「綺麗にしているんですね」

「そう？ 普通よ」

「そんなことないですよ。うちなんて直ぐにどろんこ。そのうち一々片付けるのが嫌になります」

思わず普段零さないような愚痴を零してしまったことに気がついて、慌てて謝れば、彼女はにこにここと笑って「嫌ならしなきゃ良いのよ」とあっさり断言する。

「え？」

「だから、嫌ならしなきゃ良いの。中途半端にするくらいならそれを繰り返すだけでしょう？ 面倒臭いからギリギリまで我慢して、気が向いたときに、ぱーっと片付ければ良いじゃない」

片手をハンドルから離して、楽しみにそういつてしまう彼女を、私は驚きと尊敬交じりの瞳で見詰めた。

私は自分に自信がないから、そんな風に生きることが出来ない。きっと同じようにその意見に賛同したとしても、きっとちまちまと片付けているだろう。だから余計に彼女に憧れに似た気持ちを抱いてしまう。

ぼんやりと流れていく車窓に目を向けて、バレない程度の小さな溜息。

そういえば、私、家の場所も告げていないのに車は走り出してしまっていた。

「時間大丈夫？」

慌てて住所を告げようとしたら先回りしたように、そう問い掛けられた。

今日買い物した中に、即冷蔵庫行きというような生ものはなかつ

たと思う。大丈夫かと聞かれたらもちろん大丈夫、ではあるのだけ  
ど。

「少しドライブしましょう」

答えあぐねている私の返事を待つことなく彼女はそう決定してし  
まった。

勝手に……確かにそうなのだけど、なんだか嫌な気持ちはしない。  
寧ろ潔い感じで素直に、それは良いと思ってしまうような雰囲気だ。

車内に流れているのは、少しだけ早いボサノバ調のクリスマスソ  
ングだった。流れ行く景色と心地良い音楽で、ふと気を抜くと考え  
るのはレイアスのことだ。

夢の中のことで、今頭を悩ませるのは間違っていると思う。  
そこまで引きずっては駄目だと、そう思っているのに、思ってい  
るだけだ。

私は彼を怒らせてしまった。

もうこのまま夢を見ないということは可能だろうか？  
見る見ないを選択出来た試はないから多分無理だろう。そう思う  
と余計に次は大丈夫かと冷や冷やする。

誰かを怒らせてしまうことはとても恐い。

直接誰かに悪意を向けられるのはとても恐い。

……それが信頼している人からなら尚更だ。

「なんかさ、」

不意に声を掛けられて、私はどこことなく眺めていた視線を彼女へと向けた。彼女はちらとだけ私を見て、口角を軽く引き上げる。

「すんごく、悩んでますオーラを出していたと思うんだけど、あたしにいつとく？」

「え」

「あたしは、紗々じゃないから、答えを出してあげることが出来ないけど、一人でそうやって悶々としているよりは、答えに近くなったりしない？」

……答えは出せない。

そう断言する人に相談しろというのも、ちょっと無謀な気がするけれど、何でも相談に乗るわっ！ と息巻いてくる人より気軽だし、私みたいな人間には気負いがなくて楽な気がした。

「私のことじゃ、ないんです」

「友達、とか？」

重ねてくれた質問に私は曖昧に頷いた。

夢の中の私は私であって私じゃない。少なくとも意識が私というだけで容姿など他のものは全て借り物といったところだ。だから間違えてはいない。

私は、ありがちな『友人の話』という体で割愛して話をした。

彼女は時折相槌を打ち、黙って聞いていたけれど、私の話が終わったかな？ というタイミングで、笑いを零した。

「……ぶ」

「え？」

「ぶ、ぶぶ……ごめん。ようするに嫉妬されているだけでしょ

う？ 放っておけば勝手に熱が冷めて、勝手に元に戻ると思うけど」

……嫉妬？

まさかと声を上げたくなるような単語だった。

それに相手が怒っていると分かっている放っておけだなんて……。

「でも、それで本当にもう会えなくなったらどうするんですか？」

「終わりよ。終わり。そんな小さなことで駄目になるくらいなら、早いうちに終わっておいたほうが良いと思うわ」

赤信号で止まったタイミングで、彼女はあっけらかんとそういつて煙草を一本抜き出すと、火を点けて銜えた。ほんの少し開けた窓の隙間から白い紫煙が外へを逃げていく。

「でも」

「無理に繋いでおいても駄目だと思うけど。そのお友達も辛いだけじゃない？ それにつられて紗々も辛いなら尚のこと終われば良いわ」

私はそれ以上是も非も答えることは出来なかった。そんな私に彼女は「そういえば」と話を続けてくれる。

「あたしと明日見は、そういう意味であっさりしてたと思うわ。元々、利害の一致があったから、一緒になったただだからなんだと思うけど」

「利害、ですか？」

思わず重ねると、彼女は「そうよ」と微笑んでから、深く煙草の

煙を吸い込んでゆつくりと吐き出した。

「前、この話までしたかしら？ あたしは、子どもが欲しかったし、明日見はお祖母ちゃんに自分は大丈夫だと、心配要らないと見せたかった。その相手がお祖母ちゃんも知っているなら尚安心だろうってことで、契約成立。概要はそんな感じよ？ だから、その一箇所が綻びればあっさりお仕舞い」

まあ、紙切れ一枚の話だけどね。と苦笑した彼女の横顔に戸惑いの色も後悔を感じさせる何かもなかった。

「あたしもそうだけど、あっちだって好きな人が居るんだと思う。だからお互いに嫉妬なんてものも無縁だったけど」

「え？」

「だから、あたしたちに恋愛感情的なものはやっぱりなくて……まあ、良いんだけど。あいつは今もそうなのかどうなのかということまで興味ないし、あたしもオトナなのでそこまであいつの事情に首は突っ込まないけど、なんとなーくね……」

そのあともなんとなく色々話してくれて、私は話しの内容はあまり聞けていなかったような気がするけど、彼女の声心地良くて少しだけ落ち着いた。

## 第二十二話

\*\*\*

今日の大半の私の思考を支配していたんだから、ここに戻ってくることは覚悟していた。

この、変に現実的な夢は私を離してはくれない。

そして、現実と同じように逃げることも出来ないのだろう。

夢で目覚めたら、また仲睦まじく過ごしている。

なんてご都合主義な展開にはなっていない。

その証拠に、私はソファの上で目を覚まし、机上には冷め切った紅茶と硬くなってしまったパウンドケーキが載っている。

「……………謝らなきゃ」

小夜子さんは放って置けば良いといったけど、私はそんなことをして許されるような人間じゃない。嫉妬だといいたく切っていたけれど、もしそうだとしても、そうさせてしまったのは私だ。私が一人で居さえすればこんな喧嘩しなくて済んだ。

悪いことをしたのはきつと私。

私が謝らなくちゃ。

それに、この時間にこちらで目を覚ましたのが良い証拠だ。この世界もきつときちんとした謝罪をと望んでいるんだと思う。

彼はどこに居るんだろう？

暫らく居るってこの神殿に？

それとも街まで降りているのだろうか？

でもきつとここは隔離された世界だから、外部のものをおいそれと泊めたりはしないだろう。恐らくレイアスは街だ。

私も行こう。

そう思い立って立ち上がったら、扉がノックされた。どきつと心臓が跳ねる。いつも通り私の返事を待つことなく静かに開く。顔を覗かせたのは信者の人だった。

「そろそろ、参拝の時間です」

「……………え」

そうか、今日は『お仕事』のある日なのか。

私は一分一秒でも早くここを出たかったけれど、ここに居る以上、私にしか出来ないことを疎かにすることは出来ない。

「神子様」

「はい、大丈夫です。用意して行きます」

考え込んでいた私に、不安そうな声が届く。大丈夫だと重ねて、そう伝えれば「お手伝いします」と入ってきた。

この間まで当然のように全て手伝わってもらうことになんの疑問も感じなかったし、なんとも思わなかったけれど、少し抵抗が出来てしまった。でもだからといって、断ることも出来ないだろうから私は素直に願う。



身体を清めて、着たままになっていたジプシー風の可愛らしい服から、ドレープのきいた、流れの美しい長衣へと着替える。

さらりとした肌触りが心地良くて私はとても気に入っている。いつもならこの内側から清らかになっていくような気がするこの襦袢に心が落ち着くんだけど、今の私の胸のうちは彼のことではいっぱいだっただ。

駄目だ。

私は今、癒しの神子として、ここまでの遠い道のりを歩んできてくれた人たちに会うのだから、上の空では失礼すぎる。

心落ち着けなくては……そう思い、蟠りを解くためにも気になっていることを聞いてみた。

「あの、ここには神殿の関係者の方しかいらっしやらないんですよね？」

「はい、神子様の方に訪れるもの以外は誰もおりません」

機械的に答えられて、やっぱりと得心する。

ということは、やはり私は街に降りないといけない。

そして私は、ぴつたりとくっ付いていた信者の人に先に行ってもらい下準備をしてから礼拝堂へと入った。

いつもと同じように厳かな空気の中参拝の儀は執り行われる。

このときは常にみんなの期待に応えなければと思って熱心に祈る。今日も例外なくそうするつもりで、気持ちも整えたはずだけど、やはり遠く離れた大きな扉を開いて彼が顔を出さないかと気もそぞろになってしまった。

「……………本日はこれで……………」

良かった。

それでもなんとか無事に役目を終えられて、胸を撫で下ろす。

……キイ……

私は自室に戻ることもなく、礼拝堂に行く前に誰も居なさそうな一室に置いておいた服にさくつと着替えて部屋の一番大きな窓を少しだけ開け、とんつと外に出た。

もちろん街に降りるため。

正面から出れば、みんなが心配するだろうし色んな手配に気を使ってくれるだろう。そんなの私の私用では申し訳ない。

適当な場所が一階で良かった。

二階とかだと流石の私でも飛び降りる勇氣はない。

そつと窓を閉めてこそそと外に出た。人の波はあつという間に引いてしまうのか、誰かに見付かるということとはなかった。

舗装されていない道を歩くという経験はあまりしたことがないから、こんなに歩きづらいつらいと思わなかった。

踵が擦れて早々に靴擦れが出来てしまう。

今は下り坂だからまだ良いけれど、帰りはこれを登るんだと思うとちょっと落ち込む。でも、そのくらいの苦勞で許してもらえらなら頑張ろう。

……街にいれば良いけど。ふと恐いことを考えてしまった。

勢いで出てきたは良いけど、良く考えたら怒ってそのまま国に帰

ってしまったかもしれない。だから今日もまだ姿を見せていなくて。

私は降りてきた道を振り返る。

もう既に神殿の先っぽも見えない。前を見ても街もまだ全然見えない。

「……………まあ、良いか」

とりあえず、行ってみよう。

こうなつては進むしかない、私は落ち込む気分を奮い立たせた。

……………

な、なんとか辿り着いた。

街の外門までくると、既に空は茜色になっていた。

急がないと……………いるとすれば宿だと思うから、私は通りすがりの人に近くの宿を聞いて回った。数がそんなに多いわけではなかったから、定宿は直ぐに見付かったけど……………

「もう、居ないから。待つても無駄だよ」

がっかりした。

ひざが笑ってしまうくらいがっかりだ。そんな私に、小母さんはここにこと人の良い笑顔を向けて「泊まっていくかい？」と告げられる。

「あのお方はここを定宿にして、熱心に神子姫様の下に通われてい

るみたいだし、あんた少しばかり神子姫様に似ている気がするから、邪険にはされないよ」

にこにこそういわてなんと返して良いか戸惑う。

「私は、その」

「アタシもお目にかかったのは一度きりだけどね、お綺麗な方だよ。なんというか人間離れしているというか、ああ、もう、アタシたちとは住む世界の違う姫君だね」

そんな大層なものではない。

「だからね、到底手の届かないお人だよと何度もいつているのに、聞きやしない。男つてのは馬鹿だね」

どこか呆れたように告げた小母さんに、曖昧に微笑む。男の人がどれだけ馬鹿なのか私には分からない。でも少なくとも彼は馬鹿じゃない。

その証拠に、その神子姫様とやらはこんなところまで足を伸ばした。

私は胸元で震える指先を包み込む手に力を込めて、改めて問い掛ける。

「あの、それでは、彼は神殿に向ったんでしょうか？」

「さあ、どうだろう。昨日から偉く不機嫌だね。聞くことも出来なかったよ」

その原因は私が作ってしまった。私はしょんぼりとして「そうですか」と答えるしか出来ない。

そんな私の様子をどう捉えたのかは分からないけれど、小母さん

はカウンターから、ずいっと身を乗り出して、にこにこ続けた。

「泊まって行きなよ。隣りの部屋を空けてあげるよ。あんた可愛らしいから、きつと気に入ってもらえるよ」

何をどう勧められているのか良く分からないけれど、それを考えている余裕はなくて、私は丁重にお断りして宿を出た。

大体、泊まるといってもお金を持っていない。

これからの帰りももちろん徒歩だ。

はあ、と広場の噴水で腰掛けて嘆息する。噴水は今日も楽しげに踊っている。それを見る私の心は踊らない。噴水も綺麗に見えない。

……はあ

早く戻らないと私は何も持って出ていない。明かりがなくなるとあの道は恐い気がする。そう思うのに、余りにもがっかりしすぎて直ぐには動けなかった。

こうやってずっと擦れ違っていくのかな。

よいしょと、立ち上がって本格的に日が暮れるまでに街を出た。

門番の人には「もう無理だよ」といわれたけれど、私にはあの神殿しか帰る場所はない。だから「慣れてるから大丈夫です」と笑って街を後にした。

慣れてない。

全然、全く持って慣れてない。

慣れているはずがない。

どうしよう。

歩いているうちに空が群青色になって、煌くはずの星が姿を消し始めた。雨、とか、降らないよね。ここは基本的に晴れで、私、この夢を見始めて天候の変化があったことはないのに。初の悪天候をこんな山道で味わうなんて……。

さっきから、靴擦れも益々痛むし、足は棒のようになってしまったし。

来るときと同じように後ろと前を交互に見る。

もう街の明かりも遠い。

どっちもどっちだ。

仕方がない、歩くか……私はずきずきと痛む足を堪えて歩く。あまり長い時間止まっては、足が笑って進めなくなってしまう。

この道の先には神殿しかないから、参拝時間以外は殆ど人が居ないのだろう。恐いくらい誰とも擦れ違わない。

## 第二十三話（前書き）

レイアス視点になります。ご注意ください

## 第二十三話

\*\*\*

「今夜は雨だな……」

誰にいつでもなくぽつりと零す。

今は晴れているがこのあたりの天気は急に変わるのが特徴的だ。

姫の部屋で昨日と同じように、窓辺でぼんやりと空を仰ぐ。

昨夜は宿に戻って猛省した。狭量にもほどがある。姫は世界にとつて唯一無二の存在で、特別。それをその辺の娘と同じように、我が物顔で扱うなど持ったの他だ。

許されて良い愚行ではない。

何より、姫はとても傷付いた顔をしていた。

させてしまった。

扉を開けたときあんなに嬉しそうな顔をしてくれたのに。

本当なら朝一にでも思ったが今日は参拝の日だ。

その証拠にここに来るまでかなりの人間と擦れ違った。礼拝堂の扉の前には列が出来ていた。あれだけの人間の心の平穩を願うなど普通の人間に出来るはずがない。

だが姫はそれを毎回真摯に行う。

一人一人に手を差し伸べ微笑みかけ、人々が癒されることを願う。



自分だってその一人であつたはずだ。多少金銭的に裕福で身分があるというだけの違い。それだけで……どう考えても己が調子に乗っていたということに他ならない。

行かないで欲しいという姫の願いをどうして聞き届けることが出来なかったのか……あんなにはつきりと思いを告げてくださつたというのに……。

姫は己の思いを外へ出すことをとても恐れている節があるのに、それなのに、その思いを口にしてくださつた。俺はそれに耳を塞いでしまった。……最低だ。

自嘲的な笑いが零れ、そのあと深い溜息を吐く。

早く顔を見てきちんと謝罪したい。姫のことだ、怒りよりも悲しみが深く、塞ぎこんでしまっていることだろう。それなのに、自分の事情とは関係なく、人々を思わなくてはならない。

神子姫はとても尊いお方だ。

兎に角、もう参拝の時間は終わりを告げる。  
そうすれば謝罪する機会も得られるだろう。

……コンコン

そう思ったとき丁度扉を叩く音が聞こえた。

自室に戻るのにノックをするのか？ 存外姫は意外性が強いから予想の斜め上くらいの行動を……などと思いつつ、開くのを待つ。

「神子姫様、今宜しいでしょうか？」

キィッと微かな蝶番の音がして扉が開く。  
入ってきたのは信者の一人だつた。

ここに寄るときにはほぼ必ず見る顔だから、姫様つきの信者なのだろう。中にいた自分に気がついて不思議そうな表情をして入室しその距離を縮める。

「姫はまだ戻っていない」

質問される前に答えれば「そんなはずは……」と声を零す。

そうはいつても自分はずっとここに居た。参拝の時間が終わるのを待っていたのだから間違いない。

「今日はお疲れのようでしたので、人数に制限を掛けておきました。少しは早く上がったと思ったのですが……散歩でもされているのでしょうか」

ぶつぶつと言葉を重ねる信者に眉を寄せる。その程度の認知度でどうする。そんな苛立ちを覚えると、ふと彼女は隣りにあったテーブルの上に置きっぱなしになっていた箱に気がついたらしい、ふわりと頬を上気させて「何をいただいたんですか？」とにこにこする。

何、といわれても……何だ？

「昨日、姫様が街で買っていらしたものだったと記憶しております。とても嬉しそうにしていらっしやっただので」

「俺のものじゃない」

ちらと見て眉をひそめぶっきらぼうにそう答えれば「まさかっ！」と必要以上の驚き方をする。

「そんなはずありません」

「俺は何も貰ってはいないし……それに、誰かから貢がれたものを

貰っても嬉しくない」

ここで愚痴るようなことでもないのに、つい零してしまった。姫のこととなると情けないことこの上ない。そんな俺に、彼女は必要以上に驚いて声を裏返した。

「ち、違いますっ!」

予想外の勢いに思わず押されてしまった。

「何が、だ」

「それは、姫様がお持ちになったお金でお買い上げになってくれたものだと思います」

少し乱暴に歩み寄ってきた彼女は「失礼します」といつておきながら、了承を得ることもなく箱に手を掛けた。流石にそれはよろしくないと思ったが止める隙もない。

「ほら、男性物ではありませんか。こんなものを姫様にお持ちになる方はいらっしやいませんか!」

「……………」

「姫様はそれはそれは楽しみにされていたのですよ。何かしたくて資金が欲しいからと、自らの手を汚されてまで私どもの手伝いをされて、そうして得たものでお買い上げになったんです」

「姫に何をさせたんだ」

思わずその台詞に声を凄ませてしまった。怖がらせるつもりはなかったが姫に今以上のことをさせるといふのは腑に落ちない。

「もちろん、金銭くらい直ぐに用立てさせるので必要ないとお断り

したのですが、それでは駄目だと申されて……その……少し庭弄りを手伝っていただきました」

庭弄り、だと……癒しの神子姫に、土いじりをさせたのか。

思わず怒気がこもったのが分かったのか、信者は自分から一步身を引いた。怯えさせるつもりはなかったが、姫に、そのようなこと

「姫様は一生懸命お手伝いしてくださいました。慣れなくて申し訳ないといいながら……それも、貴方様を思っただと思います」

真摯にそう告げられて、ぐっと言葉に詰まる。そんな自分に気が付くこともなく彼女は続ける。

「その夜も、とてもお疲れになったことと思いましたが、ゆっくりとした安息を取っていただこうと思いましたが……わたくしにお断りするような権限ございませんし、何より酷く狼狽されている様子でしたから」

あの男を通したのだな、と苦い思いが蘇る。

「姫様が眉を寄せられたら、命に代えてもお断りしようと思いましたが。しかし、姫様は、分かりましたと穏やかに承諾され、私に、気を使わせて申し訳ないと、ありがとうとってくださいましたのです」

胸に詰まっていたものを吐き出すようにそこまで話しきった彼女は、俯いてぐいっつと顔を腕で拭った。そして、ぽつりぽつりと零す。

「姫様はお変わりになれました。以前はとても気高くて尊い方で傍に歩み寄ることすらおこがましいと感じてしまうほどでした。けれど、今は、とても優しい方です。春に芽吹いた花のように明る

く美しい。お声を掛けていただけるだけで、笑いかけていただけるだけで身も心も癒されていくような気がします」

ああ、確かに姫の笑顔は癒される。身の内から満たされていくような気がする。

「わたくしは姫様を尊崇そんすうしておりました、今ももちろんそうです、今の姫様は大好きです」

きっぱり、そしてはつきりと胸を張ってそう告げることの出来る彼女は、今の自分には眩しくすら感じた。

「ああ、俺も好きだ……」

とても感慨深い気持ちで、息をするほど自然にその言葉は紡がれる。

……バタンツ！

息つく間もなく激しく扉が開かれた。

思わず今は持つても居ない剣に触れるように反射的に手が動いて心の中だけで苦笑する。

「シユリ様っ。神子姫様は何処いそですか！」

「……まだ、戻っておりませんが」

「傍の物置に使っております部屋の隅にこれがあった」

いいながら、膝から崩れ落ちた信者にシユリと呼ばれた彼女は駆け寄り手の内のものを取り上げる。

手の中のものが無くなると「ああ！ 姫様っ」と悲観的に泣き崩

れる信者を横目に自分もその傍に歩み寄った。

「姫様の着衣ですね……これは、メモ、でしょうか」

丁寧に置まれた着衣の上に、四つに折り畳まれて紙片が乗っかって  
いた。

シユリがそれを開いてしまう前に、すっと取り上げてぱらりと開く。

「……もし、これを見つけてしまった方へ。直ぐに戻ります。心配  
しないでください。と、あるが……一体どこへ」

メモを読み上げてシユリと顔を見合わせた。僅かな沈黙のあと…

…

「街かつ！」

「街です！」

声が被ってしまった。

慌てて窓の外へと視線を投げる。

もう日が沈んでしまっ。

……雨が降る。

## 第二十四話

\*\*\*

……サアアアア

最初はぼつぽつ、あとは小雨のような雨が降り続ける。

一休みしようと、道を少しだけ逸れて、小さな泉を見つけ、ほつとしたのも束の間の出来事だった。曇天に視界の確保も難しい。

ついてないな。

もう、雨を避けることも面倒臭くなって、泉の傍に蹲り時折指先でぴしゃりと水面を弾く。きつと、まだ明るい時間だったらこの水面も煌いて美しいことだろう。

けれど今は、どんよりとして暗い空を移しどろりとした表面は私よりも飲み込んでしまいそうで、ほんの少し不気味だ。

雨……止みそうにないな。

日も完全に暮れてしまったし。

神殿まであとどのくらいあるんだろう。

棒のようになってしまった足は、もう一步も動きたくないと思鳴を上げている。普段の運動不足がたたっているのかもしれない。目が覚めたら頑張つてウォーキングでも始めよう。

「ここで、眠ったら現実、かな」

そんなことをぼつりと呟いて膝を抱える。

そうだと良いのか悪いのか私でも分からない。

今日も一日レイアスに会えなかった。

あとどのくらいこのあたりに居てくれるんだろう。国に戻ったらまた暫らく会えないのに夢を見るのかな。

そういえば、宿屋の小母さん気になることいったな……あの様子じゃ、あそこを訪ねてくる女の子は私だけじゃないってことだよな。

そうだよな。

彼は綺麗だし、偉丈夫だし、普通なら放って置かれないうハズだ。

大体、私、彼のこと殆ど知らないし。好きなものを贈ってあげることすら出来ない。国に帰ったら本当に妻子ある身だったりして…

…はは、笑えない。

もう、私は彼の前で”神子”なんて演じるのは無理だから、そうになったら、きつと不倫とか？ そういうのだよね。

だったら、やっぱりもうこのままで良いのかな。

まあ、どうせ私は籠の鳥だし……そして、今はその籠にすら戻ることが出来ない情けない迷子だ。

そろそろ雨の当たらないくらいのところまでは、移動したほうが良いかな。

流石に身体が冷えてきた。

冷え切ってしまったら本当にもう一步も歩けなくなってしまう。信者の方たちがもう私が居ないことに気がついてしまっているだろう。



よろよると立ち上がった、もう痛くて履けなくなった靴を片手に大木の幹に背を預けると、再びずるずると座り込む。

駄目だよっぱり立てない。

もう、歩けないよ……。

髪の毛から伝って降りてくる雫は、水なのか涙なのか分からない。また私は丸くなって膝に額を擦り付ける。

身体中が痛いし、寒いし。

苦しい。

キリキリ、キシキシと変な音を立てそうだ。

……がさがさっ

茂みが揺れた。

びくりと肩を強張らせて、揺れたほうへと目を凝らす。

暗くてよく見えない。

どうしよう狼とか熊とかだったら。美味しく頂かれちゃうのかな？

いや、街道沿いなんだから熊はない？

いや、現実でもどこで出現してくるか分からなくなってるくらいだし、こんな世界じゃどこで何が出てきてもおかしくないよね。

びくびくしているともう一度、茂みはガサガサっつと揺れて

「ウオンッ！ ウオンウオンっ！……」

と聞こえた。

ワン……って犬、だよな？ 犬、なの？

低い声だけど、そう思った途端、視界に黒い塊が飛び込んできた。どんと大木に背中をぶつけたけど逃げようはない。

身構えて、きゅっと瞳を閉じると、肩にずんつと重さが係り、頬に生暖かい感触が襲った。

「え？」

じわじわと目を開ければ、大きな犬だ。千切れんばかりに尻尾を振り、鼻面を擦り付けてくる。

座っている私と殆ど同じ高さだ。大きくて重過ぎてその勢いのまま「ひぁっ」押し倒されそうになった。

「見つけたかつ！？」

それに続いてワンコの飼い主も出てきたようだ。

背が高く、黒い外套を羽織っているせいでとても大きく感じた。

反射的に恐怖を感じて、じりつと後ろに下がったけれど逃げ場もなければ逃げる力もない。立てないのだから仕方ない。

しっしという手の合図で犬は私から離れ、来た道へと戻ってしまった。居てくれれば良かったのにと後ろ髪を引かれてしまう。

ぴしゃりと水を弾き地面を踏みしめる音に、きゅっと身体を縮めて顔を伏せる。

「……姫」

ぱしゃんつと水が飛沫をあげる音と同時に大きな手が私の頬に触れた。

この手は、知っている。

私は驚きに瞬いて顔を上げると、地面に膝をついた彼は空いている方の手で外套のフードを後ろへ下ろした。

「レイア、ス……」

「やっと見つけました」

ほうと深い溜息とともに紡ぎ出される声。

私がずっと聞きたいと思っていた声だ。

今日ずっと会いたいと思っていた人だ。

その彼が今日の前に居る。

目の前に居るのだから、早くいいかかったことを、伝えたかったことを口にするべきだ。そんなことわかってはいるはずなのに、私の唇はふるふると小刻みに震えて音を出さない。

早く止まれば良いのにと思っ、唇を手で押さえればその指先もかじかんで震えていた。

……ふわっ

彼が着ていた外套を私に掛けてくれる。

ずぶ濡れになってしまっている私が着てしまうのは申し訳ないのに、その心地良い重さと暖かさに私は必要ないとはいえなかった。

「あまり良くはありませんが、これ以上濡れることはないでしょう。少しだけ着ていてください。直ぐにさっきの犬が街道に馬車を呼ぶと思うので……」

そこまで出ましよう。と手を伸ばされ私は手を取ったけれど、膝



## 第二十五話

私、こんなに道逸れたかな？ というくらい逸れていた。

暗くて足元が良く分からなかったし、途中から水の音を頼りに歩いたから……。これでは、例え足が健勝でも自力で街道に出てくることは難しかったかもしれない。

そう思うと、恐くなって身体が震えた。

「寒いですか？」

「い、いえ……平気です」

それが伝わったのかそつと声を掛けられて、私は小さく縮こまり首を振った。

あの、と声を上げかけたところで「神子姫様っ！」と悲鳴に近い声が耳に飛び込んできた。私は慌てて身じろいだけれど、彼にがちりと抱き締められていて身動き出来ない。

「ああ、見付かって良かったです。ご無理をさせて申し訳ありません」

深々と頭を下げてくれたのは、いつも近くに居る信者の女性だ。

勝手をしたのは私なのに、どうして彼女がこんなにも謝罪をしないではいけないのか分からない。また私の想像を超える騒動を起こしてしまっていたようだ。

私は申し訳なさに胸がきりきりと痛む。

「姫の御身は雨に濡れてしまつて冷え切っている。謝罪は神殿でも出来るだろう？ 早く馬車を」

と彼に促され、それは大変っ！ とばかりに彼女は傍に停車させてあつた馬車の扉を開く。雨の中だ、もちろん屋根のついたものだ。

「そちらの布と毛布をお使いください。私は直ぐに湯を用意させますので……」

彼が刹那片腕で私を抱き、そのまま馬車に乗り込めばそう口にして、ぱたんつと扉を閉めてしまう。ちよっ！ とお礼をいうタイミングも逃し、上げ掛けた声も喉から出る前に飲み込んでしまった。

「戻る場所は同じです。また、彼女は貴女の傍仕えをしている一人のようですから直ぐに会えますよ」

「戻るなら一緒に」

「馬車より馬のほうが速いですからね。大丈夫、彼女は慣れていきますよ」

そついいながら、そつと私を座らせたあと、ぽすつと私の頭からフードを下ろして外套を降ろすとひやりとした外気に晒され身体を強張らせる。そして、冷えて湿った肌に柔らかな布がふんわりと触れる。

気持ち良い。

軽く臉を落とせば、やわやわと濡れた髪を拭い水滴が滴り落ちて更に濡れてしまうのを留めた。

そして、腰を落ち着けるのを待っていたように、かたんつ、ことんつと微かな音を立てて馬車は静かに動き始めた。

「どうも彼女たち他数人は貴女の護衛のようです。身のこなしがとても軽い……兎に角、まずはご自分の心配をして下さい」

お願いですから、と重ねられて私はしょんぼりと俯いた。  
私が大人しくなれば「良い子です」と僅かな間、頭を撫でられる。  
子どもを疾うに卒業してしまった私からすれば、それは褒め言葉だ。  
慈しまれて、大切に思われているのが分かる。

「あ……」

続けて服に手を掛けられて反射的に声を零せば、微かな笑いを空気が伝える。

「濡れたままは良くありません。毛布もありますから、少しでも早く濡れたものは外したほうが良い」

では自分で、といい掛けたら「やらせてください」と宣言され頷かないわけにはいかなかった。

べったりと重く身体に張り付いていた衣服が、一枚ずつ降ろされると体温は下がるのかと思ったら、気恥ずかしさにじわじわと上がっていくような気がする。

「……っ」

最後の一枚を降ろされると、彼の手のひらが直接肌に触れ、どきりと心臓が高鳴った。

きゅっと瞳を閉じて身体を小さくすれば、肩から布を掛けられ髪から滴り落ちて、濡れてしまった肌を丁寧に拭かれる。

「反省しています」

「え？」

顔を上げたのと、ほぼ同時に、優しく毛布を掛けられてやんわり

と包まれた。続けて、こちらへ来てください、と腕を引かれ不安定な馬車の中、私は促されるまま彼の膝に腰を降ろし、ぎゅうっと抱き締められた。

とくとくとくと……と鼓動が早くなり、彼の胸に頬を寄せれば彼の心音も早く響く。

「反省、しています。すみません、俺が悪かった、俺が一時の感情で動いたりしなければ、貴女にあれほど傷付いた顔をさせなかつたのに、貴女にこんな無茶をさせなかつたのに……」

許してください、と重ねられ更に腕に力が込められる。  
力が強すぎて、声が出せない。

私はなんとか彼に回した腕に力を込めて、何度も首肯した。

私は怒っていない、許して欲しかったのは私で、謝らなければいけないのは私。

彼じゃないのに……そう思うと胸が苦しい。

彼の痛みがそのまま流れ込んでくるようで、心が悲鳴を上げる。

「……………姫」

腕の力が緩み、身体が軽くなると寂しく感じた。

そんな私の頬を大きな手のひらが包み、促されるように顔を上げると、もう夜の闇に翳って暗い色の瞳が私を真っ直ぐに覗き込んでくる。

「まだ、俺は貴女の特別でいられますか？ 貴女から触れてもらえ  
る唯一人の男でいられますか？」

「……………」



縋るように許しを請う彼の瞳が堪らなかった。  
堪らなくて、堪らなく苦しくて、私は息を呑み

「んうっ！」

毛布が落ちてしまうのも気にせず、伸び上がって彼の首に両腕を絡めると唇を奪った。

軽く歯を立て、乱暴に吸い付く。

意表を突かれて、驚いた彼の瞳が愉快に感じた。

だから、もつと思つたのに、それなのに、丁度同時に馬車が石を踏み、がたんつと大きく揺れてしまった。

がちりつと当たると歯列が彼の唇を傷つけ、甘いはずの口付けは血液特有の苦味を帯びる。

それに気がついて慌てて離れようとすれば、背に回された腕に力を込められ、角度を変えられてより深く口付けられる。

強引ではあっても荒々しいものではなく、深く強く貪られる。

「っ、は……っあ……」

「ん、んう、も……っと……」

喘ぐような吐息はどちらのものか分からない。

引き寄せる手に絡みつく彼の少しばかり長い髪が指の間をすり抜ける感覚までもが心地良い。先ほどまで寒気すらしていたのが嘘のように、身体が熱を帯びもつと強く深く相手を求める。

「レ、イアス……」

「……………はい……………」

「も、っと……………貴方が欲しいの……………」

欲しいと重ねて刹那離れただけの唇を再び重ねる。

彼は口元に微かに笑みを湛えて唇の端から微かな音を発する。

「淑女の、言葉とは思えませんね」

「淑女ではないといったはずですけど」

視線が絡む距離まで離れて、そう告げれば「そうでした」と愉快そうに微笑まれた。

その笑みにどきどきする。

触れる手のひらに、唇に、伝わる熱にどきどきする。

つと彼の頬を撫でると、その手のひらに擦り寄られて笑みが零れた。

「俺も、今堪らなく貴女が欲しいんですけど……………」

かたんと馬車が揺れ、静かに止まった。

「到着してしまつたみたいです」

いって膝に落ちていた毛布を引き上げられる。

また抱きかかえようとする彼に「もう歩けます」と口にしたのに「意地悪いわなないください」と抱き上げられてしまった。

そして、扉に手を掛けようとしたら、先に外から開いて、先に戻った彼女が驚いて私たちに道を空け、迎えてくれる。

## 第二十六話

「神子姫様、おみ足をどうかされたのですか」

「あ、えつと、」

「疲労困憊していて動かないんです。マッサージでもしてあげてください」

いいどもった私の変わりに彼があっさりと答える。

「それは大変です。湯殿の準備は整っております。お早くどうぞ」

仰々しくそう告げて彼女は私たちの先を歩いた。その後ろを少し送れて歩きながら彼がそつと耳元に唇を寄せて囁く。

「知っていますか？ この聖域では貴女の部屋以外で貴女に深く触れることは禁じられているんです」

「え？」

驚いて反射的に顔を上げれば、ふっと笑みを深められる。

「本当は俺も一緒に湯殿を借りたいところですが、」

ちらりと前を歩く彼女に視線を送って肩を竦める。

「彼女は敬虔過ぎる信者のようですから、下手を打ったら貴女に会うことも叶わなくなりそうです。大人しく部屋で待っていますから」

すりつとこめかみに唇を寄せて「続きをしましょう」「そう囁きちゅっと軽く口付けをする。

続きという単語にふわふわつと体温が上昇する。  
大胆極まりないことをいい始めたのは自分だけど、改めれば恥ずかしすぎる。

隠すことが出来ないほど赤くなった顔を彼の鎖骨辺りに摺り寄せ顔に伏せれば「駄目ですか？」と悪戯に問い掛けられる。

そんなわけのないのに、そう問い掛けてくるのは唯の意地悪だ。きゅつと毛布の合わせ目を握り締めた手に力を込めて益々俯けば

「耳まで真っ赤ですよ」

と告げて、つうと頭を支えてくれていた腕の先で外殻を撫でる。びくりと声を殺せばくすくすと笑いを重ねられてしまった。

湯殿 部屋に隣接したものは普通サイズだけど、こちらは泳ぐほど広い では、もう本当大丈夫ですからと悲鳴を上げたくなるほど、丁寧に温められマッサージをされた。

揉み返しが来そうだ。  
よろりと、立ち上がり靴を履くことを戸惑っていると、踵のないものと取り替えてもらった。え、と顔を見れば彼女だ。

「手当てはしましたけれど、痛みますよね」

と微笑んでくれる。

恥ずかしさと気遣ってもらえる嬉しさで頬が染まる。ありがとう、と小声で告げ、彼女の手を借りて足元も整えた。

「あの……」

私の手を無理のないように引いてくれる彼女に声を掛ければ猫の

ような瞳が「はい」という返事と共に細められる。

「名前を聞いても良いですか？」

そう聞いたただけだ。

それなのに、彼女は悲鳴のような短い声をあげ肩を跳ね上げた。

「めめ、滅相もございません。わたくしのようなものの名などあってないようなもの、そのようなもので神子姫様のお耳を汚すわけには参りません」

……彼女の中で私の位置はどこなんだろう？ それとも名前に特別な意味でもあるのだろうか？

その盛大な慌てっぷりに、私はふふつと笑いを零してしまった。それをどう取ったのかふわわつと顔を真っ赤にしてしまう。

冷静で感情の薄い雰囲気があった人だったんだけど、そんなことはないんだなと再確認。

「迷惑でなければ、教えて欲しいのです」

「迷惑だなどっ！」

沈着なイメージは吹っ飛んだ。一々反応が過剰だ。

「わ、わたくしの名前は……その……シュ、シュリと申します」

「シュリさんですか？」

「ひっ！ け、敬称など必要ありません。シュリと呼び捨ててください」

「……では、シュリ」

これで良いですか？ と問い直せば「はい」と声を裏返した。名

前を聞くだけで一苦労だ。私は、苦笑してから改めて気持ちを整理、彼女の名を呼ぶ。

「迷惑を掛けてすみませんでした。私、自分のことしか考えていなくて、貴女や他の方に沢山の迷惑と心配を掛けてしまって……本当に、ごめんなさい……それから……」

ありがとう、そう重ねれば、大きく見開かれたシユリの瞳からはらりと涙が零れた。

え、えええっ?!

私は彼女を泣かせてしまうほど酷いことをしてしまったのだろうか。

い、いや、そうだよね。

うん。

いきなり主　なのかな？　が居なくなったら彼女だって責任を問われるかもしれないし、何か咎めを受けるのかもしれない。

はっ！　あのと時のような拷問とか受けるようなことが合ったらどうしよう。また私のせいであんな風に人がぼろぼろになるのは勘弁して欲しい。

「も、」

「え？」

「勿体無いお言葉です」

いって深々と頭を下げられる。

なぜっ?!　びくびくと肩を強張らせれば彼女は再び私の手を取

ってゆっくりと歩き始めた。

「神子姫様には苦しいお役目が課せられてしまっていると、そのせいで、神子姫様は心を失くしお役目に忠実で己の平穩を省みない尊いお方だと思っております。本来、わたくしどものようなものであれば、逸れは敬い愛さなければならぬことだと思っております。しかしながら……時折こうしてわたくしどもを驚かせてくださる、今の神子姫様も私は好きです」

「あ、ありがとうございます……」

「当然です。ですが、その……出来ればご相談ください。わたくしのような下位の者では姫様の願いの全てを叶えて差し上げることは出来ないかもしれません……出来る限りの協力はさせていただきます。それを迷惑だなどとは思わないでください。神子姫様にお使えするのがわたくしの役目であり幸せです」

どうかよろしくお願いいたしますと、再び折り目正しく頭を下げられてしまったところで、私の部屋の前に到着した。

そんな風にいつてもらっても私は夢から覚めれば、唯の人だ。

唯の一般市民がそんな風に傳かれても対応に困る。

私はどうと答えることも出来ずに「ぜ、善処します」と答えるのがやっとだった。

……カチャ……

彼女に扉を開いてもらい、お礼をいいながら入室すれば、丁寧に扉を閉められる。

閉まってしまった扉を見詰めて、ほふっと一呼吸。

あんなに濃い人だとは思わなかった。  
私みたいな人間が他人から尊愛を受けるなんて思わなかった。

あまりのことに驚いてぼんやりと眺めていると背後から、にゅつと二本の腕が伸びてきて、ぎゅうつと抱き締められた。

「扉の向こうに名残惜しむものがありますか？」

「っ、ん……ない、です。ただ……ちよつと……」

ごによりと続ければ首筋にすり寄っていた顔が離れて、拘束していた腕の力が緩む。私はその手をそつと撫でて振り返ると、不思議そうに私の話の続きを待っている彼の髪に手を差し入れて軽い口付けを交わす。

「ちよつとだけ、私は本当に何も知らなかったんだなと思っていたところですよ」

「それは深窓の神子姫なのですから当然ですよ」

特に問題ないというように、そう答えた彼は「足はもう平気ですか？」と問いながらまた私を抱き上げてしまう。

急にバランスを崩されて慌ててしがみ付けば、実に愉快そうに笑う。

そういえば、彼は最初から良く笑う人だったなと思う。

表情一つ変えない私に、色々と話して聞かせてくれるのは彼だった。

他の人も沢山の話をしてくれるけれど、その殆どは愚痴だ。もちろんそれでぐつたりして来ているのだから当然の内容だといえるし、この世界のことを殆ど知らない私はそれを嫌だとも思わなかった。



ふつわりとベッドに下ろされて、ちょこんと座っていると彼は隣りに座ってサイドボードの上にいるの間にか置いてあった例の箱を手に取った。

「それはっ」

そんなものがあつてはまた彼の機嫌を損ねてしまうのではないかと思つて、慌てて手を伸ばしたけれど、何の妨害にもならずそのまま、ぽすりと彼の膝の上に落ちてしまった。

「俺に、でしょうか？」

「そ、そう、ですけど、でも……」

「貴女の心以外に貴女から賜るものがあるとは思いませんでした」

座りなおそうとすればそのまま押し留められ、私は彼に膝枕されてしまう。

「本当にすみません。俺、自分のことではいっぱいっぱいになつてしまつていて、貴女の気持ちを考える余裕がなかった。貴女のこと が堪らなく好きで傷つけてしまった」

すみませんと重ねて、箱から中身を取り出すと、既に中身を知つていたのか、すつと瞳を細めた。

「姫がつけてください」

そういわれて再度起き上がろうとすれば、やはり遮られてその手に腕輪を握らされた。そして、差し出された腕を前に少し考える。

「あの……利き手とは反対のほうが良くはないですか？」

「いいえ、利き手が良いです。利き手なら、いつも必ず気にしているでしょっ?」

きっぱりはつきりとそう告げられて、ふわりと頬が熱を持つ。

貴方が良いのならと、私は手にした腕輪の繋ぎ目に力を入れる。

トップの部分に止め具が仕込んであって、そこで微調整出来るものよっだ。

……カチ

手首に収まると室内の淡い光源に反射してキラリと煌いた。

綺麗だ。

気に入ってくれればと良いのだけど。

ちらりと彼の顔を仰ぎ見れば、満足げに微笑んでくれた。良かったとほっと胸をなでおろすのと同時に少しだけ申し訳ないような気もする。

## 第二十七話

「価値的なものは分からないから、その……」

「貴女から賜るものならどんなものでも、至宝ですよ」

「いい過ぎです……今度はもつと頑張ります……」

「い、いえ、貴女の頑張りは俺の予想を超えるのでほどほどで、お願いします」

困ったように笑ってそういわれると、確かに、結果が伴わないことばかりをしまっている。何もしないほうが良いのかもしれない。

「なっ、何で表情が翳ってしまうんですか？」

「役に立たないと思って」

口に出せば益々しょんぼりした気持ちになる。私の本質はどうしようもないくらい根暗だ。顔を逸らせば、急に彼は膝を上げた。

「ふわっ」

必然的に私の身体は持ち上げられ、彼の顔が近くなる。

そしてまた彼はとても愉快そうに「貴女の驚いた顔は本当に愛らしいですね」と笑ってぎゅっつと抱き締める。あうつと息を詰めれば腕の力は緩んだけれど、離す気はないらしい。

「俺は何の役に立っていますか？ 正直俺の方が役に立ってないと思いますけど？」

「え」

彼の役に立っているところ。

役に立つということとは違うかもしれないけれど、私は彼が居るから救われている。現実でも心の平穩を保っていられるし、辛くても逃げ出すことを望まずに済んでいる。

踏みとどまることが出来ている。

癒されている。

それ以上に何かなんていうなんて贅沢も良いところだ。

「私を愛しているといってもらえるだけで十分です」

嘘は吐いていない。

私にとって最重要事項でもある。

それなのに、彼はくつくつと肩を揺らし「欲がないですね」と続ける。

「俺は貴女の全てが欲しいです。けれどそうすることが叶わないことを十分に知っているから、今は貴女の心が俺から離れてしまわなければそれで良い、貴女の名を知り敬称もなく呼ぶことが出来る。俺だけが特別だと思っていられる……だから、いつてること、多分一緒です」

いいきって「ねえ、そんなことより」と額に唇を落とす。

「俺、本気で続きがしたいんですけど……まだ、お喋りのほうが良いですか？」

いつてることは獣だと思つのに擦り寄ってくる姿は愛らしさを感ずる。

顔を上げれば、可愛らしい口付けが、ちゅっと落とされた。じんわりと身体が熱を持つのはこのあとのことを思ってたと分かっている。分かっているけれど

「あ、あと、一つだけ」

赤くなる顔をそのままにそう口にすれば、瞳が続きを促した。

「私、勝手に宿までいったんです……」

「ええ、知ってますよ。おかみが神子様に似た可愛らしい女の子が来ていたのに、残念だったねえと、しみじみ零していましたから」

う。

「そ、それで、貴方はどこにいたんですか？」

「ここに居ました」

「は？」

「ここで参拝の儀が終わるのを待っていたんですよ。ずっと……よもや姫君が窓から逃亡するようなことがあるとは思わなかったので」

逃亡って……。

ていうか、居たのか、ここに……それなのに私……一度くらい部屋に戻っていればこんなことにならなかったということか。なんかもう空回り過ぎて溜息が零れる。

「溜息は幸せを逃がすのだと聞いたことがありますよ？ 俺、信じませんけど。それに」

俺なら何度でも幸せになれます。いつてにこり。

今、言葉おかしかったよね？ 俺ならって、私ならどうなるんだ

るう？ その是非を問う前に、優しく頬を取られてもう一度唇を重ねられた。

その唇を堪能するように、甘く柔らかく飲み、するりと腰で結ばれた紐を解かれる。着物を着るときのように下着の類はしていないから、直ぐに肌が彼の熱を感じてその暖かさに震えた。

頬に添えられていた手がするすると首筋を這い、襟足から入り込んで片肌を晒した。そのまま撫で降りてくる手のひらが、やんわりと胸に触れゆつくり丁寧に撫でる。

「ん、んうん……あ」

少しずつ全身が暖かくなり肌が上気してきた。

硬くなった節が胸の頂に触れるとぞくりと総毛立ち、つけたばかりの新しい腕輪が肌に触れるとそのひやりとした感触にも身体を震わせる。

「ねえ、姫……」

深い口付けの合間、熱い吐息と共に呼び掛けられその声の響きすら、官能を呼ぶ材料になる。

「姫が嫌だといってもやめないかも、知れないんですけど……良いですか？」

そんなことを問い掛けられては、ノーとは答えられない。

「……っん、あ。痛い、のは、嫌、です」

硬くなってしまった先端を指先で軽く抓られて、びくりと身体を強張らせるのと同様になって、出来れば、と付け加える声は掠れて

消えてしまった。

頬を食み、目尻に舌を這わせていた彼は、ふ、と口角を引き上げて、背を支えていた腕の先で、耳を殻をなぞり生理的に浮かんだ涙を吸い上げながら答える。

「では、どういづのが、お好みですか？」

「ふ、う、、んんっ」

重ねて問い掛けられても、するすると腰の辺りへと這い降りてきた手のひらが、身体中をくまなく撫で付けるようにねっとり這い、身体が痺れ、息が上がって言葉にならない。

「ん、う、なんですか？ 答えが聞こえないです」

「っ、、は、あ。あんっ」

焦らすようにお尻のあたりから太ももを、ゆっくりと撫でていた手がするりと足の付け根に触れると反射的に私は彼の首にしがみ付いて身体を強張らせた。

「痛くなければ、何、しても良いですか？」

ゆるゆると彼の中指が亀裂を撫で時折深く入ってくる度に息を詰めて強く彼にしがみ付きながら、掛けられる問い掛けにこくこくと必死で頷いた。

ちゃんと考えているかと問われれば何も考えていない。

でも、彼が私を傷つけたりしない自信はあった。

「足、もつと開いてください」

耳元に息を吹きかけるように語り掛けられ、無茶をいわれてふる

ふると私が首を振れば、仕方ないですね、と愉悦な笑いを零して、背中を撫でていた腕が私の身体を持ち上げ

「あ  
」

簡単に彼の身体を跨がせてしまう。

「これで逃げられませんね」

くちゅつと足の間から漏れてくる水音は厭らしく響き彼に掛けた腕に力が籠る。

人差し指と薬指で割り広げられて、中指が敏感な部分をねっとり  
と撫でそれにあわせるように首筋に舌が這う。全身が性感帯になっ  
てしまったように、ぴりぴりと粟立ちそれすら心地良く感じる。

苦しいくらいの胸の高鳴り。

じわりと汗ばむ肌。

熱を含んだ吐息。

その全てが愛を紡ぐ旋律の一部のようだ。

滴ってしまったのではないかと思うほど濡れているのが分かる場所へ、ずっ！　と長い指が押し込められる。

「っは、あ、ああん」

反射的に弓なりに添った背を宥めるように、空いた腕が私の背を優しく撫で、その甘い愛撫とは対照的に、中に入り込んだ指先は、ゆっくり早く擦り上げてくる。

何かを探すように、蠢く指先に目の前がチカチカする。





「出そう、ですか？ 大丈夫、そのままイっつてください」  
「嫌っ！ 、 、 いや、 いやぁ……っ」

最初に明言したとおり彼は嫌だと何度口にしても、腕に込める力を強くするばかりで、絶対に解放してはくれなかった。声を抑えることも忘れて喘ぎ、意識はそこにしか向わなくて、自分がどこを見ているのかも分からなくなる。分からなくなつて……

「……ひっ、んう、ああああっ！！」

もう、我慢出来なかった。

指で触られただけなのに、物凄く感じて漏らしてしまったのかと思っただけそんな匂いもしないし別のものらしい。

ぐったりと彼の肩にもたれ掛かり上がった呼吸を整える。

「どうして、そんなに驚いているんですか？ こんな風にいったのは初めて？」

彼が声を発するたびに首筋に熱い吐息が掛かる。  
力なくこくんと首肯するのが精一杯だった。

## 第二十八話

\*\*\*

「…………ん、ん…………」

翌朝、目が覚めたときもなんだか妙な浮遊感が残っていた。  
嫌なものではなく、もつとことう色のあるものだ。

結局、私の体力と意識の限界まで求められ、愛された。

というか、私欲求不満にもほどがある。

心地良い身体の名残とは別に気持ち的にながつくりする。でも、私はそんなに恋愛経験が豊富というわけではなく、自ずとそういう経験が豊富というわけでもない。

隣りをちらと見て、彼はもともと淡泊だから、結婚してからは強く求められるようなことはもちろんないし、子どもが出来てからは年単位でセックスレスだった。

だから、なんというか、あそこまでの経験はない。

自分が経験したこともないことをあんなにリアルに体感すること出来るのは、凄く奇妙だ。なんとなく恐いくらいの濡れ方だったから恐る恐る、布団の中に手を突っ込んでみるけど、眠るときと同じで別に濡れていたりはいらない。

…………当たり前、だよ、ね。

そう思って自嘲的な笑みを零すけれど、そのくらいのリアルさが

あの夢にはある。

……まあ、良いか。

根本的な部分は私では解決出来ない。

でも、それで少しでも自分の気持ち救われて安定するなら、逃げ場所としては実害ないわけだし。

うん。と頷いて、私はベッドを抜け出した。

子どもはまだ起きて来ないし、夫は仕事に出掛けた。

いつもと変わらない土曜日だ。

少しだけ違うといえば、私が普通どおりに起きてきてお弁当を作り、このあと外に出るということだ。

「ウインナーはタコさんとー、カニさんにして、っと……おにぎりはクマの肩抜きをしてっと……」

ぶつぶつ口にしながらかお弁当箱を飾り付けていく。もちろん、自分の分は普通に詰める。

「おはよー、お母さん。わあ！ 凄いつ」

「今食べたら駄目だよ。朝はパンを食べて、これはお昼ご飯」

「分かってる分かってるっ」

味のほうは良く分からないけれど、見た目だけは普通に見えると思う。よし。

私は一人で頷くと自分の分は袋に入れて子どもの分はダイニングテーブルの上に置いた。

出かける準備を整えて玄関口で「行ってくるねー」と叫べば、リビングに続く扉の向こうから元気な返事が返って来た。

「うんー、いつてらっしゃーい」

土曜日ということもあり、人通りはまだ少ない。私はいつもよりも少し良い気分でお店に向った。

……カランカラン

と今日も可愛らしいウエルカムベルに迎えられお店に入る。開店前の時間でも店長さんが私に来る日は開けておいてくれるから私は正面から入るのだけど……

「ああ、やっと来た！」

入るなり店長さんに掴まえられた。

文字通り、手首を取られて奥へと引つ張られる。おはようございまずと挨拶する隙もなく何事かと混乱しつつ着いて入った。

「何かありましたか？ 私何か、失敗して」

「え、あ、ああ、すみません。そうではなくて、えーっと珈琲飲みます？」

「いえ、用事があればそれを先に」

あの様子からのんびり珈琲を飲んでいる暇があるのだろうか？  
とこちらが心配になる。店長さんは、じっと私を見たあと「そう、ですよね」と笑った。

「あーっと、その、この間小夜ちゃんと一緒にだったみたいですから、何かあったんじゃないかって、気になっていたんです」

「何か？」

いわれて、小首を傾げると私は小夜子さんとの会話を思い出す。そして、直ぐに離婚理由が思い当たって、ふわわつと顔を熱くなる。と慌てて顔を反らした。

「い、いいいえ、な、何も」

「……和泉さん。いくら僕でも、その反応で何も聞いていないとは思えないんですけど……えーっときつと口にし辛いようなことを聞いたんですよ」

口にし辛いというか本人目の前にそんなこと口に出来ません。というか、なんで私本当にそんなこと聞いてしまったんだらう。益々赤くなつて小さくなる私に、店長さんは、うーんと唸る。

「僕のこと、ですよ？ 小夜ちゃんが『口止め』みたいなことは絶対いわないだらうし……貴女が口にするのを迷うのだから、普通ならいわないようなこと、小夜ちゃんがいつちやつたんですよ。全く、いつて良いことと悪いことをあまり考えないですからね、彼女」

店長さんさらつと酷いこといつてます。それなのに悪口には聞かえないのが不思議だけど。

「えーっと、その、り、離婚理由をその……す、すみませんっ！ 何気なく聞いたんです。だって、普通に仲良さそうに見えましたし、そのえーっとえと、本当にすみません。他所のお宅のことに口を挟むなんて、やつちやいけないことだと」

焦つてぺこぺこ頭を下げる私に、店長さんは、ふうと嘆息した。その様子に恐る恐る顔を上げると壁に背中を預けて、額に手を置

き前髪を掻き上げて長く息を吐ききっている。眼鏡のせいでも、その表情ははつきり分らないけれど、怒っているという風ではなさそうだから良かった。

「そう、そっちですか。そっちなら、別に良いです」

謝らないで、と重ねて、ふふつと苦笑する。

そっちってどっちなら駄目だったんだろう？ あんな個人情報余程親しい人でないと知ってはいけないことのような気がするんだけど……。

そっか、そっちかと口の中で重ねている店長さんをマジマジと見詰める。その視線に気がついた店長さんが、にこりと微笑んだ。

「くだらない話を聞かせてしまつてすみませんでした。どうせまた来るでしょうから小夜ちゃんには、ちゃんといっておきますね」

「あ、いえ、そんな……あ、あのっ」

赤くなつた顔はちつとも治まる様子はないけれど、そんなに気にしていないならとずうずうしくも重ねてしまう。小夜子さんにしても、店長さんにしても聞くことを容認してくれているような優しい雰囲気がある。

今だつて、重ねた私の続きを静かに待っていてくれる。私はそれについて甘えてしまう。

「お二人とも、とてもそれだけの理由で別れたり……という風に見えないんですけど、その……」

確かに恋愛感情はなかったと、彼女は断言していたけれど……お互いに嫌っているようにはとても見えない。ごにょごにょと口にする

れば、店長さんは「ああ」と笑った。

「それはそうですね。小夜ちゃんは僕なんかより女の子の方が好きですからね？」

「は？」

驚きすぎて、思わず鞆を、ぼとつと落とした。店長さんはその鞆を拾い上げてくれつつ、くすくすと楽しそうに笑う。

「鳩が豆鉄砲食らった顔というのは今の貴女のような顔ですかね？」

「へ？ あ、はい？」

はい、どうぞ。と鞆を手渡されて、反射的に受け取り曖昧な音を発した私に、店長さんは笑いを深める。

「いえ、なんでもありませんよ。だからそっちも心配していません。今、恋人が居るから大丈夫だろうとは思いますが、多分貴女は小夜ちゃんの好みだと思うので」

じつと私の顔を眺めつつそんなことをいわれても、えーっと、どう答えて良いのか分かりません。

「そう、でしょうか？」

「うん。そうですね。小さくて可愛い子が好きなので、きっと」

「え、えーっと……その、光栄です」

なんといいて良いか分からなくて、ごにょごにょとそう答えると、ぶつと噴出された。私今日は店長さんのツボを押しまくっているようだ。わわわわつと益々顔を上げられなくなる。



「嬉しいですか？ 両刀の人に好かれて……というかそういう人のことをどう思います？」

「え、あ、その、愛情深い方なのだなと」

「な、なるほど」

まだ笑われている。

何がそんなにツボなんだろう？ 不思議には思うけど、嫌悪する気持ちが湧かないところが妙な気分だ。ま、まあ良いか。

「私の周りには居ないタイプですけど、その、私なんかでもそう思ったださる方が居るのは嬉しいです。それに小夜子さんは女性の私が見ても素敵の人だと思います」

何より、私だって夢の中では両刀だといわれても仕方ないので、そんなに抵抗はない。

それに小夜子さんは、本当に嫌な感じのしないさっぱりした美人だ。恋人が男性だろうと、女性だろうと、きつと相手を幸せにしてくれるタイプの女性だろうと思う。

私は少なからずそういう人に憧れに似た淡い気持ちを抱く。  
私にはとても遠い存在だ。

一人で勝手に、うんつと頷いた私に店長さんは、ふ……と嬉しそうな笑みを湛えて「貴女みたいな人は稀ですよ」と口にして、でも……と続けた。

「貴女は受け入れるのがとても上手そうなので、大丈夫だとは思ってましたけど」

続けられた言葉に首を傾げる。褒められているのか貶されている

のか微妙だけど……。

「優しい人だといったつもりなんですけど……」

「えっ！」

褒められていたらしい。

私は慌てて「ありがとうございます」と頭を下げると、その頭を  
ぼすぼすと叩かれた。

「そういうのはなんか苦労しそうです。平気ですか？」

「え……っと」

顔を上げると店長さんと目は合ったものの、にこりと微笑んだ  
だけでそれ以上その話が掘り下げられることはなかった。

私、気苦勞的な何かが滲み出ているのだろうか？ 恥ずかしいな  
あ、もう。

外には出さないようにしているつもりなのに……。

……再度反省。

## 第二十九話

……

外で流れる穏やかな時間には幸福を感じることが出来た。

お店の中の時間はゆっくりと流れ、私は私で居られる。お母さんと呼びつけられることも、主人の顔色を窺うこともない。

ただの私だ。

一日の中でそうあれる日がここ暫らく、そう、結婚してからはなかったような気がする。

ずっと色々なことに縛られていた。

最初は結婚するかどうかで縛られて、したらしたで、今度は子どもが出来ないことに縛られた。

出来てしまえば極端に自由は制限されて、そこからなんとか、穏やかに過ごせる時間を見つけようとしたけれど、大抵は誰とも会わない日が続き、赤ちゃんの泣き声とテレビの音くらいが、私の耳に入ってくる全てで、帰って来る主人の世話をし、夜泣きの面倒を見て部屋の隅で蹲っていることも多々あった。

赤ちゃんの面倒は私が見なくては、助けて欲しい、気付いて欲しい、なんて思うことがとても情けないことに思えて自分で自分が許せなかった。私は子どもの面倒すら満足に見ることの出来ない駄目な親だところり泣いた。

……もうそのときから私は独りで、その状況を誰も知らない。

ぼんやりとカウンターの奥に腰掛けて、黙々と資料を眺めたあと、表の通りを眺めて人間観察とかしてみる。近所の人だろうけれど、知らない人ばかりだ。

私は本当に何も知らなかったんだな。

「ありがとうございます」

からんからんと出て行くお客さんに声を掛けたところで後ろから声が掛かる。

「そろそろ上がって大丈夫ですよー」

「あ、はい」

穏やかな時間はあっさりと終わりを告げる。

私は不器用で、毎日なんて仕事を入れてしまっただけは家のことが回らなくなる。だから、無理なのは分かっているけれど、もう少しここに居られたらと思わずには居られない。

小さな溜息を落として、私は飲みかけていた紅茶を流し込んだ。

「お先に失礼します」

帰り支度を整えて 店内にお客さんが居たため こそりと店

長さんに挨拶。

少しだけこちらに向いた店長さんはカウンターの下で小さく手を振って「お疲れ様でした」と微笑んだ。

裏から外に出れば、まだ明るい。

でも、今の季節直ぐに日が沈んでしまっただろう。

私は一度だけ深呼吸してから、帰り道を急いだ。  
帰ってからはいつも通り。

子どもの相手して、ご飯の準備をして、お風呂の準備、洗濯物を片付けて、食事、そしてその片付け、終われば、お風呂。

何も変わらない。

その全てが終われば十時半とか十一時だ。

それほど遅いとは思わないけれど、彼は寝室。朝が早いから夜も早い。

大変健康的ですこと。

嫌味のひとつくらい考えても撥は当たらないだろう。口にはしないんだから。

その割りに、彼は常にどこかが痛い疲れたと愚痴ている。それがまるで私との壁を作るためのようで、あまり心配する気にならない。

薬飲む？

病院行く？

マッサージしてあげようか？

といつても全部拒否だ。

私にはどうすることも出来ない。私の心配も最初から受け付けるつもりもないのに口にするということは、私を拒絶するためだと感じても仕方ないと思う。

「そっか、大変だね。大丈夫？ お疲れ様」

口にするけれど彼が聞いているか分からない。

今夜は帰ってからなんていつていただろう？ 思い出せない。それくらい当たり前のことになっていた。

私はダイニングテーブルに載せたノートパソコンにそつと触れて、少し考える。

少し考えて、電源を入れるのをやめて二階へと上がった。いつも通り子どもが寝ているのを確認してから寝室へと入る。

今日もテレビがついている。

彼は顔の半分以上掛け布団で覆ってしまっているけど、まだ起きているかな？

そつと掛け布団を下ろしたら、まどろんでいたただけらしく険しく眉間に皺を寄せ、片方の瞼だけ少し上がった。

何？ と問われるより先に、唇を重ねる。

ちゅつと軽く吸って柔らかく食む。相変わらず無抵抗だ。それだけで、泣きそうな気分になる。

それでも、私は身体を滑り込ませ彼の身体をそつと撫で、やつと視線の絡んだ彼に「しよう？」と強請った。丁寧に愛されることはないと分かっていたから、自分がより惨めでより切なくなるだけだということとは分かっていたけれど、またこのまま離れた関係が続くのは嫌だった。

それに、また気まぐれでも起こったときにあの激痛が伴うのは嫌だ。

前戯が足りなくて、挿入でのみ与えられる快楽は私にとって痛みしか生まない。性交痛がこういうものだとき痛感した。

少しでも和らげるためには、少しでも定期的に回数をこなさない  
と……。

その日もやはり彼が触れるのは、胸と下腹部だけ。

寝転がったまま身体を持ち上げてくれないから、私が乗っかるしかない。そして、僅かに与えられるだけの愛撫でも、なんとか痛みが和らぐようにと、感じるように努めた。

私は彼との関係の改善を求めている。

愛されたい。

夢の中では彼が居てくれるけれど、現実には私が触れて良いのは主人だけで、私に触れて良いのも主人だけだ。

そう、定められている。

彼がサボっているのは愛情表現だけだ。そんなものきつと離婚の理由になんてならないだろう。それに……

「……………」

もう、大丈夫かと思って、出来る限りゆっくりそっとしたけれど、軽く裂くような痛みは走る。きゅっと彼の首にしがみ付き、暫らく痛みを堪えてから続けた。

その動きにまどろっこしさを感じたのか、やっと身体を起こした彼は、後ろから私を抱えてさっさと済ませて終わらせる。

夢の中なら、昔なら……そのあと一緒に居てくれるけれど、あっさりとベッドをあとにして、階下に降りていった。

また、手を洗いにいったんだろう。

私は汚いから。

今日は確認するのが怖いから私は動けなかった。じんじんと疼く身体を丸めて、その痛みが遠のくのを身体を小さくして待ち、やっぱり駄目だと落ち込み、胸がぎりぎりとおつめで引っかかるように痛んで苦しくて静かに涙を零した。

やめれば良いのに。

そう、思うのに、私の居場所はここしかなくて、私は何一つ切り離すことは出来ない。やっぱり私は依存することしか出来ない。

私は……



## 第一話

現実世界の詰まらない私。

夢の世界の唯一無二の役目を負った私。

同じ私であるはずなのに私の価値は雲泥の差だ。

私は私……貴方は、貴方……

貴方は一体私のなんですか？

誰が殺した駒鳥を……それは私と雀がいました……

そう、自覚してもらえればもっと楽に気持ちが悪かったかもしれない。

二つの世界の境界線はとても曖昧で、私は今どちらが拠点なのか良く分からなくなってきた。

現実ではそんなに時間が経ってはいないのだけど、こちらでは少し時間が過ぎてしまっているようだ。あれから私は穏やかにこの神殿で過ごしている。

本当に、穏やかに。

レイアスとは毎日会えるわけじゃない。

いつも通り参拝の方の癒しも祈るし、夜訪れる人が居れば拒まない。だから、目に見えて何かが変わったわけではないけれど、なんとなくこの世界は色鮮やかになったような気がする。

「姫様」

今日は特に用がなかったから、のんびりと外庭の巨木の根元に腰

掛けて、四方にぐんつと伸びた枝で囀る小鳥を眺めていた。掛かった声に驚いて数羽逃げてしまつのを目で追いかけてから、顔を声の先へと向けた。

「お寛ぎのところ申し訳ありません、姫様」

恐縮した感じで歩み寄ってくるのは、私の身の回りの世話をしてくれているシユリという信者の女性だ。

凜々しく折り目正しい彼女が私を心から信頼し尊崇していることが伝わるから、私も信頼を置いているし、そうあるように努めている。

「気にしなくて良いですよ。寛いでいたというか、ぼーっとしてただけで暇ですから」

にこりとそう告げれば、彼女はほんのり頬を染めて「ありがとうございます」となぜか礼をいう。

「お客様がいらしているのでお通しました」

いつて立ち位置をずらせば、彼女から少し離れたところにどこか見覚えのある姿があった。

ここはそんなに多くの色で構成されているわけじゃない。

建造物の白。

庭を彩る緑　　花は白いものが多い

そして、見上げると真っ青な空。

そんな色が中心だから他のものが混じると直ぐに分かる。アジアンテイストを感じさせる細かの模様の施された服飾品はここでは異

色を放つ。

彼は他の国の人だ。

彼女が通すということは、不審人物ではないのは確かなので、私は腰を挙げる。彼女が一步下がったのを私の了承と得たのか、訪問してきた彼はそつと歩み寄って来てその顔がはっきりと見える位置で、仰々しく腰を折った。

それと同時にシュリが席を外してしまう。

同席しても問題ないのに、彼女は決して来客時に同席はしない。

彼の顔に見覚えはあるような気がするけれど、どこの誰とまでは分からない。目元の涼しげな優しい雰囲気の人だ。

「お久しぶりです、神子姫様」

知り合いだ。

知り合いらしいという確信は得たけれど……誰かは分からない。こんにちはと軽く挨拶を交わした私に彼は微笑む。

「部屋に戻ったほうが良いですか？」

私が問えば、彼は首を振って私にさつきと同じように座ることを勧めてくれる。私が促されるままそこに戻ると、彼はその前に膝を着いて、ずつと持っていた細長い籠を前に置いた。

「以前お約束をしていましたので、連れてまいりました」

いっと同じ時に何かが飛び出してきた。

私は思わず巨木に預けた背に力を込めたけれど、中から出てきた

のは

「……猫」

だ。薄灰色の短毛で、耳と尻尾の先が黒い美人さんだ。人懐っこいのか私の手に擦り寄ってきてくれて、思わず抱き上げた。

短く「にゃう」と鳴いて暴れることはない。ほわほわと顔が綻んでしまうのは小動物マジックだと思う。

「可愛い」

「喜んでいただけただようで良かったです」

こつちの世界で猫なんて初めて見た。

ふわふわでぬくぬく、思わず抱き締めたくなる存在は世界共通だ。

「神子姫様のお陰で私の病魔は去りました。もっと何かをすべきだと思うのですが、まずは貴女の顔が見たくて直ぐに戻りました」

「元気になって良かったです」

凄く申し訳ないが話半分になっている。

だって、膝に乗つけた猫ちゃんがぐりぐり私の鳩尾に額を擦り付けてきてくすぐりたい。たまりかねて抱き上げると、また愛らしく鳴いて、だらーんつと降りた尻尾の先がゆらゆらと揺れる。

猫にはつんとしたイメージがあったのだけれど、このなんともいえない人懐っこい遊んでーという体勢。どきどきふわふわしてしまう。

しかも、とても愛されているのだろう。

毛艶も本当に良くて、艶やかで皇か。その柔らかな肢体を撫で付けただけで蕩けそうだ。

「名前はなんというのですか？」

「ヨミ・ルシヤナです」

「それは、立派な名前を貰っているんですね」

ぎゅっと抱き締めて「ヨミちゃん」と呼べば意外なところから「はい」と返事が聞こえた。

あれ？ 首を傾げると、ヨミちゃんもその動きに合わせて首を傾げる。私は聞き間違いかと思ってもう一度重ねる。

「ヨミ」

「はい」

あれれ？ やっぱり返事をしたのは、彼だ。

私が恐る恐る顔を上げ彼を見ると、彼はにこりと微笑んだ。

「ヨミ・ルシヤナは私の名前です。立派な名前を貰いました」

にこにここと楽しみに告げる彼に私は、ひっ！ と息を呑んだ。

「すすす、すみませんっ。私てつきり、この猫ちゃんのお名前だと思っつて、その、ええと、」

ばあああつと身体中が熱くなり顔が真っ赤になったのが分かる。

……恥ずかしいっ。

私の慌てっぷりに驚いて、猫ちゃんは私から逃げ出すとご主人の下に戻ってしまった。ヨミさんは猫ちゃんを抱き上げながら微笑み、そして続ける。

「ええ、そうだろうなと思いました」

「お、思ったのに、どうして自分の名を名乗るんですか」

余りに楽しそうにされるので、思わず不服を口にしてしまったら尚樂しげにされてしまった。私は何一つ楽しくない。

「貴女に知って欲しかったので」  
「え」

真意を問いたかったのに、彼はさらりと交わし告げる。

「因みにこの猫の名前はカルラです」

優しく丁寧に猫を撫でる姿に私は落ち着きを取り戻し「忘れられなくなりました」と苦笑した。

## 第二話

……

「ということが先日ありました。猫、可愛いですよね」

あの日と変わらず私は木の根元に腰掛けて、今度は幹ではなく彼に体重を預けて上から落ちてくる木漏れ日を見詰めながら話をしていた。

彼はのんびりと私の髪を梳き、時折相槌を打ち話を聞いてくれている。

「猫がお好きなんですか？」

「犬も……ああ、鳥も好きですよ……」

丁度頭上の木の枝から、ぱさぱさっと飛び去った色鮮やかな美しい鳥を見送ってそう告げる。

ヨミさんはあの日、本当に猫を見せてくれるためだけに、遠路遙々きてくれたらしくて、私はとても恐縮した。

とても良い人だ。病などで失わなくて本当に良かった。

「鳥……鳥ですか？」

「動物は言葉で向き合わなくても懐いてくれるので好きです。見た目も愛らしいと思いますし」

カルラちゃんの柔らかかな撫で心地を思い出してほんわりとする。大人しい良い子だった。

ああ、もちろん。ちょっとくらいやんちゃでも可愛いと思うんだ

けど。

「どうかしましたか？」

暫らく考える素振りをしていたレイアスに不安を感じて、問い掛け見上げると「いえ……」と言葉を濁し、邪魔だからと外していたグローブをつけ始める。

その様子には私は慌てて身体を起こした。

「あ、あのっ。もうお帰りになるんですかっ?!」

「え？ あ、ああ。違いますよ」

思わず大きな声で聞いてしまった私に、彼は、目を丸くしたあと首肯して苦笑し「姫が追い返さない限り俺は帰りませんよ」といしながらも、よつと身軽に立ち上がってしまう。

私も続いて立ち上がるうとしたら、どうかそのままと留められた。

「小鳥は逃げてしまいかもしれませんが、今だけ許してくださいね？」

私から少し距離を取り、そういった彼に私は意味も分からずに頷いた。

そして、左腕を曲げ肩の高さに構えると、口笛を吹いた。

とても、とても高く清んだ音はどこまでも遠く、どこまでもはつきり届くように鋭く風を切っていく。

私が「何を？」と問うより早く、結果はやってきた。

ひょう……っつと、鋭い風が傍を切ったと思ったら、次の瞬間には、



レイアスの腕に一羽の大きな鳥が止まっていた。

「……………ワシですか？」

立ち上がり恐る恐る問い掛ければ、彼は腕に止まった大きな鳥に何かをあげて柔らかくその背を撫でた。

「ハヤブサです。俺の愛鳥ですよ。鳥です。鳥。真正面を避けてもらえれば、触って大丈夫ですよ？」

じわじわ歩み寄っていた私に、歩を進めて彼は少しだけそのハヤブサが止まる腕を下げた。

すつと姿勢良く凜とした姿は彼に良く似ている。

勧められるまま、その子の背を撫でると、ダークグレーの羽に陽光が泳ぎとても綺麗だ。何度か繰り返せば、じわりじわりと頭を垂れて瞳を細める。

「とても綺麗な子ですね……………ですが、レイアス……………」

「はい？」

「……………もしかして、張り合ってます？」

猫と鳥とでは全く別物だと思うけど、思わず緩む口元を押さえてそう問い掛ければ、彼は「まさか！」といいつつ私から視線を反らした。

存外子どもっぽいところのある人だ。

「一応仲の良い友人を紹介したままでです」

「ふふ、光栄です」

「本当ですよ？ 笑わないでくださいよ」

それでも笑いのこらえ切れない私に諦めたのか、ふうと嘆息して

「アルダ。休んでいたところ悪かったな」

と纏めて、腕を上げるとハヤブサ　アルダというのかな？

は音もなくぐんつと飛び上がり空を切っていった。

ほんの少し名残惜しい。

恒温動物の体温というのは実に心地良いと思う。それに動物はふわふわもこもこである確率が高い。

「もう少し撫でたかったです」

「じゃあ、俺を撫でてください」

にこりと迷いなくそういって私の腰をぐいと引くと額をこつんとぶつけて、鼻先にちゅつと口付けを落とす。

ふわりと暖かくなる胸のうちがくすぐりたい。

好きっていう気持ちはこういう温度の中にあるべきだと思う。

夢、覚めなければ良いのに、思って彼に回した腕に力を込める。

私はこの幸せで甘い夢をいつまで見続けていられるのだろう。夢の中でも辛いものは辛いんだけど、ここにはまだ救いがある。

そう、思っていた。

そう、思えるだけのものがここにはあった。

## 第三話

\*\*\*

けれど、無情にも朝は来る。  
ぼんやりと目を開ければ見慣れた天井だ。

「けふっ」

あれ？　なんだか喉がいがらっぽい。風邪かな？  
私は喉を擦りつつベッドから起きだした。

当然、彼は目を覚まさない。

私にはきつちり背を向けてくれている。腕が痺れるだろうから、  
腕枕をしろとも、抱き締めたまま寝るともいわないけれど、こちら  
くらい向いても良いと思う。

偶然？　というか、こっち向いていることがあるのを私は知らない。  
い。

熱を出しても私の毎日は変わらないから、出来れば元気に過ごし  
たい。

体調が悪くて家事をサボったからといって責めるような人は居な  
いけど、でも、やっぱりやらないという選択肢は存在しないような  
気がする。

……

みんなを送り出して、一通りのことを終わらせてソファに腰を降

るす。

「……うーん、微熱か」

念のため、検温したら三十七度二分だった。

このくらいなら寝てれば治るかな。今日はバイトがない日だし、少しだけ横になろうとソファに掛けてあったブランケットをひっぱってお腹に掛けて横になる。

今朝も夫との関係改善をするべく、スキんシップ率を上げようと努力した。

起きてきた彼に「おはよう」と抱きつき、出かける彼に「いつてらっしゃい」とキスをした。

当然振り払われたり、拒まれたりはしない。

返されないだけだ。

見返りを求めるから哀しくなる。

これが私の普通なんだ。

これで、良いんだよね、これで……これが、一生続くと思うとやっぱりうんざりする。

文句も主張も十分したと思う。

これ以上は私からは出来そうにない。

でもやめてしまったら、完全に私と彼は触れ合っことはなくなってしまう。きっと彼はそれをなんとも思わないだろうけれど、私は我慢ならない。

きゅつと瞼を閉じれば、つうと涙が目尻からこめかみへと流れていく。

……早く、生き終わりますように……

静かにお願いしてうとうととする。

…… R R R …… R R R …… R R ……

ちょっとだけ、そう思ったのに、ぐつと眠りこけてしまったようだ。

ローテーブルの上に置きっぱなしになっていた携帯が震えている。時計を見たら、おやつの時間、買い物にも行かなくちゃ、身体を起こして電話に出れば店長さんだった。

『今大丈夫ですか？』

携帯越しに聞こえてくる店長さんの声はどことなく嬉しそうだ。私までふんわりと嬉しい気持ちも分けてもらう。そして、大丈夫ですよと返して続きを待った。

『明日入荷予定だったものが、今日届いたんですけど見に来ませんか？ 僕もまだ開けていないのですが』

「明日って、確かハンギングランプが届くんでしたっけ？」

『そうです、そうです。オイルランプ型の可愛いやつですよ』

ハンギングランプは玄関とかダイニングテーブルの上とかに設置するタイプのランプだ。白熱球の明かりが室内を柔らかく包んでく

れる。

うちにも欲しいなーと思うのだけど、今回のも売値で四万円くらいするんだよね。私にとっては欲しいな、買っちゃえっ！ と即決出来る額じゃない。

「じゃあ、今から買い物に出ようと思っていたので、先に寄らせてもらっても良いですか？」

『どつぞどつぞ』

嬉しそうな店長さんの声は、やっぱりなんとなく沈んでいた気持ちも持ち上がる。

身体は熱いような気がするけど、さつきより断然動きやすい。ぐっすり寝落ちしたからきつと良くなったんだらうと、私は出かける準備を整えて、お店に向った。

「んー、折角ですからカウンターの上にディスプレイしましょうか？」

お店に到着すると、店長さんは例のノートに新しく買ったものの情報を書き加えてくれていた。

そして、一緒にダンボールを開封する。

宝箱を開けるようでこの瞬間がとても楽しい。

今回中に入っていたのは、予定していた、ハンギングランプと、クリスマスが近くなるからかキャンドルスタンドが幾つか、あとは外枠の彫が豊かなトレイだった。

仕事できているわけじゃないから、見ているだけで良いとってもらえたけれど、そういうわけには行かない。取り出した商品についていた梱包材をダンボールに突っ込んで、ぎゅっぎゅっ……と、

「わわっ」

「危ないっ!」

ぐしゃりと二人分の体重でダンボールを破壊してしまった。

ふわふわ、さああああ……と、流れ出た小さなボール状の梱包材に涙が出そうだ。

「大丈夫ですか？ 気をつけてくださいね。貴女を箱詰めにしては駄目ですよ」

「あ……ああ……」

ぺたんと床に座り込んだまま呆然としてしまった。

私、何やってるんだろう。

片手でぐつと頭を抱える。背の高いダンボールだったから、そのままずるっと入り込みそうになってしまった。店長さんが腕を引いてくれたけど、間に合わなくて店内の一部が梱包材だらけだ。

「吃驚して腰でも抜けましたか？」

ぱっぱつと私の髪に絡んでいたのだろう、小さな白い粒を払い落としてくれながら、私の手を引いてくれる。ぐいっつと強い力で引き上げられてよろりと立ち上がった。

そのまま、ぼうつとしてしまっている私のスカートに付いた粒まで叩き落としてくれながら、のんびりと店長さんが慰めてくれる。

「大丈夫ですよ。壊れたのはダンボールくらいです。因みにそれも僕が壊しました。掃除すれば元通りですから」

……和泉さん？ と心配そうに呼びかけられて、私はびくりと我に返った。

「す、すみませんっ。そうですね、掃除！ 掃除します。掃除……  
そう、じ……」

……あれ……？

いいながら方向転換すると、一瞬自分がどこを見ているのかわからなくなった。

くらりと視界が揺らいで、慌ててカウンターに手をつく。

「ちよ！ 大丈夫ですか？ 手も凄く熱かったですし、もしかして熱があるんじゃないですか？」

「大丈夫です。とりあえず、片付けないと」

「こらっ、大丈夫じゃない、大丈夫なわけないですよ。とりあえず、座ってください」

強引に傍にある椅子に座らされる。

おかしいな、大丈夫だと思ったのに、ぐるぐるする。座ったら益々身体が揺れているような感じに襲われて額を押さえて俯いた。



## 第四話

船にでも乗っているようだ。

酔いそうで気持ちが悪い。吐きそうとまではいわないけれど、なんとというか下に引つ張られる力が強くて身体を起こしておくのが酷く辛い。

はあ、と熱い息を吐いたところで、首筋に店長さんの手が触れてびくりと肩が跳ねた。短い謝罪のあと、静かに重なる。

「熱、かなり高そうですね」

「大丈夫です」

「すみません。調子が悪いのに呼び出してしまって……タクシー呼びますから、病院にいらしてください」

「いえ、本当に……」

顔を上げたら既に電話を掛けていた。

断る隙もない。

諦めてそのまま休ませて貰っている間に、店長さんは店内をさくさくと片付けていた。その途中でタクシーが来たのが見えると、なぜか責任を感じまくっている店長さんが支えてくれるけど

「大丈夫ですよ？ 一人で歩けます」

そういった私に「ですが……」と渋ったあと、僅かな間瞳を伏せて、顔を上げるとほんの少し困ったように眉を寄せたまま口角を引き上げ、そうですね。と手を離してもらった。

「ちゃんと病院行ってくださいね？」

「えっと、はい。あの、私もお店散らかしちゃってすみません……」  
重ねてくれた店長さんに私も頷いて、お詫びも添えた。通りに止まっているタクシーに乗り込んで、行き先を聞かれ逡巡する。

「……市民病院にお願いします」

帰宅してしまうのと迷ったのだけど、このまま帰って夜まで熱が下がらなかつたら、また主人に怒られてしまうだろう。

体裁が悪いとまたいわれてしまうかと思うと、病院に行っておこうという気になった。

タクシーを降りて、なんとか受付を済ませる。

待合室の固い椅子に腰を降ろすとひんやりとしていて、熱くなつた身体に心地良い。全身がかつかと燃えているようで、はたはたと鼓動が早く息が切れる。

店長さんには悪いことをしてしまったと反省。

タクシー代も、支払いは店に回すようにいわれていたらしくて受け取ってもらえなかった。

受付で借りた体温計の音で、取り出すと『三十九・一』私的には有り得ない数字を表示していた。熱が上がりが過ぎて、逆に平気に感じてしまっていたんだなと痛感。

はあと、溜息を落とし、続けて貰った問診に目を落とす。

「ごしごしと目を擦っても、涙で視界が霞んで良く見えない。困ったなどうしよう」と、目を近づけたり離したりしていると声が降ってきた

「代筆しましょうか？」  
「店長さん」

声のしたほうへと顔を上げると、店長さんだ。にこりと微笑んで私の隣りへと腰を降ろした。

大丈夫だという間もなく、すつと抜き取られて一問一答を繰り返す。

「数日前に雨に濡れてから少し……」

「雨、ですか？ 最近雨降ってませんよ？」

「え、あ！ ああ、そうでしたっけ……すみません。何か勘違いを……」

濡れたのは夢の中だった。

私は慌てて取り成したけど、大丈夫かな？ ちらりと店長さんの表情を盗み見たけど、特にそんな瑣末なこと気にしている風ではなかった。良かった。と、胸を撫で下ろし改めて答える。

「朝は喉に違和感があっただけで、熱も微熱だったんです」

「はいはい……それで、今何度だったんですか？」

私の返答をかりかりと書き込んでくれる。

そして、さっきの体温計が表示した数字を口にすると、長嘆息されてしまった。重ねて本当に申し訳ない。

「あ、っと、インフルエンザとかかも知れないので近くに居ないほうがいいが……」

ふと、思い出したようにそういえば、店長さんは「今更ですよ」「ふふつと笑いを零した。確かにそうかもしれないけど……移したと

あつては申し訳なさ過ぎる。

「どうか気にしないで……っと、これを渡してきたら良いんですね」

書き終わったのか、ボールペンと問診票を片手に持って腰を上げると、気遣わしげに私の頭を撫でてから受付へと運んでいってくれた。

私が自分でやらなくてはいけないことなのに、とても申し訳ない……でも、今は座っているだけでも辛い。早く横になりたい……ぐらりぐらりと頭を揺らし時折隣の店長さんにこつんつと当たってしまい、謝りながら私は診察の順番を待つ。

「膝でも、肩でも貸してさしあげたいところですが……」  
「平気、です。大丈夫」

そんなところ誰かに見られては申し訳ない。

もちろん、店長さんに……そして、主人に……。あの人は私を放置するくせに私が誰かとかかわることを極端に好まない、何かあればきつと直ぐにまた引き籠もり生活が始まる。

そんなのは、もう、嫌だ。

「あの、お店……」

「気にしないでください。どうせ流行ってませんから」

穏やかにそういつてくれるけど、半分嘘だ。

気にするなというのは優しい店長さんのことだから、本音だろう。でも、夕方からは仕事帰りにふらりと寄ってくださるお客さんも多いはずだし、流行っていないというわけじゃない。

こんなことになるなら、密かな楽しみに食いついたりしないで、お断りすれば良かったと後悔する。

検査室に呼ばれると案の定急な発熱のためインフルエンザの検査をされた。

鼻の粘膜を採取して……なんだけど、これがまた痛い。そのあと結果が出るまで、十五分くらい掛かってしまった。

続けて、朝から何も飲み食っていないことに気が付いて点滴まで受けて帰ることになった。

## 第五話

一応、検査結果が陰性だったからその旨を店長さんに伝えて、先に帰ってもらおうと思ったのに、暇だからと残ってくれた。

「そんなことよりも、ご主人に連絡したほうが良いですかね？」

「え……ああ、平気です。大したことないので、連絡して余計な心配を掛けてもいけませんから」

それに彼は心配しても私が期待するような心配の仕方はしてくれない。

病院に掛からせることが出来ればそれで十分だと考えるだろう。分かりきっていることだけど、そう思い至ると胸がきゅっと痛む。

期待、するから駄目なんだ。

それが普通。

そついい聞かせて、やっぱりこんな私に付き合わせるのは、店長さんに申し訳なくて、帰るようにおうと思ったら点滴を開始されてしまつて伝えることが出来なかった。

検査室の隅っこのベッドに横になつて、ぼちんぼちんと点滴が落ちているのを眺めていると、うとうとと眠くなつてくる。看護師さんの「寝ていて良いですよ」という言葉に甘えて瞼を落とした。

針を刺したほうの腕は掛け布団から出していたのだけど、誰かがその手の先を、一定のリズムで、優しくぽんぽんと叩き「大丈夫」「直ぐに良くなるから」と何度も声を掛けてもらった気がする。

……

「和泉さん、終わりましたよー」

看護師さんの声に起こされたときには、店長さんは私の足元の方に居て「帰りましょうか？」と微笑んでくれた。

手馴れた動きで点滴を回収してくれている様子を眺めながら、やっぱりあれは夢だったんだろうなと思う。誰だって、体調が悪いときは優しくして欲しいものだ。

兎角私は願望が夢に出やすい。

「優しい旦那さんですね」

と、看護師さんに声を掛けられて、慌てて否定しようとしたら「お世話になりました」とあっさり返してしまった。

「車でしたので送りますよ」

会計を済ませて待合室に戻るとそういつて促されるとどこまで甘えて良いのか分からなくて、申し訳なくなる。でも、この流れからそれを断ることは出来ないしさせては貰えないだろう。ここによこによとお礼を告げれば、やっぱり気にしないでと返ってくる。

店長さんの車は赤のクーパ。

なんかからしい感じでとてもよく似合う。乗り込むとフロントが外側に湾曲していて中は思ったより広かった。

「……それから、さつきはすみません。私と夫婦になんて間違われて……はつきり否定してくださいって良かったんですよ」

「え？ ああ、構いませんよ。否定して説明し直すのも面倒でしょ

う？ ああ受けておけば直ぐに解放されますし」

帰りの車の中で詫びればあっさりと返される。

そうだ。今更ながら再確認、店長さんは実に世渡りの上手い人なのだ。

「でも、店長さんの好きな人に申し訳ないです」

少しだけ椅子を斜めにして、まだ苦しい呼吸をゆっくりと繰り返して、そう告げれば刹那店長さんが息をつめたのが分かった。

あれ？ と思つてちらりと見れば、困つたように笑っていた。

「また、小夜ちゃんですか？」

「え……あ！ ご、ごめんなさい」

「いえ、大丈夫ですよ。まあ、確かに恋人は居ますけど、気にしないでください。きっと彼女も気にしませんから」

あっさりと肯定してそう告げられると、どういふわけかほんの少しだけ複雑な気分になる。

私と違つてとても心の広い人なんだなと思うと、自分の狭量さが恨めしい。

「店長さんと同じで、優しい人なんですな」

さらりと口にしたつもりだけど、どこか非難めいてしまった気がする。そんな私を咎めることもなく「そうですか？」と苦笑した。

「彼女は確かに優しいと思いますけど、僕はそうでもないですよ」

そうでもないんです。と重ねた意図が分からなくて、それ以上の



思考も回らなくて、私は「そうなんですか……」と上の空で納得し、流れる景色を見ながら目を閉じたり開いたり、ふわふわと不安定に繰り返した。

……

「家の中までお邪魔するのは余りに失礼だと思うので、ここまで、で……って、大丈夫ですか?!」

痛い。

玄関の鍵は開けた。

まだ子どもは帰って居なくて、ちょっとがっかり。扉を支えてくれている店長さんにお礼を重ねようと思って振り返ろうとしたら、玄関の段差で派手に転んだ。

「直ぐに休んだほうが良いですよ。寝室二階ですか？ 自力で上がれますか？」

「ああ、寝室にはいかないので大丈夫です」

「え？」

「そっちの和室で寝ますから……」

よいしょと、ショートブーツを脱ぎながらそういつと店長さんが黙ってしまったので重ねる。

「大丈夫、客間なのでお布団敷いてちゃんと横になれますから」

ついこの間まで私の寝室だったんだから、平気だ。

「そんな調子で布団の上げ下ろしが出来るんですか？ 余計なお世

話だとは思いますが、寝室で休んだほうが良くないですか？」

「いえ、その。ご心配ありがとうございます。えっと、風邪を主人に移してもいけないので、やっぱり別に寝ます」

唯でさえ、汚れ物の私が病原菌まで持っていたら同じ空気を吸わせるわけにもいかないだろう。

それでもし、もっと迷惑そうな顔をされたとしたら私は耐えられない。それなら最初から離れているほうが良い。

「では、僕が布団を敷きますから、貴女は着替えてきてください」

呆れたように溜息を零してそういった店長さんは、仕方ないと玄関に入ってきた。

お邪魔しますと、上がれば座ったままの私を、ひよいと立たせて「そのくらいは出来ますか？」と確認する。私はこくこくと頷いて脱衣所に着替えに行った。

## 第六話

着替えて戻れば、丁寧に布団を整え終わったところで、申し訳な  
さも一人だ。ひとりお

見送りをしてから布団に入ろうと思ったら、あっさり断られほぼ  
強制的に寝かされる。

「あれ、これ……」

「点滴を受けている間に病院の売店で買ってきました。あと、スポ  
ーツドリンクもあるので、喉が渴いたら飲んでください」

ぺたりと、冷却シートが額に乗つけられ問い掛ければ何でもない  
ことのように返される。慌てて、財布を、と身体を起こせば「気  
なるようなら、給料から引きますから今は休んで」と布団に戻され  
た。

ちゃんと天引きしてくれるなら、まあ、良いか。

すみませんと、ありがとを重ねて、ゆっくりと瞼を落としたと  
ころで

「やっぱりご主人に連絡したほうが良くないですかね？」

と声を掛けられた。

「一人では寂しいでしょう？ いつも遅いなら少しでも早く戻って  
くれるかもしれませんし……」

「平気です！ 平気！！」

勢いよく否定してしまった。

思わず身体を起こしてしまっただけでぐらりと傾く。駄目だ、天井がま

だ揺れる。ぼすりとそのまま元の位置におちて、今度はゆっくりと重ねた。

「もうすぐ、子どもも帰ってくると思いますから。連絡なんて必要ないです。余計な心配掛けたくないから」

「……そう、ですか？」

「私は慣れてるので、一人でも平気ですから。心配しないで……迷惑掛けてごめんなさい」

「いえ……あ、っと、その。仕事は体調が良くなるまでお休みして大丈夫ですから、無理しないでくださいね……その、今日は無理させてすみませんでした」

丁寧に謝罪して、店長さんは帰っていった。

誰の気配もなくなった家の中は、やっぱり寂しい。寂しくて、寂しくて、やっぱり、大丈夫なんかじゃなかった。

でも……人様にご迷惑をお掛けするわけには、いかない……大丈夫。大丈夫。

呪文のように重ねて眠った。

……

「お前の分も買って帰ったけど、食べれる？」

「……あとで良いよ。ありがとう」

「いちごと、プリンもあるから」

「うん」

彼の帰る頃に夕食が作れないことをメールしておいた。

コンビニか、どこかで夕飯の調達はしてくれたようで良かった。

帰ってから、そう掛けてくれた声をどこか遠くで聞いてからまた深い眠りに落ちる。

次に目が覚めたときには、家中が静かになっていた。そつと、和室から出るとどこもかも真つ暗だ。時計を見たら午後十一時。そんなに吃驚するほど遅くない。けど誰も起きていなかった。

寝汗をかなりかいてしまったので着替えを済ませ、喉が渴いたから台所へと向う。

ダイニングテーブルの上には、コンビニのお弁当が置いてあった。ハンバーグとか、食べられるわけない。どうせならレトルトで良いからおかゆでも買ってきてくれれば良いのに、と普段なら零さない愚痴が零れ溜息とともに吐き出される。

隣りには、こんもりとなっているナイロン袋。

二人が食べたあとだろう。

ゴミ袋に入れておいてくれてもバチは当たらないだろうに、そこまでは気が回らない。

今それらを片付ける気にはならなくて、すべては明日で良いやと放置して、当初の目的を遂げるため冷蔵庫を開けた。

彼の好みで年中作っている麦茶に手を掛けかけて、ふと止める。スポーツドリンクがてんこ盛りだ。店長さんに頂いた分もあるし、彼も買って帰ったのだろう。

実は私、珈琲、紅茶以外はあまり好んで飲まない。

炭酸飲料やジュースも苦手だし、もちろんスポーツドリンクもあって飲もうとは思わない。そのことを十年以上一緒に居る彼が知らないわけないだろうに彼は毎回買って帰る。

結局、自分で飲んでいるという結末が分からないのだろうか？

苦笑して、丁度目の高さにおいてあった苺のパックから、苺を一つ抜き出して手で簡単に拭ってぱくりと口にする。水の音で誰かが起きてきたら……と思ったのもあるけど、面倒臭かった。

「酸っぱい……」

季節的にどうなのか分からないけど、酸味が強い。

私はヘタを三角コーナーに放って、蓋の開いていたスポーツドリンクを引っ張り出した。ぱずりと冷蔵庫が絞まる音を聞きながらコップに注ぎ少しだけ喉に流し込む。

「甘い」

やっぱり好きにはなれない。

飲みづらいことこの上ない。とりあえず、病院で貰った薬を飲んで再び横になった。

気の使い方が全く持った的外れだけど、彼も一応気にしてくれているんだと、そう、思う。思いたい……私がここで寝ていることに疑問すら持つてはいないだろうけれど。

うつうつとしたら、真夜中に熱がまた上がってきたらしい。

息苦しく、熱くて寒くて、わけが分からなくて目が覚めた。意識は戻っているけれど、目を開けることは出来ない。

辛い、苦しい。

そう思って無意味に助けを呼ぼうとしても、この部屋には誰も居ない。

居ても二階だから私の声が届くはずもない。

はあはあと吐く息は熱い。

一度解熱剤を飲んだ時間からどのくらい経ったかと計算するために枕もとの時計を引つ張り込む。

「三時半……か……」

病院に居るときに解熱剤は飲んで帰ったんだから、六時間以上は優に経っている。

……薬、飲もう。

思っても台所までが遠い。身体を動かすことが酷く苦痛だ。自力じゃ無理……朝まで我慢すれば……下がるかもしれない。このまま、もう、寝てしまえ。そう思っ過ぎてぎゅっと瞼を落とすのに、殴られているような頭痛に完全に寝落ちすることは出来ない。

『大丈夫』

『直ぐに良くなるから』

ぶつぶつと口内で繰り返す。

私が今一人ではなかったら、薬も持ってきてもらえてもっと早く苦痛から解放されるのに。

私が、一人でなかったら……。

……はあはあ……

夜明けまでがこんなに長いものだとは思わなかった。



## 第七話

\*\*\*

「……………ま！……………め様！ 姫様っ！！」  
「……………ん？」

私は悲鳴のような声で目を覚ました。

視界に入るのは白。

家の和室は天井にもクロスを貼っているから、こんな風ではない。ということ、あんな状態でも私は眠ってしまったんだろう。

身体が重い。

熱い……………額だけはとても冷たい。

薄っすらと双眸を持ち上げると、シユリの心配そうな顔が目に入った。起き上がるうとすれば押し留められる。

「駄目です。神子姫様は今とても高い熱をお出しになっていらして、きちんと休まなくては」

こういうときだけは、夢と現実がリンクするんだなと、自嘲的な笑みが零れる。

あの時も余りに傷が痛くて苦しくて、私が壊れてしまいそうだったから、きつと夢とリンクした。今も、きつとそうだ。

ふふ、それでも、私の手を必死に握るのが、彼女だということに笑える。都合の良い夢なら確実に彼が居そうなものなのに……………。

「ありがとう、シユリ……………」

「いいえっ！ お礼など必要ありません。今、姫が目を覚ましたと医師に伝えてまいります。先ほども、流行り病の類ではないと診断してくださったので、一時的なものだと思いますから、安心してお休みください」

いって立ち上がるうとしたシユリの手を反射的に掴んでしまった。シユリは一瞬驚いたように目を見開いたけれど、直ぐにその手に手を重ねて「大丈夫ですよ」と微笑む。

「直ぐに戻ります。わたくしは貴女様のお傍を離れたりはしません。ご安心ください、直ぐです……」

やんわりとそう告げられて、自分が何て子ども染みたことをしているんだろつと恥ずかしくなった。恥ずかしくなつて「すみません」と侘び、手の力を緩めた。

彼女はその手をそつと優しく包んで、寝台の上へと戻してくれる。

いった通り、シユリは直ぐに戻ってきた。

先生と呼ばれた人が簡単に私を見てくれて、これで熱は下がりますよと薬を置いていった。

「大丈夫です。飲めなくはないと思います。その、苦いとは思いますが……」

夢の中で飲む薬というのはどうだろうと思ひ、きゅつと手に握らされた包みを見詰める。

それを薬が苦手だと判断したのか、そういつて励ましてくれるのだろう彼女に思わず笑みが零れた。

彼女は真摯に私を心配してくれている。

それに、どんな風に現実とリンクしていようと、この薬を飲んで

私の身体にどんな変化が起きようと、今更どうということはない。

そう行きついた私は「飲みますね」と微笑んで、さらさらっと口の中に白い粉末を流し込んだ。それにあわせて

「お水を」

と、銀のゴブレットを握らせてくれる。

ごくごく……と水を呷れば、喉がすうっと冷えて気持ち良い。

でも、確かに苦い。

そして、上顎にくっ付いて飲みづらい。

それでもなんとか飲み干して、ほうつと一息吐いた私はゴブレットを彼女に戻し、そつと寝台に身体を横たえた。まだずきずきと頭は痛むし辛くないといえは嘘だけど、直ぐ傍に私を心から心配してくれている存在を感じることが出来るとその辛さは全然違う。

「北の国には文を出しました」

「え！」

思わず驚きに身体を起こしそうになる。

そんな私を「いけません」と窘めて彼女は少しだけ不思議そうな顔をした。

「神子姫様に何かあれば必ず知らせるようにならなりましたし、それにわたくしもそのほうが良いと独断で決定しました。もしかして、何か拙いことでもありましたでしょうか？」

じっと見詰めてくる彼女の瞳が不安に揺れる。

「拙くは、ありませんが……その、たかが熱を出したくらいで心配を掛けてしまうのは申し訳ないと思うのです」

「そのようなことはございませぬよ。神子姫様はこの世界に唯一の方です。貴女様は癒しの神子姫様であり、人々を癒す代わりのようにご自身を癒すことは出来ない。そんな貴女様がお辛いときに辛いと吐き出して何が悪いのですか」

少しだけ咎めるような口調なのに、どこか優しい……。  
ぴとりと冷たい布を額に載せられて、瞼を落とす。

「私はそんなに偉いわけでは……」

「貴女様は神が遣わされたこの世界の奇跡です。偉いか偉くないかなどという陳腐な言葉では表すことは出来ませぬ。どうか今はご自分のことだけをご案じください」

わたくしはずっとお傍にいますから、安心して眠ってください。  
と締め括り、そっと手を握られる。指が長く大きな手に包まれて、  
ほっと胸を撫で下ろす。

静かに深く呼吸を繰り返すと、さっきよりずっと楽になったような気がした。

## 第八話

安心してしまい、ぐっすりと寝こけていたのだろう、目を開けたときには外は薄っすらと明るんでいた。ぼんやりと瞼を持ち上げて、ぱちぱちと瞬きを繰り返していると「おはようございます」と声が掛かる。

「……………シュリ」

「はい、神子姫様。お加減は如何ですか？」

転寝しているとかそういう可愛らしい雰囲気ではなく、私が眠ったときと同じ場所で、同じ様子でにっこりと微笑んで問い掛けられる。

「貴女、ずっとここに居てくれたの？ ……て、あ……………」

じりつと身体を動かすと彼女の手がついてきた……………というよりは、私がつかりと握っている。

これでは彼女が微塵も動いていなくても納得。私は今度は熱ではなくて、恥ずかしさに顔を赤くした。子どもじゃあるまいし、本当になんて情けないことを……………。

「すみませんでした」

「いいえ、わたくしは神子姫様の寝姿を拝見出来たので幸せでした」「え？」

「冗談です。けれど、本当にお気になさらないでください。それでお熱は如何でしょう？ どこかお辛いところはありますか」

私が空気を読めない人間だからだと思っただけで、どうにも人様

の冗談が良く分からない。つい本気で取ってしまったって時間が止まっていた。

「もう、平気だと思います。どこも辛くないです」

答えて起き上がろうとすれば、スムーズに手を貸してくれる。

「それはようございました。しかし、まだ油断は許されません。本日は一日ゆっくりとお休みください。わたくしは、少し雑務が残っておりますので、また少しだけ席を外しますが直ぐに戻りますので」「あの、今日は……」

「お休みください。貴女様が健勝でなくては皆も不安がりますよ。本日は遙拝にてお願いしておきますので、どうかご安心ください」

きびきびとそう口にした彼女は、ぴしりと形の整った礼をして、きゅっと踵を返し部屋を出て行った。私はその後姿を、ぼうと見送って、扉が閉まりきると同時にはたと我に返る。

ここでの唯一の用事がなくなってしまえば、私に他にすることはなくて、せめて彼女をこれ以上心配させないためにも、もう一度寝台に戻って眠るのが一番だろう。

そう思って、肘をついたところで、外から何か音がするのが聞こえた。

「……………」

何か分からない。風の音かもしれないし、気のせいかもしれない。でもどうにも気になるから、私は寝台から降りると降りると自分でちゃんと歩けるかどうか足元を確認してから、窓辺に寄った。

音はその外からだ。

あまり聞いたことないけれど、多分動物の声だと思う。私はその正体を確かめたくて、かたんつと窓を開いた。

「ひゃっ！」

それと同時に頬を風が切り、慌てて目を閉じる。

そして、何かの気配を感じて、私は恐る恐る目を開いて息を呑んだ。

傍にあったティーターブルの椅子の背に

「……アルダ？」

の姿があつたからだ。

私に一羽ずつ鳥を識別する能力はないけれど、目的を持ってこの部屋に入ってくるハヤブサなんてアルダくらいのものだと思う。

アルダはまるで私を呼ぶように、くいくいっと片方の足を上げて指を丸めたり伸ばしたり、手招くようにしている。

「どうしたの？」

私がいわりと近づけば、より高く足を上げてアピールしてくる。

その足には小さな筒がついていた。きっとこれを渡したいのだと思う。

「これを取れば良いのね？」

問えばキィキィと少し高い音で鳴いた。

私はそれに触れて、かちりと蓋になっっている部分を外すと、ぽこんと紙が出てきた。この子がアルダなら、飼い主はレイアスだから

ら彼からだろう。

くるくると紙の巻き皺を伸ばし最後から目を通す。やはりレイアスからになっていて安心して冒頭に戻った。

『最愛なるサシヤ』

から始まっていた。

彼が書いた。私のためにわざわざ筆を取ったということだけで胸が躍る。ついさっきまで寝込んでいたとは思えないくらい元気だと思っ。

……現金なくらいだ。

『体調が思わしくないと報を受けました。

直ぐにでも早馬にて駆けつけたいところですが、どうしても抜けることが出来ない俺を許してください。

アルダが先に貴女のもとへと駆けつけるのが憎らしいくらいです。都合をつけ次第直ぐに向かいます。

それまで、どうか今は貴女のことを一番に考えてご自愛ください。遼遠の地から貴女を想っ、『

「アルダ、少し待ってくださいね」

私は、ティーテーブルの上のバスケット　これまでも、そんなものがあつたのか分からないけれど、今はちよつとしたものが常備してある　をじつと見ていたアルダに一枚渡してそう告げると、アルダは首肯してカツカツバスケットを突いた。

なんだか可愛い。

そう思い、ふふつと笑みを零しつつ、急いで筆を取る。

私が元気になっていることと、無理に慌てる必要がないこと、何



より同じだけ、もしくはそれ以上に想っていることを書き綴った。アルダに持たせられるだけの小さな紙では、あまり多くは綴れないけど、この三点だけ押さえれば問題ないよねと納得してくるくると丸める。

「ごめんなさい。私、貴方が普段何をもらっているか分からないのよ？ だから、あまり数を食べないほうが良いと思います。また来たときには、一枚あげますから、今日は我慢ですよ」

じつと残りのビスケットを見ていたアルダの背を撫でながらそういうと、少しだけしよげたように首肯する。

言葉が分かるのかな？ とてもお利口さんだ。

そして、私の用事を理解したアルダは渡してくれたときと同じように、足を差し出してくれた。

簡単にアルダを腕や肩に乗せないほうが良いだろうと、窓をもう一度かたんと開くと、アルダは、ぐっと重心を下げてから、椅子の背を蹴って外へと飛び出した。

その姿は青い高い空に吸い込まれ直ぐに見えなくなってしまう。

無事にアルダが帰還することを願って私はもう一度眠りに着いた。

## 第九話

\*\*\*

「……………ん？」

障子戸から差し込んでくる明かりが、眩しくて目を覚ました。陽は高くなつてしまっているようだ。

ぼんやりと天井を見詰めてゆつくりと呼吸をする。

随分楽になつた。

喉のいがらっぽさもなくなつたし、きっと大丈夫だ。

時計を見たら、十時を過ぎていた。

かなり深く寝てしまっていたみたい。主人も子どもも出かけたぢやんと出かけたかな？ 出たよね。相変わらず家の中は静かだ。

布団の傍に置きっぱなしになっていた携帯を引き寄せて、一応確認する。

メールが二通来ていた。

一通は、主人だ。

『ゆつくり休めよ』

まあ、一人ですることありませんから、寝てますよー、だ……。もう一通は店長さんだった。

『おはようございます。』

このメールで目を覚ましたらすみません。

お加減は如何ですか？ 今日にはクリスマスオーナメントが届きました。

天使が三体。

早い回復を祈って、表にディスプレイしておきますね』

時間を見れば九時過ぎの着信になっている。

普段なら十分に起きている時間だし、目を覚ますこともなかったから大丈夫だ。

添付されていた画像は、文中に出てきた天使たちだった。

銀色のものが二体、赤銅色のが一体。

細やかな細工に、しっとりとした質感だ。

是非本物を見てみたい。

今から出て行っても大丈夫そうなくらい、身体は軽くなっていたけれど、きつと今日出て行ったら店長さんは気にするだろうから一日はお休みをもらうことにした。

彼には『ありがとう、大分楽になったよ』と返信し。

店長さんにも殆ど回復した旨を伝えた。

直ぐに彼から返信は来る。

開かなくても実は内容は分かっていた。

それでも一応開く『了解』の一言。余りに予想通りの返信で、笑いが零れる。

続けて鳴るから店長さんかと思ったたら小夜子さんだった。

『起きた？ 生きてる？ 電話して良い？』

今度は別の意味で笑いが零れた。

「流石小夜子さん極端だ。」

『良いですよ。待ってます』

ぴつと返信すれば、電話を畳に置く前に鳴りはじめた。

私はとりあえず「あーっあー」と声を出してから電話に出る。

「はい」

『調子どう？ 熱下がった？ タベ明日見の家に行ったら紗々のこと聞いて吃驚したわ』

矢継ぎ早に問い掛けられて、つい緊張感もなく笑ってしまふ。

そんな様子が伝わったのか「紗々？」と可愛らしく問い掛けられた。

「大丈夫です。昨夜は辛かったんですけど、もう平気。元気ですよ」

『そう？ それなら良いんだけど、家までお見舞いに行こうと思ったら、明日見に止められたのよ。あたしが行くと休めないだろうか』

酷い言い草だとぼやいた小夜子さんはやっぱり可愛らしい人だなと思う。

『えーっと、ねえ、それから』

ほっこり優しい気分になっていたのに、なんだか珍しくいい淀む彼女に不安になる。どうかしましたかと問い直せば、あー、とか、うー、とか。本当に珍しく煮え切らない。

「ええと、私何か……」

『あ！ ああ、違う違うっ！ 明日見から話したって聞いたから、大丈夫かなーと思って』

「……聞いたって？ ……あ、ああ」

両刀だという話だろうか？ そう行き当たって刹那息を詰めた。

『別に、後ろ暗いとか隠しているとか、そういうことはないんだけど、一般人がいきなり聞いたら驚くだろうなーと思って』

「なんだ」

でも、ほっとした。

『ん？』

「うっん。なんでもありません。私、気付かないうちに小夜子さんの気に触るようなことをしたかと思って、どきどきしちゃいました。

でも、そんなことなら、良かったって……」

『そ、そう？』

「はい」

本当に良かったと思った。

こちらにそのつもりがなくても、誰かを傷つけてしまうことは多々ある。人と接していればそれは同じ人間ではないのだから仕方のないことだけど、出来るだけ避けたいものだ。

ほっと胸を撫で下ろし息を吐けば、電話の向こうで小夜子さんも

同じように嘆息していた。

『明日見も気にしてないっていったけど、偏見っていうのかなあ？ やっぱりあるし、紗々とは、普通に仲良く出来て嬉しかったから……いや、もう、本当聞いたときには明日見を絞め殺そうかと思っただわ』

きっぱりといい放った彼女に私は乾いた笑いを零した。  
彼女がいうと冗談に聞こえない。店長さん無事で良かったです。

それに、私なんかと仲良く出来ただけで嬉しいなんて、いってもらえて私の方が嬉しい。

熱で寝込んで居たなんて嘘みたいなのに、気持ちが元気になった。

そして、大げさにも今度は快気祝いでもと誘って貰って電話を切った。

ふと液晶画面を見れば、メールが一件。開いてみれば店長さんだった。

『安心しました。』

今日はゆっくりり休んで、次は店をクリスマスのディスプレイに変えましょうね。

準備して待っています』

通常通りだと明後日になってしまつから、少し遅くなってしまうけど、それでも待つててくれるという気持ち嬉しかった。

お礼のメールを返信して、一息。

今年のうちもクリスマスツリーをだそうかな？

そう思って半日は休んでいたんだけど、子どもが帰るのを待つと一緒にクリスマスツリーの飾り付けをした。オーナメントの数が激減していたし、壊れてしまっているものも多かった。子どもが小さいときに遊び倒したせい。から、近日中に買い足さないと。と思うものばかりだったけど、電飾は生きていて綺麗だ。

彼は帰ってきてても、そのことに気付いているのか気が付いていないのか微妙だった。

それが分かるまでに子どもが報告。

得意気に自慢していた。その様子を眺めたあと夕食にした。

## 第十話

「……………なあ」

珍しく彼が私に声を掛けていているようだ。

ぱくぱくと食べていた子どもから視線を離して顔をあげれば目が合った。本当に私に話しかけているようだ。

「ん？」

私はのんびりとお味噌汁を口に運びながら、続きを促す。

「仕事辞めたらどうだ？」

「は？」

突然のことに驚きすぎて、かちやんと食器を鳴らしてしまった。

「無理に仕事に出ないと、家計が苦しいのか？」

「え、い、いや、苦しくないといえば嘘だけど、まあ、出来なくもないけど……………なんで？」

彼はとっくに食事は終了していた。

本当に早い。

味なんてきつと関係ない。

「なんでって、夕べ熱出したのだから、それが原因じゃないのか？」

「え、ち、違うっ。あれは雨に……………じゃなくて、」

「この前も倒れたばかりだし、ストレスが溜まるようなこと重ねなくとも」



最大のストレッチャーがよくいうわよつ。ぐっと飲み込んだ台詞が喉に詰まる。

「断りづらいなら、俺が電話するし」

……い、嫌だっ！

ぎゅっとテーブルの上で握った拳に力が籠る。

「ごちそうさまーと子どもが席を立ったのを見送り、リビングのテレビがついたのを確認してから軽く深呼吸。

「でも、慣れてきたところだし」

「お前の代わりくらい誰にでも出来るだろ？」

誰にでも……誰にでも、出来る。

確かに私じゃなくても出来ると思う。

私がやってることなんて、やっぱり店番程度のものだし、一人で何かしているわけじゃない。でも、誰にでも出来るなら私がやるのも良いじゃない。

良いよね？

だってまだ、やめて欲しいなんて店長さんからいわれてないし、明日はクリスマスの飾り付けだってするんだからっ。

私にだって出来ることはある。

あるはずだよ。

「家に、」

「ん？」

「家に一人で居るの嫌なの。もう、嫌なの」

ぼつぼつと口にする。

声に出すのが苦しくて、心臓がドコドコ五月蠅い。

彼はそんな私に気が付くこともなく、ああ、そう。と相槌を打つ。

「大丈夫ならそれで良いけど、無理してるならと思っただけ」  
「……無理、してないから」

会話はそれで終わって、彼は席を立った。

私はその後姿を見送って、きゅっと唇を噛み締める。

全然、届かない。

伝わらない。伝える隙もない……

主人は、どうして私在家で一人が嫌なのか、気にならないのかな？  
気に、ならないのだろう。

きつと興味ない。

私に、興味がないのだから仕方ない。

結婚し、主人は私の生活に責任を持たねばと思ってくれているの  
だろうと思う。だから、彼はあれでも私を守っているつもりなのだ  
ろう。

籠の鳥は籠にさえ入っていれば安全。

安心。

餌だけ定期的に与えていれば死にはしない。

子どもだって与えだし、結婚した責任は果たしている。  
そう、思っているのだろう。

そうして、変な形で守られて私は心が死んだ。死んだ心が助けを求めて、寂しくて苦しくて辛くて……偽りでも良いからと愛を求めて、あんな夢の世界を作ったのかもしれない。

でも、本当はちゃんと、こうして地に足の付く場所で私は生きて  
い。

愛されたい。

そして、それが許されるのは私が選んだパートナーである夫だけ  
だ。

恋愛時代とまでは行かなくても良い。それでも、肉親としてでは  
なく、一人の女性として愛して欲しいのに……。

ただ私は無為に時間を重ねるだけ。

それなら早く生き終れば良い。

早く、早く。

家に居るとその想いばかりが募る。

早く明日になれ。

そして、早く……

……

結局夕べは、泣きそうなほど現実的な夢を見た。

起きたとき夢なのか現実なのか分からないくらい、現実的で……

「私、何度もいつてるじゃない。寂しいって、あの子はこれからほとんど手が放れていくし、貴方には愛されている気がしないし、家で一人で居たら、一日誰とも口を利くことなく過ごすんだよ。帰ってきても貴方は相手にしてくれないし、寂しくて、寂しくて、頭がおかしくなりそうだよ。昨日のは唯の風邪だと思っけど、倒れたのは貴方のせい。仕事のせいにしないで……私を助けて」

私の叫びだけが頭にこびりついている。

こんな言葉を投げつけられてしまった主人は、どんな顔をしていただろう。

それすら分からない。

彼の心が見えないのと同じように、その表情すら読み取ることが出来なくなっていた。

私たちにはもう互いを慈しむという気持ちの共有は出来ないのかもしれない。

ぼんやりとそんなことを考えながら、お店に向った。

丸二日家から出なかつただけだけど、街路樹に電飾が施されていた。これからは足早に帰る道をのんびり帰ることになりそうだ。

「あ」

丁度お店の前に到着する、外から見える窓にメールが届いていた天使が仲良く並んでいた。

思っていたものより大きくてちょっと吃驚。

中央の天使が吹いているラッパの音が聞こえてきそうで、なんだ

か微笑ましい気持ちになった。

……リンリン……。

「あれ？」

いつもは木製のからころという音に迎えられるのに、と、顔をあげたらウエルカムベルも真鍮製のものに変わっていて透明な音が響いた。

ベルの先には天使が付いている。

軸にはクリスマスリースがあらわれていてどことなく愛らしい造りになっている。

おはようございます。と声を掛けたけれど、店長さんの姿はなくてまだ奥に居るんだろうけど、ドアが開きっぱなしはちょっと無用心だ。

人を疑うなんてしなさそうな、店長さんらしいといえばらしいけど……。

そのまま店の奥に入れば、お店と店長さんの自宅を繋ぐ通路に荷物が増えてんこ盛りになっていた。

きつとクリスマス用のオーナメントだと思う。

今日はこれを、合間合間に並べて行かないといけないんだよね。

楽しみ。

自然と顔が綻んだ。

販売用のもので気に入ったら家にも買って帰ろう。あるものだけではやっぱり物足りない。

## 第十一話

店長さんの姿を探して、お家にお邪魔したらリビングでパソコンを弄っているようだった。

集中しているのか、全然気が付いてくれそうもなくて、ほんの少し悪戯心の浮かんだ私は、そーっと足音を忍ばせて歩み寄った。

……ぼんっ

「店長さん」

「ひっ！」

がたんっ！ ゴンっ！！ かしゃんっ！！！！

「い、っー……」

「……あ」

想定外の展開に私の頭が付いていかなかった。

予想では、うわあ！ 吃驚した。程度の反応をいただければ思っただのに……。

一瞬にして事件現場になってしまった。

「え、あ……い、和泉さん、おお、おはようございます」

「……はい、おはよう……」じぞい、ます」

ローテーブルで打ち付けた膝を抱えたまま、こちらを仰ぎ見た店長さんに掛けられた声に、なんとか応える。

「あ、の……す、すみません。その、え、と、ちょっと、その、ま

さか、ええと、膝、大丈夫ですか？」

「は、はい、平気ですよ、うん」

「カップ、大丈夫ですか？」

何から片付けて良いか分からなくて、とりあえずノートパソコンの傍に転がったマグカップに視線を走らせた。

中身は空だったらしくて、水分的な惨事は起こっていない。

ことりと転がったカップを起こしながら、店長さんは苦笑して「平気です」と重ね、片手でパソコンをぱちんと閉じた。

壊れていなければ良いのだけど……。

今、それを詮索しても良く分からないから、あとで聞くとして、私では良く分からない、本や紙まで散乱したので、それを拾い集めようと膝を折ると「大丈夫ですよ」と慌てて店長さんがかき集めてしまう。ちらと見えたものは画集みたいだった。

「すみません、お仕事だったんですね……」

その慌てようにしょんぼりと肩を落とす。

変なことを考えずに、普通に声を掛ければ良かった。

人間急が変わったことをしようとするところくなことがないと痛感する。

「構いませんよ。こちらこそ気が付かなくてすみません。声掛けてくださっただんでしょっ？」

「あ、えーっと、その」

「じよじよと口籠れば店長さんは「ん？」と可愛らしく首を傾

げながら、傾いてしまっていた眼鏡を当てなおす。

「普通に表から入ってきて、その、お邪魔するときには声は掛けたいんですけど……こちらで見つけたときは、その、意図的に直前まで声を掛けませんでした。ごめんなさい」

「それは、またどうして？」

不思議そうにしつつ重ねられる問い掛けに、自分がなんて子どもっぽいことをしてしまっていたのかと思うと、身が縮む思いだった。

「その、店長さんを……」

「僕を？」

「……驚かそうと思って……」

「ああ、おどろか……って、貴女がですか？」

しょぼしょぼと口にした私に、店長さんは目を丸くして、大げさなほど瞬いた。

そこまで驚かれると益々申し訳なくなつて、すみませんと重ねるばかりだ。何も壊れてなければ本当に良いのだけれど。

店長さんは「なるほど」と重ねて今度はくすくすと笑い始めた。どうしよう、店長さん本人が壊れてしまったんだったら……一番心配要らなさそうなどころまで心配になつてしまつた。

……へと

「え」

「……んー、熱は、もうなさそうですね？ 良かった」

大きな手のひらが突然私の額に掛かり、今度は私の時間が止まる。顔は赤いようですけど。と重ねられて、ふわあつと益々頬が熱を



持ってしまっ。

「悪戯心が湧くくらい元気になって良かったです」

本当の本当に申し訳ありません。

もう二度と、店長さんの背後には立ちませんから、許してください。

額に手を当てられたまま、私はどんどん俯いてしまっ。

自ずと離れていく手をほんの少し寂しいと思うのは間違っている。間違っているし、それに、

「よしよし」

ぼんぼんと頭頂部を叩かれる。今度は私がきよとんとする番みただ。

「元気になったのに元気がないように見えたので」

元気ですか？ と笑顔で重ねられて、慌てて「元気です」と返した。

なんとか笑えたと思っ。

笑ってたよね、私。

やっぱり店長さんは良い人だと思っ。

だからこそ、こんな私にはあまり触れたりしないほうが良いと思っ。私が汚してしまっては申し訳なさ過ぎる。

そうっつと、少しだけ下がって「何から始めますか？」と問い掛けた。

「九時に業者がクリスマスツリーを……ってあれ？ もう過ぎていますね？」

「え、はい。私が出たのが九時でしたから」

「道路が混んでるのかな？ 事故じゃなかったら良いけど、まあ、兎に角もう直ぐくると思うんです。きたらその飾り付けをお願いします。店の中央を昨日空けておいたのでがらんとしてると思いますよ」

とんとんとローテーブルで資料関係なのか、紙の束や本を整えて積み重ねそういつて脇に抱える。

「僕はこっち片付けてから店に出ますから、先に」

「表掃いておきますね」

「いえ、それは駄目です。今朝は風が強いので、外には出なくて良いです。室内清掃をお願いします。荷物どかしただけできちんとしていないと思うので」

思うとといった店長さんに疑問符が浮かんだのを悟られた。

「夜に又小夜ちゃんが、着ない服の置き場がないと持ってきたので、片付けを手伝わせたんですよ。ああ見えて彼女は、生活に必要な基本的なこと、掃除とか、料理とかからつきし駄目なんです。きつとそのままになってると思います。直ぐに、僕も手伝いますからね」

確かに、小夜子さんの雰囲気からは所帯染みた感じは窺えない。

どれもスマートにこなしそうだけど、どちらかといえば、こなさせるほうが上手そうだ。なるほどと納得して、私は来たほうへと戻る。

「あ、そうだ！」

「はい？」

「表に並んでた天使も、ウエルカムベルもとても可愛かったです」

忘れないうちに伝えておかねばと口にすれば、二階へと上がる階段に足を掛けていた店長さんは嬉しげに瞳を細める。その笑顔に見送られて私は店へと戻った。

ちゃんといえて良かった。

私だつて部屋の模様替えとか気が付いてもらえないと、とても哀しい。

気付いてもいって貰えないなら気がついていないのと同じことだ。

私は店長さんがいつていた通り散らかっていた、濃茶のフロアリングの上の埃とか紙くずを掃き集めながら一人頷いた。

「あ」

病院に付き添ってもらったお礼はいいそびれてしまった。

次はそれをちゃんといわないと……。きゅつと片手で箒の柄を握り締めて、空いた手で少し乱れた前髪を梳き整える。

なんとなくまだ触れられた感触が残っているようで、胸がドキドキした。

## 第十二話

……

「大きいですね」

そして、高そうだ。

ツリーは九時半を過ぎてから届いた。

一瞬本物のモミの木を持ち込むのかと驚いたら、精巧に出来ている造花、ならぬ造木だった。

ウロコのようになった幹の部分とか本物と見間違えても仕方ない。木の香りがしないのが不思議に思えるくらいの出来栄えのものだ。

お店はロフトで中二階があるもののほぼ全面天井が高い造りになっているので、大きなツリーがでんつと入っても閉塞感はない。

「電飾とかはあとで僕がやりますから、危ないのでやっちゃおうと思わないでくださいね？」

念を押されて苦笑した。

はい、どうぞと、渡されたのは三段ステップの脚立。背があまり高くない私の愛用品だ。

「お客さんの少ない午前中に粗方片付けましよう？」

「はい」

「あ、病み上がりなの忘れないように、頑張り過ぎないでくださいね？」

と付け加えられて、ちよっぴり申し訳ない気持ちと気に掛けてもらって嬉しい気持ちが混在する。だから私は、こくこくと頷くことしか出来ないけど、店長さんは気にする風もなく大きな脚立を持ってお店の壁際のほうへと移動した。

さあ、私も頑張ろうっ！

気持ちだけ腕まくりする勢いで早速取り掛かった。

……

「そっいえば、店長さんって何の副業をされているんですか？」

よいしょっと少し高いところに可愛くて綺麗なリボンを吊るしながら問い掛ければ、がたんっ！ と大きな音が聞こえた。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ、平気です」

どうやら店長さんが運んでいたものを落としてしまったらしい。しゃがんで拾い集めながら、答えてくれる。

「えーっと、仕事、ですよ。うん」

あれ？ もしかして、聞いたら駄目なことだったのかも知れない。いつもなら大抵のことはさらっと答えてくれる店長さんがいいもっている。

いい辛いことなら……と口にしよつとしたら先に

「文筆業です」

と答えられた。

文筆業というのは、作家とかライターとかエッセイスト？ さんのことをいうのだろうか。なるほど。

「難しそうなお仕事ですね？」

頷いた私は、無精して脚立に立ったまま箱に手を伸ばしていた。もう、あと、ちよっ……と……と思ったら、箱がすつと手元に寄ってきた。

「こつち粗方終わりましたから、手伝いましょうか」

「わわ、ありがとうございます」

「慌てると落ちますよ」

バランスを崩しそうになれば、身体をぐつと支えてもらう。

別に落ちても怪我をする高さじゃないけど、店長さんは優しいから気にするだろう。

お礼を重ねて、その手から箱も受け取った。

中に入っているモールをぐるぐるつと巻きつけて、雪の代わりの綿をほわほわ並べたら終了だ。

「先っばこちらにください」

いつの間にか私の反対側に移動して脚立に上がった店長さんは、片手には電飾持って空いたほうを振っていた。私は慌てて箱をがさごそして、ずるずると長いモールを引っ張り出した。そこから二人でさくさくと作業を進める。

「文筆業ってどんなお話を書かれるんですか？ 童話とか？」

「だったらなんとなくピツタリのような気がする。彼の優しい雰囲気には似合っていると思うし、読み聞かせとかしても上手そうだ。」

「いいえ、もつと大人向けですよ」

「そうなんですか？ 私あまり読書家といえるほどではなくて、知らなくてごめんなさい」

とんつとステップを降りて、モールの最後を納める。あとは、綿だけだ。それは確か袋に入ってこの辺に……と、きよるきよると探して発見した大きなナイロン袋を抱える。袋の口を開いて「上お願います」と店長さんのほうへ差し出した。

「……でも、二足の草鞋を履くのは大変じゃないですか？」

「え、僕ですか？」

「はい」

「そんなことはないですよ。貴女だってもつと沢山の役目をこなしているでしょう？ 僕のなんてどっちも趣味の延長線上みたいなものですから」

何てことないように、そういつてくすくすと笑われる。

私なんて、と口にした言葉を読み込む。きつと店長さんは思ったまをいつてくれただけで、お世辞とかじゃない。

それをわざわざ否定するほうが失礼だ。

「それにね、僕には、祖父母が残してくれたものがあるので、そんなに派手なことをしなければ僕一人が生きていくくらいには困らないんです。だから遊んでいるようなもので、大した気負いもないん

ですよ」

そういつて笑うと自嘲的に感じる。少しだけらしくない気がしてしまふ。

「再婚するつもりはないんですか？」

恋人が居るのだからそう考えてもおかしくないだろうに、店長さんは端からそんなことは予定していないという口ぶりだ。

「どうかな？ 彼女が望めば考えなくもないですし、僕は嬉しいけど……でも、やっぱり多くは望みません」

なんとなくそれ以上は踏み入ってはいけないような気がした。

「貴女みたいな人だったら、穏やかで幸せに過ごせそうです。旦那さんが羨ましいですね」

「……………」

そう、なのかな？

あの人は私で後悔してないだろうか？ あんなに沢山好きだといつてくれていた夫はもういない。

私は、いつも独りぼっちだ。

それでも平気なああの人は後悔してないっていえるのかな？ そんなこと考える対象にすらなっていないのかもしれない。

店長さんは社交辞令の一つでそういつてくれたただだというのは十二分に分かっているものの、家のことを考えると気が滅入る。



## 第十三話

「……ん、……すみさん、和泉さん」

「え！ はいっ！」

「大丈夫ですか？ 具合悪いんじゃないですか？」

最後にぽふんつと裾のほうに綿を盛って「大丈夫です」と答える。なんとか平然と答えたつもりだけど、大丈夫かな。店長さんはそんな私に「そうですか？」と少しだけ心配そうな声を出した。でも、それ以上は深入りしてはいけなそう思ってくれたのか、にっこりといつもの笑顔に戻って話を変える。

「あ、少し下がってバランス見てください。偏ってません？」

いわれて少し離れて眺める。

青々としたモミの木に、飾ったオーナメントは赤いリボンが中心。リボンの中央にある石が少しずつ違う色を出していて、とても綺麗だった。

あとは中にキラキラの入った透明なボール。銀のモールに散った雪、凄く綺麗だと思う。

「大丈夫です」

とオーケーを出すと店長さんも脚立から降りてきた。

「では、片付けて点灯式でもします？」

転がっていた大きな段ボール箱を潰しながらそういつてくれる店長さんに、そうですねと頷いて私も足元を片付ける。

「そういえば、小夜子さんってどんな奥さんだったんですか？」

何でもこなすイメージがあるけどやっぱり家庭的な感じがしない。なんとなく細かいゴミを箒で集めながら問い掛けると店長さんの動きが止まった。

あれ？ と首を傾げると「小夜ちゃんですか……」と折っていた腰を伸ばしてカウンターに預け溜息。

「彼女は一人では生きられない人なんですよ」

……庇護欲を掻き立てられるタイプの可愛い奥さんということだろうか？ いわゆる、甘え上手。そういえば、家事が不得手だといってたけど、その辺は店長さんがカバーしたんだろうな。

器用そうだし。

実際お料理はとてもお上手だし。

「精神的な面ではなく、彼女は本当に何も出来ないんです。昔から不器用な子だとは思っていましたが、家事一般というレベルではなくて……あれほどは」

重ねた溜息が重い。

店長さん相当に苦労してそうだ。

「料理や洗濯や掃除が、ただ出来ないだけじゃないんです。破壊した上に引つ掻き回す天才なんですよ……僕が仕入れも兼ねた旅行で八日間くらい居なかっただけで、あの家は樹海になっていました……」

利き手で眼鏡を軽く浮かせて反対の手でぐつと目頭を押さえる姿に哀愁すら感じる。

「そんな大げさな……」

「大げさじゃないです。それを全部片付けるのに出かけていた期間の倍は掛かりました。業者さんを入れれば良かった。そうだ。そうすれば良かった」

「お、店長さん？」

あわわ、店長さんがどこか遠くへ行きそうだ。

「はあ、家電はほぼ全滅。別れるときも一人で生きて行けるのかと相当に心配したんですけど、運が良いのかそういう運命なのか、彼女が好きになるのは女性ばかりなので、今もなんとか大丈夫そうです……」

仕事は出来るんですけどねえ。僕にとっては荒行でした。としみじみ。

「荒行……そ、それは、大変そうですね」

微妙に涙目な店長さんにそれ以上突っ込んではいけないような気がした。

かたかたと、塵取りのゴミをゴミ箱へと落として終わると、店長さんが消えていることに気が付いた。黙々と作業していた上に、もしかして、お店閉めてるんじゃないかと思うくらい静かだったから全然気が付かなかった。

自分のやってることしか見えなくなるのはあんまり良くないよね。もっと全体が見えるようにならないと……そう自己反省したところ

るで「お疲れ様」と声が掛かる。

「お茶淹れてきました。一休みしましょう?」

そういつて裏からカップを二つ持って戻ってきた店長さんにごくごくと頷き「片付けてきます」と掃除道具をしまいに走る。

「今日は静かですね」

掃除道具を片付けて戻ってきた私は、カウンターに置かれた紅茶を両手に包んで、ふーっと息を吹きかける。ふわんと上がった湯気が、ふさあっと散って鼻腔に優しい香りを届けてくれる。

良い香り……。

「……あ、そうでした」

私の台詞に、店長さんはぱたと入り口に向い、ぱたんっと表面のプレートを返した。

「どうせ朝の内の一時間くらいだからと閉めてたの忘れてました」

お客さんが少ないうちについていたのに、ホントに閉めてたんですね。まあ、そのお陰で早く終わったんだと思うけど。時折店長さんのやるうっかりは、ちょっぴり可愛いと思う。ほんの少し照れ臭そうに笑った店長さんは「ああ、そうだ」とカウンター裏から買い物袋を引っ張り出してくる。

## 第十四話

「昨日色々とチョコレートも買ってきたんですよ。一緒に如何ですか？」

カウンターの傍に置いてある小さなティーテーブルの上にちょこんと載せた籠は二つ。  
可愛らしい箱から小さなチョコの入った包みが出てくる。

トリュフかな？ 丁寧に一つ一つ包装してあつて高そうだ。……  
って、値段から気にする私って、所帯じみてる？ どうしよう滲み出てたら。

「このトリュフもマカロンも絶品ですよ。どうぞ？」

と私の手のひらに握らせてくれる。  
しっとりとした金色の紙に包まれているトリュフに、丁寧にリボンまで施されたピンクのマカロン。見てるだけで可愛くて甘い気分になる。

お菓子は目で見て楽しいところも良いところだな。

そんなことを思いつつ、クリスマスカラーになった店内も見回す。  
それほど華美に飾り立てていないわけではないけれど、窓にはスプレーで『Merry Christmas!』の文字と雪の結晶が散らばっている。

壁の一部にはクリスマスリースが並んで室内の淡い明かりを反射して中央のベルが煌く。

お店の中だからキャンドルスタンドに刺さっているろうそくは電飾だけど、本物のろうそくだともっと幻想的で素敵なものになるだろう。

こんな風な品々で飾られるテーブルでクリスマスディナーとか、とても素敵だと思う。

うちにはそれを揃えて行う余裕はないけど、見てるだけで楽しい。いつか出来たら良いと思うけど、きつと夫はそんなの拘らないだろう。

そういうセンチメンタルな部分のある人ではない。残念ながら、食事も食べられればそれで良い人だ。

見た目なんてどうでも良い。

目でみて楽しむ。美味しそうだと思覚から入ることも出来ないのはとても勿体ないことだと思うのに……。

まあ、私の作ったものに、目で見て楽しいほどの芸術性がないことは確かだけど。

そんな私の現実とは違う店内を見回して、うっとりしていると「あの」と店長さんの気遣わしげな声が聞こえた。

私はぼんやりしてしまったことを注意されたのかと、びくりと肩を強張らせると全然違っていた。

「これなんですけど、クリスマスが明けるまでで良いのでお店に居る間付けてもらえますか？」

「……か、可愛いですね。私で、その、大丈夫でしょうか？ アラサーなんですけど……」

店長さんが手にしていたのは、丸くて白いファーが二つ並んでい

てその中央にはヤドリギの葉に赤いリボンと、金のベルが並んでいるヘアゴムだ。

可愛い。

物凄く可愛い……けどそんなものを自分が身につける日が来るとは。

「大丈夫。よく似合うと思いますよ?」

「そうでしょうか……」

でも、お店指定なら仕方ない。

私はそれを受け取ると、髪を纏めて留めていたクリップを抜いて、代わりにぐるぐるとそれで固定した。

「慣れてますね?」

「あ、はい。長い間、髪は長いので」

主人の好みだ。

夫と子どもが私が髪を切ることを拒否するから、このところずっとロングだ。

「可愛いですよ」

にこにこといったもらってもなんて答えて良いのか戸惑う。ありがとございますといえれば良いところなのだろうけれど、私にさうとそれをいう勇氣はない。

ふわふわと頬が熱くなり視線を逸らし店長さんが背にした窓に映る自分を見て、曲がっていないことだけを確かめた。

「あ、あとこれも如何ですか?」

店長さんはそんな私をにこにこ見ていたけれど、ふと思い出したように自分のエプロンのポケットからチョコの箱を取り出した。見覚えのあるものだ。ちょっぴり苦い思いが湧いてくる。

「立ち寄ったコンビニで見かけたんです。貴女と同じ名前のチョコですね。思わず買い占めるところでした」

……なぜっ?! なんの嫌がらせのためにつ。とか思っては駄目だよ。

多分、悪意はない。店長さんに悪意は……。

「ありがとう。ごじます」

「え、あ、あれ? もしかして、駄目でした?」

「いえっ! いえ、そんなことないです。チョコ美味しいですよね!」

「ええ、これ噛んだら口の中ではらはらって散って食感も楽しいですよね? タベひと箱一人で空けてしまいました……けど、その」

眉間に皺が寄ってます。とつんと突かれた。

すみませんっ! と慌てて謝罪して、眉間に指を当てごりごりと揉み解す。

「大丈夫、大丈夫ですよ? そんなに擦ると真っ赤になりますよ」

盛大にウケられてしまった。けれど私はそんなに面白いことはやってないと思う。

「昔、散々からかわれたんです。お菓子の名前と同じなんてちょっと恥ずかしいですよね」



学生時代なら机の上によっちゅう置かれていた。

私は眉を寄せたけど、友達は貢物だと喜んで食べていたのが懐かしい。

「モテたんですね？」

「はい？ な、何でそんな話になるんですか？」

「だって、そんな悪戯するの男ばかりでしょう？ 僕もその場に居たらやったかもしれないです。好きな子だったり、可愛い子だったりからかいたくなるものですよ」

じゃあ、僕もひと箱あげます。と手に持っていたものを押し付けられて、え、え？ と動揺しているうちに受け取ってしまっていた。問いを重ねようとしたら、お客さんだ。

「わあ、クリスマス仕様になったんですね」

「ええ、さつき終わったところなんですよ」

常連さんの感嘆の声に、店長さんはあっさり私の傍から抜けてそういつて、かちりとクリスマスツリーの電飾のスイッチを入れた。うわあ。店員の私が感嘆の声とか上げちゃ駄目だと分かっているけれど、凄く綺麗だ。電飾もカラフルなものではなくて、淡い黄色の単色。

少し赤みがかって凄く優しく温かみのある色だ。それが店内全域に光を躍らせている。

「表は昨日業者さんがやってくれているので、日が暮れたらライトアップしますよ」

にこりとお客さんに付け加えている声が届いた。

そっか帰りにはそれも見られるな。楽しみ。

そう思ってお客さん用の籠はティーテーブルの隅に置き、受け取ったおやつはポケットに仕舞って、カップを二つこっそり下のほうに持ってカウンターの裏へ移動した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2517x/>

---

恋愛不感症

2012年1月14日01時49分発行